

---

# とある科学の無尽火焔《フレイム・ジン》

冬霞

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある科学の無尽<sup>フレイム</sup>・<sup>ジン</sup>火<sup>レ</sup>焰<sup>レ</sup>

### 【Zコード】

Z0088V

### 【作者名】

冬霞

### 【あらすじ】

学園都市に七人しかいない超能力者《レベル5》。

その中でも異質な学園都市序列第六位『無尽<sup>フレイム</sup>・<sup>ジン</sup>火<sup>レ</sup>焰<sup>レ</sup>』ことカガリは、学園都市序列第一位『一方通行』と親しく付き合つ希有な人間であった。

日々繰り返される妹達との実験。<sup>システムズ</sup>

そして一方通行と過ごす、日常。

本来なら逢うはずのなかつた風紀委員の少女達と、超能力者《レベ

ル5』の第三位。彼女たちとの邂逅が、一人の運命を変えていく。

ありとあらゆる能力が効かない、『絶対無敵』の第六位。

学園都市最強の発火能力者<sup>バイロキネシスト</sup>はいつたい何を思つて物語りに関わるのだろうか。

彼の目的は？ そして物語の行方は？

交わるはずのない科学と科学が交差するとき、物語は始まる！

【とある科学の無尽火縛】！ ご期待下さい！

## 第0話『男、二人、ゲーセン巡り』（前書き）

作者は他に数本の連載を抱える身ですので、誠に勝手ながら当小説は定期的な更新をお約束出来ません。

また、作者は人間ですので完璧なチェックが出来ていない可能性があります。

原作と相違ある部分などありましたら、是非ご連絡をお願い致します。

皆様のお力添えで、すばらしい小説になればと思いますので、どうぞよろしく！

## 第0話『男、一人、ゲーセン巡り』

誰かのために生きる。

そんなことを言つた人間が、有史以来どれだけ存在したことだろうか。

高潔な言葉に聞こえるだろう。それはどこまでも献身的で、道義に法つたモノであり、誰もが賞賛を惜しまない生き方だ。

いや、この際もう生き方なんて言葉をすっ飛ばしてしまつても構わないだろう。ただ『誰かのため』。そんな言葉の中に感じる響きを、どう思つだらうか。

単純にこの言葉だけを考察するのなら、非常に多岐にわたる解釈があげられる。

たとえば具体的に何をするつもりなのか。発言の主によつてその方向性、方針というものも大いに変化してくるだろうが、それにしても共通理解として、やはり誰かのためにと言つ以上は具体的に他者の利益になる行動をとることになるのだろう。

例えば、ある人は『老人に電車やバスで席を譲ると言つ。

例えば、ある人は友人の頼みは快く引き受けと言つ。

例えば、ある人は募金を積極的に行おうと言つ。

例えば、ある人はNGOに参加して直接恵まれない地域の人々を救いに行くと言つ。

どれも程度や手段は異なるが、立派に“誰かのために”なることだ。

何ら恥じるところはない。世間一般では間違いない、『善』とされる心と、その表れである行為がそこには存在している。

しかしここで純粹に思考実験としてこの言葉を考えてみると、不思議なことがわかる。

つまり当たり前のように誰もが口にするだろう『誰かのための生き方』とは、乃ち『不特定多数の誰かのための生き方』ということになるのだ。

このことから何が分かるか。

乃ち、人は基本的に『身内以外の他人』に対する献身を『善』と捉えると、そういうことであろう。

身内に対しては献身して当然、などと極端なことを論ずるつもりはないが、儒教的な文化が大陸を通じて遙か昔から形を微妙に変えながらも根付いているからだろうか、とかく日本は身内に対しての認識が他国に対して大きく違つた。

身内に対しての親切、献身を『偉い』ではなく『当然』と評価する。これは字面だけ取るとひどく傲慢で理不尽なことのように思えるかもしれないが、日本の風土を紐解けば当然のことと、一概に非難するのも偏った見方だろう。

ある男は言った、『一人でも多くの人を助けたい』。  
ある男は言った、『大切な一人を守りたい』。

この二つの発言に、どれほどまでの違いがあるうか。  
優劣をつけることが、出来よつか。

どちらも尊く、美しい。後者にしてみたところで、いくら儒学的な精神に染まつた日本人だつたとしても文句なしに尊さを認めるはずだ。

けれど、どうするのだろうか。

『一人でも多くの人』と『大切な一人』との利益が食い違った場合は。

片方を犠牲にしなければ、片方を救えない場合は。本来ならばどちらも尊い一人の信念。しかし、手を取り合う可能性はない。一人がどちらも自分の救うべき人を、救うべき人達を譲ることが出来ないのならば、そこには争いが生まれる。

仮に法が存在するならば、

おそらく多数の利益を少数の利益が阻害することは、好まれない。あるいは状況によって、悪と断ずることもあるだろう。しかし二人の間では、そのようなことは関係ない。そこには信念と個人のぶつかり合いがあるのみ。

ならば、きっと、その善惡の判断は、

勝者にのみ、

委ねられることになる。

「 暑イ。いや、もう、暑イつか、熱イ 」

ジリジリと太陽が照りつける中、午後の麗らかな繁華街で一人の少年が、こんな天氣の中では誰もが抱くだろう苛立ちを呟いた。街を歩けばすれ違う人々の五人に一人は同じようなことを呟くだろう。今年の夏は例年に比べても随分と暑く、熱中症などの病人が多い。行政も例年より厳重に指導を徹底している。

「 なンだなンだよなンですかアこの暑さは？！ 僕を灼き殺すつもりですかア？！ 太陽サマが人間サマ焼き殺そуданンて一体なんの冗談なんですかよオ！」

「 怒鳴ると血圧が上がつて、もっと暑くなるとか思わないのかキミは。周囲も変人見る目で見てるし、僕としては少し静かにして欲しつてことです」

「あークソ、余計な体力消耗した。だから俺ア外は苦手なんだよ、似合わねエんだよ、出来れば日陰でのンびりしてたいんだよ 」

その服装は決して涼しげ、とは言い難いものであったが、それでもこれ以上脱ぐことはできないレベルなのは間違いないく、現状で暑さを凌ぐ手段も持ち合わせていないように見える。

そもそも、このような日中に何の日差し対策もしないで外に出ることには乃ち熱中症を予期させるものであるが、それにしても出ずにはいられないのが若者ならではということであろうか。

少年は帽子の一つもかぶらないままに、フラフラと人並み溢れる歩道を歩いていた。

「久しぶりに外に出るからって、調子に乗って能力を切るから悪いってことです。キミの能力だつたら紫外線はあるが、余計な熱を遮ることだつて簡単だろ?」

「あン? 分かつてねエなア、テメエは。そういうのは風情がねエつて言つたじやねエか。この殺人的な暑さを感じてこそ、わざわざ夏に外に出る意味つつのがあンだろ?がよオ」

駅前の繁華街は、モノレールの高架に隠れないところはビルの陰ぐらいいしか日陰がない。

公園があるにはあるけれど、都市設計の問題か大規模な広葉樹を植えるわけにはいかなかつたらしく、緑は日を楽しませる程度の役割しかなかつた。

ベンチや花壇の縁は学生達やカップル達の恰好の語らい場かもしれないが、こと今日この時間においては殺人的な日差しが降り注ぐ拷問椅子だ。

いつもなら楽しげに街を闊歩している学生達も、どうやら今日は涼しい喫茶店やファーストフード店内へと避難していくらしい。

「つかそれを言つなら部屋でゲームしてもいいんだよ、別に。大体よオ、家ソ中でゲームやるばつかじやなくて、外を歩きたいつつたのはテメエだろオに」

「僕は家に籠もつてるのは好きじゃないってことです」

「テメエはそつかもしれねエけどなア」

「まあ確かにキミの言つ通りかもしないけど。とはいえ横で延々弱音ばかり吐かれても困るってことです」

歩道を行儀よく縦に並んで歩く一人は、それなりに個性的な顔がそろった街の中でも随分と異彩を放つペアだった。

だるだる~と歩きながら弱音を吐いている少年は、本当に男のかと疑うくらいに華奢で、細い体つきをしている。白髪と赤目という典型的なアルビノで、顔つきは凶悪の一言に足りる。

黒いTシャツには獣の牙か爪、目のような意匠が施され、ブランド物のジーンズをしつかりと履きこなしていた。貧弱すぎることを除けば、モデルのように余計な肉がない。

もう一人は冴えない男だ。精悍で爽やかな好青年といった顔立ちをしているのだが、表情というものがなく、呆れたように笑いながらも目には感情の色がなかつた。

声には十分に抑揚があつて、間違つても機械的ではない。しかし、軽い。軽薄なわけでもなく、不愉快なわけでもなく、ただ単純に声の質が軽いのだ。

そして彼はこの暑いのに長い白衣を着こんでおり、白衣の下には多くの学校で夏服として採用される白Tシャツと黒い学生ズボンを履いている。

シャツの胸ポケットには、今は見えないが名門として有名な長点上機学園の校章が縫い付けられていて、装いは奇抜だがエリートであることを分かる人には悟らせるだろう。

黒く短い髪の毛は無造作に後ろへ撫でつけられていて、灰色の瞳でぼんやりと目の前を文句たらたら歩く友人を見つめている。

「どうか僕としては、あからざらのゲーセンを回るよりも一つのゲーセンを楽しみ尽くした方が良いと思うことです。こうやって一つで満足しないで他のゲーセン探して歩き回るから、一々外出で暑い思いをしなきゃいけないんだわ~」

「それこそ馬鹿かつてんだ。一つのゲーセンでウダウダしてたところで何が面白Hンだよ？ この辺全部のゲーセンを制覇してこそ、ゲーセン巡りの楽しみつてもんだろオガ」

「レトロゲームの醍醐味ってのは、僕にはよく分からなってことです。大体こうして徒歩で探すつていうのも納得できないんだけどな。どうして携帯の検索機能を使わないんだ？」

「俺の携帯は通話とメールしか出来ねエンだよ。研究所から支給されたやつだからな」

「そいつは無精してるなあ」

近頃この辺りの学生の中では人気のクレープ屋や、クロシヨップを通り過ぎる。

朝早くからこの珍妙な二人組は、この付近に幾つか点在しているゲームセンターを軒並み手当たり次第にハシゴしていた。

主に標的は対戦ゲーム。オーソドックスな格闘ゲームから、ゾンビを射殺する射撃ゲーム、あるいはレースゲームなど、意外にも二人はかなりの種類のゲームに精通している。

問題としては決して神業と呼べるぐらいまで洗練された腕前ではないということだが、それでも有る程度の勝ち星が得られているのならば、少々の黒星は刺激というものだろう。

学校をサボつてゲームセンターに屯<sup>たむら</sup>している連中の大体を相手取つたら、移動。また好き勝手遊び回る。そんなことを白髪の少年はやたらハイテンションで、白衣の青年は何處はかとなく呆れた様子で、それでもそれなりに楽しんでいた。

「しかしなあ、さつきのでもう五軒目だぞ？ そろそろ毎時だし、客も減る。一端休憩した方が良いんじゃないのか？」

「まあそれもそうか。俺でも腹減りまでは“反射”出来ね<sup>エ</sup>し。手近なところでメシでも買って、静かな公園でも探して食いつとすつか」

「そこまでして外に拘るか？」

「騒がしいのが嫌いなんだよ、面倒くせ<sup>エ</sup>。しかし何を食うかね。ここンとこ<sup>ソ</sup>ラファミレスで洋食ばっか食つてたし、和食つてのも捨てがて<sup>エ</sup>な」

「僕はよく分からないが、せっかく外で食べると決めたんだから手軽な物が良いんじゃないかと思うつてことです。確かホラ、この辺りにはファーストフードとかも多かつただろう?」

購買者達は基本的に、安い商品を探している。

特にこの辺りはかなりの広さに渡つて学生街だ。そしてこれはさらに基本的なことだが、金持ちの学生なんぞ一握りだ。否、そんな奴は学生じゃねえ。

学生街では安くて量が多く、氣<sup>ヒ</sup>の風の良いおばちゃんおじさんが店主をやっているような定食屋、といふイメージが多いだろうが、

駅前の繁華街ではやはりチヨーン店が持て囃される。

特に日本でも全国的に巨大なシェアを我が物としている某ハンバーガーチェーンなどは、ファストフードの代表店と呼べるだろう。

駅前の一等地を狭いながらも当然のような顔をして占拠しているその店に、白衣の青年の発言に釣られた白髪の少年は自然と視線が吸い寄せられた。

「『ナツいアツを乗り切ろつ！ 南国の香り、新作トロピカルバーガー！ 今ならセットで四百九十円！』、か

「なんだい、その無性に背筋が寒くなる煽り文句は？」

「さアな。 砂糖漬けの輪切りパイナップルとハンバーグ、あとサニーレタスってところか。ヘエ、このぶつ飛んだアイデア気に入つたぜ。買つてやろうじやねエか」

「正氣か？」

店の正面にはパツと見た感じ一畳よりは一回り大きい布の看板が垂れ下がり、そこには新商品を一押しする文句と写真が並べられていく。

どうやらこの夏、本社が自信を持つて送り出した新商品は白髪の少年が今までに口にした『トロピカルバーガー』らしい。

普通のハンバーガーに使われているバンズよりも分厚い特性のバンズには、ことさら分厚く存在感を主張する砂糖漬けの真っ黄色な輪切りパイナップル。そしてそれと一緒に普通のハンバーガーに使われているのと同じハンバーグと、色も鮮やかに緑なサニーレタス

が彩りを添えている。

見た目自体は、悪くない。実際に何処ぞの某ピザ配達チーン店ではパイナップルを主役にしたピザを販売したりしているし、肉を柔らかくするからと酢豚にパイナップルを入れる主婦の方々も少なはない。

しかし、ハンバーガーである。  
さらに言つなら、一緒に挟まれているのは普通のハンバーグである。眞で見ると豪華だが、実際に食べてみると残念過ぎる分厚さもとい分薄さのピラピラ牛肉だ。

ちなみに使つているソースは『ハワイアンソース』らしい。ハワイアンでフルーティでホットサマーな味が楽しめるそうだが、そつぱりちつとも分からない。

これに手を出すのは相当の強者、あるいは馬鹿、あるいは博打野郎だけだ。

「いや、でも気になんだろ『トロピカルバーガー』？ だつてトロピカルなんだぜ、南国だぜ？ 南国って言つたらテメエそりやハイとかグアムとかサイパンとかそっちだら？」

「まあ、多分」

「せつぱり特産品が分かんねエじゃねエか！ そこに痺れるねエ、憧れるねエ！ ひつや俺が直々に味を確かめてやんねエといけねエなア！」

「 それなりに深く付き合つてきたつもりだけど、僕にはキミのこうとうにひまわりばつ分からないうことです」

やはり暑さで頭でもやられたか、と白衣の青年は先程よりも更に呆れた視線を白髪の少年に向けた。

それなりに前に知り合った友人は、怪我はあるか病気や体調不良にも除く不機嫌および低血圧 縁がないが、確か自分の知る限り、この暑さで能力をOFFにしたのは今日が初めてである。先程は偉そうに夏の楽しみ方について白衣の青年に講釈を垂れていたが、今までは能力を使って快適に外歩きを楽しんでいたのだ。

「よし、ちょっと置つてくれるからよお、そこら辺で待つてろ。なら公園を探してくれてもいいぜ?」

「悪いけど御免被るよ、それこそ面倒つてことです。適当にブラブラしてるよ、買い物が終わったら僕の方から探しに行くから、そっちもこの辺りをブラブラしてくれ」

「おウ」

やはり暑いのが堪えているのかフラフラと、それでも何処はかとなく楽しそうに歩いていく白髪の少年の背中を見送りながら、こちらも何処はかとなく嬉しげな吐息をついた。

日差しは相変わらず殺人的な光量と熱量で彼を照らし続けるが、幸いなのか不幸なのか、彼はこの手の感覚には縁がない。

ただ流れる風景を目に收め、風と人々の声を耳に入れ、無表情に立ちつくすのみである。

「さて、昼時はとっくに過ぎてるけど三時のおやつの時間だし、

店が混んでたら時間もかかるかな。ちょっとプラプラしてこようか

フワリと白衣を翻す彼を追う視線は、不思議なことに近くを通り過ぎる幾人かだけだつた。

驚く程に、存在感が薄くなつてゐる。それは何かの能力、なんてもんぢえは当然ない。ただ、彼という人間の持つ雰囲気が、先程まで友人といった時と比べて、薄くなつてしまつてゐるのだ。

「まあ、今日も学園都市は平和つてことですよ、みんな」

人混みで溢れた交差点でやけに大きく響いた独り言は、それでも誰の耳に届くこともなく、風に乗つて、何処ぞ誰も知らない場所へと、飛んでいった。

一体その呴きがだれに届いたのか。当然ながら知るのは、呴きを放つた当人と、受け取つた誰かだけである。

## 第0話『男、二人、ゲーセン巡り』（後書き）

一方通行 ゲームマニア

主人公 巻き込まれ型不幸体质

このように、原作キャラ達は微妙に頭が緩くなっています。  
どこかほのぼのしたやりとりをお楽しみいただければ、幸いです。

## 第1話『少女、二人、繁華街』（前書き）

当作品では一話当たり一万文字以下にしようと思っていたのに、普段のペースで書いてたらアッ！という間に二万文字に。というわけで分割しました。圧縮は無理だつたよ一通サン。話の進展は、あんまり無いかも。

## 第1話『少女、一人、繁華街』

日本には、まるで嘘のような都市伝説が一つある。

否、言い換えよう、都市伝説のような都市が一つある。

言葉遊びのように思われてしまうかもしないが、事実だ。それは紛れもなく、“都市伝説のような都市伝説”だった。

曰く、外界に比べて数十年の違いを見せる圧倒的な科学技術。

曰く、実用不可能なレベルの研究が平然と実用され、そもそも理論の段階にしか至っていない理論が平然と実験の段階にあり、机上の空論だと検証すら馬鹿にされる理論を、まじめに議題として発表する。

曰く、東京都の三分の一の面積を、神奈川や埼玉に一部を及ぼせながら円形に占拠し、その総人口は二百三十万人にも及ぶ一大都市。曰く、学園都市。総人口の八割は学生であり、日夜最高レベルの学問を修めることが出来る世界最先端の実験都市。

曰く、部外者の出入りは完全に管理された、秘密の園。その学園に通う全ての学生を守るために、ありとあらゆる警備体制が敷かれた完全無欠のセキュリティ。

最先端科学によつてあらゆるもののが管理された生活に、誰もが憧れを禁じ得ない。

学園都市は巨大な場所で、相応の人数の学生が集まつている。

よつて日本全国、ありとあらゆる学生は学園都市での生活に憧れる。それなりの情報統制、そしてそれなりの情報公開がされている。とはいえ、やはり学園都市での内情というものが正確に流布するわけではない。

色々な憶測や噂が、その情報の信憑性を大きく揺らがせていく。

とはいえ概ね科学技術に対する情報は、主に学術論文などの必要性から比較的正確に外界に把握されていると言える。

如何に科学技術が、それも数十年のレベルで進歩しているとして  
も、既にある程度は公開されている情報に、噂好きとはいえた生徒が  
過度の憧れを示すことはない。

それこそ、ほんの触りくらいの情報しか無く、かつ全く実態が明らかになつていない。そんな情報にこそ学生は想像を膨らませ、仲間内での話は加速度的に肥大化していく。

「」には噂の広まり、尾ひれがつく様子の眞実が含まれているだろう。実際、学園都市については愚にも付かない多数の噂が流布している。

曰く、密かに人体実験が行われていて、学園都市に通う生徒は皆、その実験台として集められているとか。

曰く、学園都市には警備と称して暗殺機関が存在しており、学園都市に害を為すと判断された者は秘密裏に始末されるとか。曰く、その為に学園都市には全体に秘密の監視網が敷かれており、全ての学生の動きは秘密裏に全て監視されているとか。

その全てがあながち荒唐無稽な噂話だと、切り捨てる」とも出来ないのが学園都市であるのだが。

「アーリー・エニグマ—アーリー・ヒューマン・エボリューション」

さて、そんな科学最先端の街である学園都市でも、世界気候までも簡単に操作できる訳ではない。

相も変わらず、当然のことながら夏は暑い。初夏に入つたばかりだといふのに暴力的な日差しはアスファルトで綺麗に舗装された道路を焼き、優雅に敷き詰められた赤煉瓦の歩道を熱する。

学園都市においては五、六世代ほど前になる某家庭用据え置き型ゲーム機の第三世代などは、使用時にはその表面で卵焼きが焼ける程に発熱したと言うが、今の歩道も同じくらいには暑い。

靴の底が焼け付いて路面にくつついてしまつのではないかという暑さ、否、熱さに学生達は皆一人残らず肩を落とし、力なく家路に着いていた。

「なつ、何するんですか佐天さんつ？！ こんな往来でスカートめぐるなんて止めて下せーよおつー！」

「いやー『ごめんごめん、初春つてばまた無防備なお尻さらしてるもんだから、ついつっかり世の中の厳しさを教えてあげようかなーつて。

ていうか相手が絶賛アブラギッシュュ四十代な中年親父ならともかく、私はスキンシップだしねー。初春がしつかりとジャッジメントとして周囲に気を張つてることが出来ているか、チェックするのも友人としての勤めつてヤツよ」

「いやいや私この前もう止めてつて言いましたよね？！ ていうか女の子同士でもセクハラつて通用しますよね？！ 私ジャッジメントだから変態行為現行犯で詰め所まで連れていくてもいいですよね？！」

学園都市ほぼ中央に位置する、第七学区。

数多ある学区の中でも最大級に近い面積を持つ学区には、それこそ多数の学校がひしめいており、道を歩く生徒達の制服も多種多様。有名ブランドのデザイナーの力を借りた制服も多く、センスも良く独創的な服装は生徒達の自尊心の類を大いに刺激する。中には制服のデザインで学校を決めようとした結果失敗撃沈した学生も多い。

その中でもシンプルな部類。真っ白な生地に紺色の襟<sup>カラー</sup>に白いライン。そして赤いタイ。スカートは膝上少し上の落ち着いた丈。

世間一般的な女学生の制服をパターン化したら、紛れもなくトップ<sub>3</sub>には入るだろう代表的なデザインのそれは、ある意味では野暮つたいと言えるかもしれない。

生徒からも賛否両論だ。中には奇天烈なデザインの制服もあるから何とも言い難いらしいが、やはり学生として個性は拭いがたい。

しかし学園都市の清潔なイメージには十分以上にマッチする。そんな制服を着込んだ女子中学生が一人、姦しいという表現がこの上なく似合う雰囲気を辺りに撒き散らしながら騒いでいた。

「今日のパンツはピンクのストライプかあ。別に悪くはないけど、ちょっと王道過ぎない?まあこれが水色だつたら本当にテンプレ乙ってカンジだけど、もうちょっと上品で大人っぽい下着でも文句は言われないっていつか」

「なななんで私の下着のことまで佐天さんに言われなきやいけないんですか?!! もういい加減にして下さいよーつ!」

一人は背中の中程まである長い黒髪を真っ直ぐに下ろし、白い花の意匠をした髪留めをアクセントにあしらつた少女。

勝ち気そうな眉毛が特徴的で、今も気つ風の良い姉御肌といった笑みを浮かべ、目の前で慌てふためきながらスカートめくりを抗議する友人をからかっている。

もう一人は百を超える学生の中に埋もれない強烈な個性を放つ少女。いや、顔立ちはそこまで目立つものではない。可愛らしいが、悪く言えば十人並み、良く言えば親しみやすい美少女である。

一際異彩を放つのは短めに切りそろえたショートカットの頭の上にのせられた、花冠。

子どもが遊びで作るようなレベルではない、色とりどりの、見事な花の盛り合わせだ。炎天下だというのに頭の上の花は元気に咲き誇り、見慣れたのだろうか、道行く生徒達からの視線は奇異を含んだものではないが、彼女自身が都市伝説の一つになりかけているのは、知らぬは本人ばかりなりというものであった。

「ふう、初春は毎日ホントにからかいがいがあるよねえー。  
ところで初春は今日も風紀委員(ジャッジメント)のお仕事？」

「えーと、今日は確かシステムのチェックとかで支部に入れないとよ。私、せっかくの機会だから支部のPC根こそぎ魔改造しようと思つてたのに、入るなって言われて。

だから部屋のお掃除でもしようかと思つてたんですけど。佐天さんは何が用事でもあるんですか？」

「ああ、そりや良かつたわ。ちょうど今日さ、一一一の新譜が発売されるっていうから、CDショップに寄りたかったのよねえ」

「CD・ショッピング、駅前広場の近くにある店ですか？」

「そうそう。最近改装したとかでキャンペーンやってるからまぁ、せっかくだし初春に付き合つてもうおつかと思つてたんだけど、どう?」

「いいですよ。ヒマでしたし、一人で部屋の掃除するのも寂しいですからね」

相も変わらず日差しは暴力的だが、それでも日常は普通に存在している。

暑いからといって部屋に閉じこもるのは残念な大人の選択肢かもしれないが、現在進行形で青春を謳歌している彼女たちにとつてはあり得ない選択肢だ。

学園都市では技術が進歩している分だけ、家の中についても娯楽は数多い。特に髪の長い方の少女、佐天 佐天涙子にしてみれば、趣味によつてヒマなど簡単につぶれてしまつ。というか潰れてはいけない時間まで潰してしまい、テスト前に痛い目を見ることも多い。しかし自然に、外に出ることを選ぶのも彼女たちぐらいの年頃だからこそだろう。実際あまり長時間炎天下に居ては熱中症の危険性すらあるのだが、そこまで考へてはいないうつだ。

「トンクス。じゃあ突つ立つてのも何だし、さっさと行こうか! CD・ショップに寄る前に喫茶店で涼んでくのもいいし。このままで立つてるとこんがり焼けちゃいそうだわ。日焼けって意味じゃなくてさ」

「それもそうですね。早めに行かないと混んじゃうかもしれませんし、急ぎましょうか」

第七学区は巨大だが、その分だけ駅やバス停なども充実している。涙子や初春、初春飾利の通う柵川中学も駅から微妙に離れたところにあるから、バス路線も通っている。とはいっても生活に必要な設備だから学生は格安で利用できるとはいえ、やはり混む。

特に朝、一分一秒でも早く学校に急ぎたい時などに混んでいて乗れなかつたなんてことになつたら悲惨だ。そのためにそれなりの数の学生が徒歩通学を選択していた。

「あーあ、今日は五限が長引いちゃつたから、それだけでも不利よねえ。教師もプロなんだから時間通りに終わらせるのが職務意識つてものだと思うんだけど」

「まあ先生方にも色々あるんですよ。ウチの中学校は低レベル能力者ばかりですから、指導に熱も入っちゃうって前に別の先生も言つてましたし」

「……どれだけ指導に熱入れられても、それだけで能力が伸びたら苦労はしないんだけど、ね」

「あ」

何処か自嘲気味に呟いた涙子に、初春は逡巡気味に声を発した。  
彼女の事情からすれば、確かに褒められたものではない発言も納得出来る。だからこそ自分が慰めの言葉を持っていないことも、

自分自身への苛立ちの一種を感じさせられた。

学園都市を、外の世界に対して神秘的な、非現実な存在にしている要素の一つ。

それは外部との交流を立つ閉鎖的な体質でも、数十年分も進んだ  
オーバーテクノロジー  
超科学でもなく、秘密警察やら暗殺組織やらの根も葉もない と  
も言い難いが、そういうた確証のない噂でもない。

「 すいません、佐天さん」

「え？ ああ、別に初春が謝るようなことじゃないでしょ？  
私が無能力者レベル〇なのも、一向に超能力者レベル五はおろか低能力者レベル一にすらな  
れないのも、初春のパンツがピンクのストライプレベル一なのも、ぜーんぶ  
誰が悪いわけでもないでしょ？」

「私のパンツは関係ないですよおつ！！」

超能力。  
ESP

近代に入り、科学技術が進歩して、魔術や呪いや占いの類の噂の  
信憑性が薄らいでいくのに代わり、根も葉もないトリックやペテン  
の類として広まつた噂の一つ、と認識されている。

- 曰く、手も触れずに物を動かす。
- 曰く、人の心を読む。
- 曰く、心で会話をする。
- 曰く、遮蔽物の向こうのものを見ることが出来る。
- 曰く、未来を幻覚として見る。
- 曰く、瞬間移動をする。

曰く、火を出すことが出来る。

昨今ではバラエティ番組などで見せ物のよう登場したり、詐欺師としてトリックを暴こうといつ企画が生まれたり、与太話の一種であった。

もちろん中には、あるいは本物がいたのかもしれない。けれど当然のようにそれを確かめる手段などなく、結局のところ大抵が正銘の詐欺、ペテンの類である。

しかし、そう、つまり、偽物があるということは、本物があるということだ。

乃ち、サイコキネシス念動力。  
乃ち、サイコメトリ読心能力。  
乃ち、テレパス念話。  
乃ち、クレイヤボヤンス透視能力。  
乃ち、ブレーカーション予知。  
乃ち、テレポーテーション空間移動。  
乃ち、バイロキネシス発火能力。

「薬も脳開発も、なんか自分が能力者に向かつて前進してるって実感ないし　。ホント、あんなので実際に超能力者になれるのかなあつて思っちゃうわよね」

「まあ実際にウチの中学校からでも異能力者や強能力者も出でますし  
。まあ年に一人か二人いれば良い方だつて言いますけど」

この、学園都市が外の世界に對して異常と言われる所以が、これだ。

昔から与太話として信じられていた超能力の、超能力者の開発。

それがこの学園都市の最大の特色。

約一百三十万人の学生は、基本的に残らず能力開発を受け、超能力者への道を歩んでいた。

無能力者。六割方の学生が当てはまる、能力を発現出来なかつた学生。全く能力が無いわけではないが、それでも所謂落ち零れとして扱われてしまう大多数が持つ力。

低能力者。多くの学生が当てはまる、スプーンを曲げる程度の力。

異能力者。レベル1と程度は大体同じ。日常ではあまり役には立たない力。

強能力者。レベル1やレベル2とは異なり、はつきりと観測され、日常では便利だと感じる程度。このあたりから、能力的にはエリート扱いされ始める力。

大能力者。このあたりになると圧倒的な威力を持ち、軍隊において戦術的価値を得られる程の力。

超能力者。学園都市でも七人しかいない、一人で軍隊と対等に戦える程の力。

能力者はこのように5段階の区分けがされ、自らが持つレベルによつて学園都市から受ける恩恵も様々だ。

具体的に言えば奨学金の増減や入学する学校の制限、利用できるサービスの違いなど。特に基本的にはアルバイトをせずに奨学金で生活をする学生にとっては、収入の増減はダイレクトに生活に影響する。

だが、どちらかといえばそういうことは些事でしかない。結局のところ学生の為の街なのだから、生活必需品の類は非常に安価に設定されているのだから。

「あれ、でもウチの学校で強能力者なんていたらすぐにエリート扱いで噂になつてゐるはずだけど」

「そういう人つて、すぐに他の学校に転校しちゃうらしいですよ。ホラ、ウチの中學じや高位能力者向けの学習環境が整つてないらしいですから」

「ああ、エリート様はもつと良い学校に行つちゃうつてわけね。はあ、大星霸祭でも良いトコなしだし、イマイチ冴えないよねえウチの学校」

「大星霸祭だと、高位能力者の数が勝負を分けますから。。。私達の学校は、そもそも無能力者レベル0と低能力者レベル1が殆どを占めてますから、高位能力者が多い中学相手だとフルボッコですよね」

何処の街にもチンピラはいる。同じように、学園都市の路地裏にも不良が溜まつていて、問題を起こす。

けれど学生ばかりの都市だから、学生ならではの問題も他に比べて多くなるのだ。

乃ちそれは、能力による格差と虐待、偏見。それらは能力のレベル別に厳格な区別がされている学園都市だからこそ、外の世界に比べて根強く息づいていると言えた。

虐める方もそうだが、虐められる方の弱者意識にも、きわめて根強く。

「最近は高位能力者による、無能力者狩りなんても流行してるので上層部でも問題になつてゐるらしいですよ？ 佐天さんも、一人で路地裏とか歩いちゃダメですよ！」

「分かっているつてば、初春は心配性だなあ。第一このあたりの中学生はみんな似たり寄つたりで、高位能力者なんて数えるぐらいしかないじゃないじゃないの」

「やうはいっても、第七学区は繁華街とかも多いですから」

暫く歩くと店も増え、日陰側に寄れば日差しも防げる。その分だけそちらに通行人も多めになるから歩道は随分と混むが、それは仕方がないことだろう。

この辺りはまだまだ長閑で、学生達が繁華街と呼ぶようなところではない。せいぜいが学校帰りによる喫茶店と言つたところあり、野暮つた。

それにこの辺りで喫茶店なんかに入つてしまつては、また駅前まで長く暑い道のりを堪え忍ばなければいけなくなる。それは勘弁被りたいところだった。

「ところで初春、なんかいつもすつじへ忙しげに、具体的に何やつてるんだつけ？」

「え？ 佐天さんだつて風紀委員ジャッジメントがどんな組織だつてことぐらいは知つてるでしょう？」

「そりや、アンチスキル警備員アンチスキルと並ぶ学生主導の治安維持組織つていうお題目ぐらいなら知つてゐるし、パトロールしてゐる風紀委員ジャッジメントは良く見るよ？ けどさ、初春が仕事してゐるところなんて見たことがないし、風紀委員ジャッジメントの支部だつて見たことないし。そこそこ詳しつく

「まあそれは確かにそうですけどね

初春が右袖に付けた緑色の腕章。盾をモチーフに扱つた、外の世界では警察官も付ける腕章に似たデザイン。

学園都市にある一つの治安維持組織の内の一つ、**風紀委員<sup>ジャッジメント</sup>**。学生達によつて組織され、実際の警察官と同じような役割を担はれた事実上の警察組織。

不完全ながら逮捕権なども持つた権力構造の一端でありますながら、その殆どを学生だけで占められており、いわゆる文字通り、一つの学園を守る風紀委員といつて体だった。

「そうですねえ、まあ一番の仕事はパトロールつてことになるんですけど、その道すがら色々な仕事をしますよ。」

「//拾いとか、失くし物探しとか、迷子案内とか」

「意外に地味なんだなあ」

「地味言わないで下さーい！ いいですか佐天さん、事件なんて起こらないに超したことはないんです！ 私たちは所詮学生なんですから、学生の視点からの風紀管理が必要なんです。押しつけた風紀なんて学生としても楽しくも何ともないですからね。」

私達、**風紀委員<sup>ジャッジメント</sup>**の本当に仕事つていうのは、そういう草の根からの治安維持とか風紀管理つてヤツですね！」

「すうじに難しい」と言つてゐるけど、自分で分かつてゐる？

「べ、別に研修で教えてもらつたことをそのまま口にしてるわけじゃないんですよつ！ 分かつてないから暗記してテスト乗り切つた

つてわけでも、ないんですかね？！」

**警備員は逆に、教員によつて構成された治安維持組織である。**

実際の逮捕権や拘留権などは主に大人であるこちらが担当している。しかし如何せん相手は学生、乃ち、超能力開発を受けた学生が相手では所詮一般人である教員には荷が重い。

何せ生身でトラックをぶん投げたり電撃飛ばしたり火炎放射器よろしく炎を飛ばして来たりする学生である。戦車か装甲車でも持つてこないと相手にならない。

結局のところ風紀委員の後始末、あるいは後詰めとして存在している点もあつた。もちろん、学生では不十分な判断力を補う役割もあるのだが。

「まあ総括すると、やっぱりパトロールが基本ですね。通報された場所に急行することも多いんですけど、やっぱり支部で籠もつっていても出動が遅れますし。

まあ私は低能力者ですから戦闘は役立たずですし、支部で情報整理とか後方支援をやってることが多いんですけど」

「へえ、そういうえば初春つてやじいじぐるの好きだったよね。適材適所、ってヤツかしり」

「そう言つてもうるさいと嬉しいんですけど まあ、高位能力者に憧れはありますよ、やっぱり。学園都市の学生ならみんなそう思つてゐるはずです」

もう十五分ぐらいは歩いたことだろうか、次第にビル街に近くな

つて来た。

ここまで来ると学生の数も多くなつてくる。様々な制服は、しかし通い慣れた今となつては物珍しいものではない。

超能力を学ぶ学生達とは言えども、本質は外の世界と全く変わらない。道行く顔が無駄にキリリとしていたり、無駄に理知的であつたり、逆に暴力的に見えたりといふことはなかつた。

結局のところ人間の本質なんてものは早々変わるものじやないのかもしないと、佐天はぼんやりと考えながら歩いていた。

「パトロールつて、いつもやつてんの？ 初春つてば週の半分は風紀委員のお仕事なんですーつて忙しいけど」

「大体は夕方、暗くなるまでぐらいでですね。風紀委員も学生ですから、例外を除いて完全下校時刻になつたら軽々しく出歩くわけにはいきませんし」

「その後はどうするのよ？」

「警備員の出番ですね。まあ基本的には人通りとか無くなるはずですから、仕事も楽で良いって聞いたことがあります」

モノレールの駅から少し離れた、しかし繁華街にはほど近く、遊びの前に寄るにはちょうど良い場所。

そんなところにある大きめの喫茶店。学園都市内でしかないチエーン店のファーストフード。既に放課後を楽しむ学生で溢れている。五限の能力開発が長引いたせいか、一人分ならやつとという席しか空いていない。

「ふーん、成る程ねえ。パトロールなんて言葉だけ聞くと簡単そうだけど、色々と頑張ってるんだ、初春は」

「まあ雑用みたいなもののばっかりですけどね。  
でもパトロールの最中に因縁ふつかけられることはまあ、無いわけじゃないんですよ？ 路地裏で屯<sup>たむろ</sup>して<sup>ジャッジメント</sup>する不良とかだと風紀委員に恨みを持つている場合も多いですし」

「へえ つて、それって危ないんじゃないの？！」

「大抵は白井さんと一緒にいますから、瞬殺してくれんんですけどね。 前に一回、ちょっと一人の時に絡まれちゃったことがあって、その時は通りすがりの人<sup>ジャッジメント</sup>が助けてくれたから問題は無かつたんですけど」

「通りすがり？」

夏場に無性に飲みたくなる不思議飲料、マクロシェイクを頼んで席につく。

店内は冷房がガンガンに効いていて快適だが、全面ガラス張りの外を見れば暴力的な日光は相も変わらず道を歩く学生達を殺したいのかという勢いで仕事をしており、まるで天国と地獄だつた。

「夏の太陽つてホント殺人的よねえ 。 こうでなきや夏！ つて感じはしないんだけど、それでもやっぱり嫌になっちゃうわよねー」

「まあ学園都市でも天候操作出来るレベルの能力者は限られています

し。ていうか佐天さん、なに勝手に私のシェイク味見してるんですか？！」

「私はバニラだし、初春のストロベリーはどんな味かなーって。ほら、初春も私のバニラ味見してもいいからさあ」

「そういう問題じゃないです　　つて、こんなに飲んで！　もー仕返しだすっ！　ポテト下さいねっ！」

「あーどりどりどり、お好きなだけ。私ケチャップ貰つてくるねー！」

楽しそうに跳ねてカウンターへと向かう涙子に、初春は軽くため息をついて遠慮無くバニラシェイクを啜つた。

確かに涙子は強引でお調子者なところがあるが、やはり良い友人だ。自分は振り回されがちだけど、不思議なことに何だからで楽しい。

なぜ一緒にいるのかと問われれば、やはり楽しいからだと答えるのだろう。　パンツめぐるのだけは止めて欲しいけど。

「はあ、ホント佐天さんは台風みたいな人です　　。少しごらい私が佐天さんを振り回せたら、楽しいのに　　ツ？！」

瞬間、轟音。そして震動。

机と一体化された椅子を激しい震動が襲い、思わず手にしたバラショイクを取り落とす。緩く蓋を閉じられていたのだろう、簡単

に中身がこぼれ落ちてしまった。

「な、何つ？！ 何なんですかっ？！」

慌てて爆音がした方向へ視線を走らせると、そこは店の入り口だ。綺麗にガラスが張られていた自動ドアは無惨にも焦げ付き、爆発し、吹き飛んでしまっている。床まで真っ黒で、かなり高威力の火炎か、あるいは電撃で攻撃されたのだろう。

基本的にはカウンターの下に、警備ロボットが据えられているのだが、攻撃はそこまで及んだのか、警備ロボットの格納スペースは完全に破壊されてしまっていた。

「手を挙げろっ！ 全員その場から動くなっ！」

学生達が自由を謳歌する放課後。

その放課後に不釣り合いな怒鳴り声を上げたのは、誰が見ても明らかな格好をした二人の男。

久しぶりの非番から、仕事へ。

ジャッジメント

風紀委員の職場が、そこには広がっていたのだった。

第1話 「少女、一人、繁華街』（後書き）

初春  
佐天  
PC狂  
ネラ  
どうしてこうなつた

## 第2話『男、少女、第六位』（前書き）

ここまで書き溜めていた分が終了。早いですね（汗）。  
まあ一話につき五千文字前後を目標にしているので、かなり早いペ  
ースで更新できるでしょう。何故、倫敦の方は一話あたり一二万文字  
なんて馬鹿みたいなことになつたのか。

## 第2話『男、少女、第六位』

「手を挙げろっ！ 全員その場から動くなっ！」

すぐさま風紀委員ジャッジメントの腕章に手を添えてカウンターに向かつて走り出した初春を、年若い男の怒声が遮った。

立っているのは一人の男。一人は何の変哲もない白いワイシャツに、学生服の黒いズボン。もう一人は醜悪な髑髏をデザインしたTシャツにジーンズ。どちらも時代錯誤な黒い日出し帽を、この暑い夏のさなかに被つていて、顔は分からぬ。

この状況を見て誤った判断をする者は一人もいないだろう。乃ち、強盗。

「おいコラ、店員のお前！ 警報は無駄だぞ、電気系統は俺が電撃で全部潰した！」

「レジにある金を全部この袋に詰めなっ！ 金庫の金もだ、早くしろー。早くしねえと丸焦げにするぞ貴様らつー！」

状況判断。

店の出口は一つだけ。非常口はどいつもやら、カウンターの向こう、キッチンにあるらしい。

ガラスを破れば出られないことはないが、もちろんそれは犯人に

気づかれる。そうしたら、カウンターの方にまだ残っている客が襲われるかもしない。

犯人の能力は、ざつと見て強能力者以上。<sup>レベル3</sup>簡単に人を殺せるだけの能力を持っていることは間違いないのだ。

「もしもし風紀委員第一七七支部ですか？ 固法先輩、私は、<sup>ジャッジメント</sup>  
初春です。<sup>アンチスキル</sup>第七学区中央駅前ファーストフード店で強盗事件発生、  
至急警備員の派遣を要請します！」

『初春さん？！ 分かつたわ、急いで白井さんを急行させるから、関係者の安全を最優先に行動しなさい！』

「了解しました！」

再度、状況判断。

犯人は二人。どうやら発言から鑑みるに、夏仕様の学生服は発電<sup>エレク</sup>トロハンド能力者、そしてもう一人の能力は不明。だが拳銃を持つている。既に店員は抵抗を諦めて金を集めしており、犯人達はニヤニヤと自らの成功を確認して笑っている。

「佐天さん！」

視線を移動すると、あろうとか犯人から一番近い場所に涙子がいる。

拳銃の銃口は涙子に向けられており、わずかに身じろぎするだけで引き金は引かれてしまうことだろう。

「これじゃ手が出せない。お金、取られちゃう」

再々度、状況判断。

ここまで完璧にあいての思惑通りに言つてしまつと、この場での捕縛は不可能。なにせ自分は低能力者であり、戦闘手段は皆無に等しい。

念のためスタンガンを携帯してはいるのだが、そういうえば発火能ネシスト力者に熱が効きにくいのと同様、発電能力者にはスタンガンなどの電気系の武器が効かないと聞いたことがある。

ましてや拳銃やら能力やらで人質が取られてしまつてはいる状況で下手に動くと、被害を拡大させる恐れがあるのは、風紀委員の研修で耳が痛くなる程に聞かされていた。

「仕方ありませんね、ここは人質に被害が出ないように注意して、応援の到着を待つしか」

一人の学生にやれることには限界がある。それに、事件を未然に防ぐのと同様に、事件が起つた後、あるいは完了してしまつた後にも解決すれば良い話。

逃げた犯人を追跡し、然る後に捕縛。これも十分に風紀委員の仕事である。

初春はカウンターから遠い位置のテーブル席にいることを利用して、犯人達から見えないように近くの監視カメラと風紀委員第一七七支部のPCとの接続を開始した。

こんな大事件が起きてしまつては、支部のメンテナンスチェック

も中止。となると諦めていたPCの魔改造だつて出来るかも知れない。

「よし、これで全部か？！」

「は、はい、金庫の鍵は店長が持つてますので、開けられませんで  
したが」

「ちつ、シケてやがるな。おい、ずらかるぞっ！！」

ପ୍ରକାଶକ

じりやらレジの金だけを詰めたらしい。用意した袋はぺたりと残念な量を示しており、憎々しげに舌打ちした夏服の男が、袋を掴んで走り出す。

Tシャツの男は夏服の男に遅れる」と数拍  
てから走りだそうとして  
拳銃で回りを牽制し

「おつ？」

「あン?」

ドン、と軽い音がして、あからさまに緊急事態の店内に入ってきた一人の少年にぶつかつた。

見事なまでに真っ白な白髪に、小柄な体躯。牙か爪のようなデザインの黒いTシャツを着て、黒いジーンズを履いている。まるで女

かと見まじう程の、華奢な少年だ。

もしかしたら体重は自分よりも軽いのではなかろうか。腕や足は大の男が握つたら折れてしまいそう。

が、よろめいたのは少年ではなく、強盗の方。

「な、なんだよこのガキ?!--」

「 なんだよ、はこっちの台詞ですか? つかホントに何なんですか、この有様はア? 僕ア新発売のトロピカルバーガーセット買いに来ただけなんだがなア。」

あ、ドリンクは「一ヒーな。アレ普通のドリンクよりも二十円高いからよ、セツトにするとオトクなンだよなア、そう思わねエか?」

「ば、馬鹿にしてんのか貴様!」

「 はア?」

「 拳銃<sup>パン</sup>が見えねえのか! サッサと其処を退きやがれ!」

「 ハ、ハハ、ハハハ、もしかしてそんなチンケな玩具でこの俺にケンカ売つてやがンですかア?」

「冗談キツイぜおい、俺を殺すつもりなら核弾頭でも持つてきなア!」

「な、嘗めんなこの野郎! いいぜ、死ねクソガキ!」

「や、やめて下さっこ!!--」

銃声、一回。

真っ直ぐに少年の額に向けた銃口から放たれた銃声は、過たず少年の額を穿ち、血の花を咲かせる。

そう考えた初春は思わず風紀委員ジャッジメントの腕章を隠すことも忘れて身を乗り出し、叫び声を上げた。

まさか、一般人に犠牲を出してしまつとは。こんなジャッジメントの風紀委員失格

「 が

「え？」

「 がああああああああツ？！」

だがしかし、悲鳴を上げたのは少年ではなく男の方。

拳銃を取りこぼし、自らの足を悲痛な叫びを上げながら押さえる。見ればジーンズは太股の辺りが真っ赤に染まっている。

「！」このクソガキ、何しやがつたあああ？！」

「ハ、別に何もしてませンけどオ？ テメエが何かしたンじゃねえのかア、ん？ “俺に向かつてその玩具ぶつ放す”とか よオ！」

「！」お ツ？！」

一閃、少年の振り上げた足が唸りを上げて男の腹へと吸い込まれ

る。

どれほどまでの威力だったのだろうか、その足は過たず“水月”と呼ばれる急所にぶち当たると、男の体を浮かせてカウンターの向こう、キッチンまで軽々と吹き飛ばした。

「な、何なのよコレ……！」

「佐天さん大丈夫ですかっ？！」

「あ、あたしは大丈夫、けどコレはいったい……」

すぐさま涙子に近寄つて安否を確認すれば、幸いにして無傷。ただし腰が抜けてしまったようで、ぽかんと今さつき強盗犯の片割れを蹴り飛ばした少年を田を見開いて見つめている。

「アーチ、悪いけどトロピカルバー ガーセット貰えますウ？ ドリンクはコーヒーで。あ、あとコーラ一つ追加で」

「す、すいませんお客様、こんな調子ですから、ちょっとじょ注文は。」「いら君、早く警備員に連絡を！」

「チツ、使えねエ。 オイお前、そこの脳天花咲か女

「そ、それもしかして私ですかっ？！」

こんな有様だといふに因るしく注文しようとする少年を、それ

なりの地位にいるらしい制服の違う店員が冷や汗混じりで丁重に断り、もう一人の店員に檄を飛ばす。

苛々と舌打ちをする少年は続けて呆然としている初春達に振り向いて、言った。

「お前さア、ジャッジメント風紀委員だろ？ さつき逃げた片割れ、追っかけなくていいのかア？」

「え？ あ、はい、佐天さん失礼します！」

「ちょ、ちょっと初春ツ？！」

慌てふためき、走り出す。幸いにしてもう一人の犯人が逃げ出した方向は目にしていた。

応援が来るまで、せめて力のないジャッジメント自分でも相手の居場所ぐらいは把握しておかなければいけない。ジャッジメント風紀委員としての使命感から、初春は自分の出来る限りの力で足を動かした。

「ま、待つて下さい！ ジャッジメント風紀委員ですっ！」

「何いつ？！ くそ、こんなに早く！ んの野郎なにしてやがつた？！」

人通りが邪魔したのだろう、男が通った後は人が疎らになつて逃げた方向を見ていたから、追うのは足が遅い初春でも何とかなつた。そもそも覆面なんて付けた人間が目立たないわけなどないのだ。どう

しょつもなく、分かりやすかつた。

「クソが！ こんなところで捕まるわけにはいかないんだよッ！」

「きやあつ？！」

電撃、疾る。

流石に逃げながら正確に電撃を追つ手である初春に当てるのは難しかつたらしく、それでも低能力者<sup>レベル</sup>の初春を怯ませるには十分だった。

「なんだよ、途中まで上手くいってたのに こんなところでやめられねえだろうがあ！」

焦燥感ばかりが先行し、走り続ける。

粗雑な計画に見えて、実は入念に練っていた。人の出入りをしつかりと観察して、店員のシフトも確認していたし、風紀委員<sup>ジャッジメント</sup>や警備員<sup>アンチスキン</sup>の巡回が無い時間帯も見計らった。

もう止められないのだ、ここまでやつたら途中で投げ出すことなど出来ない。後ろについていた相方は既に捕まってしまったのかもしないが、ここまで来たら徹底的に、逃げ切つてやる。

「チイツ、通行人か！ おいテメエ、そこを退けえ！！」

そう必死で思いながら走つてはいるが、目の前に人影が見えた。

長身で肩幅は広く、髪の毛を無造作にオールバックに纏めた男。年頃は高校生か、ともすれば大学生ぐらいか。この暑いのに長い白衣を着込み、奇妙な存在感を辺りに振りまいっている。

顔立ちは「ぐうぐく」普通。どちらかといえば精悍な方かもしけないが、表情はぼんやりと、何処か空虚な色をたたえていた。

細身の体には強大な力が眠つているようには、ちつとも見えない。確かに骨格はがっしりとしているかもしだれないが、全体的に肉が足りない印象で、何処はかとなく不自然。

しかしどんな存在かは知らないが、無視できない。そんな空気を感じ、強盗犯は足を止めた。

「ん？」

「そこを、退けって、言つてんだろうがあああーー！」

右手に電撃を収束、放電。

何条もの、何万ボルトもの電流が立ちつくすままの白衣の男を襲う。人体を感電死に追い込むには、いや、もはや感電などという生温いものではなく、やけどにまで追い込んでおかしくない威力の電撃。

それが何の容赦もなく、炸裂した。

「え？」

「ん？」

「ふむ、何をしたのかな、キミは？」

「何い？！」

間違いなく全力の電撃だった。自分に放てる、最高の電力だ。冷静になって考えてみれば人一人ぐらいなら十分に殺せるだけの威力だったはずなのに、直撃したはずなのに、どうして目の前のこの男は平然と立っているのだろう。

「ああ、なるほど、キミは『発電能力者』か。悪いねボーヤ、僕にはそういうの効かなかつたりすることです」

「き、効かない？！　お前まさか俺と同じ、いや、俺より高位の発電能力者？！」

「お？　あー、いやいや別にそんなことはないさ。僕の能力は何の変哲もない『発火能力<sup>パイロキネシス</sup>』だよ」

白衣の下に着込んだ白いワイシャツに焦げを作りながらも、合点がいったように白衣の男は笑った。

ぞくり、と背筋に悪寒が走る。“とある事情”で自分の能力に最近自信がついてきたというのに、圧倒的な差を感じさせられる、恐怖。

「ただし残念なことに、キミと僕では強度<sup>クレベル</sup>が違うってことですか？」

「おああああああああああああああ？」

瞬間、周りの大気が燃え上がり、強烈な熱を感じた。  
それは自分を焦がすわけではない。が、不思議にも意識  
遠のいて

「ふわあー、凄い」

「まあ、こんなモンかな。怪我させないよう制圧するのも、僕の  
能力だと一苦労つてことです」

追いかけてきた初春は、その一部始終を見て息を呑んだ。  
白衣の男から疾った炎は強盗犯の周囲を囲み、燃焼によって酸素  
を奪い、それによつて強盗犯の意識を奪つたのだった。

倒れた強盗犯を見れば、集中的に酸素を奪つたはずの顔面には焦  
げ一つない。どれだけ精密な能力制御だろうか、尋常ではない精度  
だ。

「おや、キミは確かに前に不良に絡まれてた残念な風紀委員(?)  
ジャッジメント？」

「残念な?! ていうか貴方はあの時の?! そ、その節は本当に  
ありがとうございましたっ！」

ちらりと視線をこちちらに移した白衣の男が、ぱちくじと田を瞬か

せる。

初春にとつては、街中ではあまりにも特徴的な服装と、遭遇した状況からしつかりと記憶にあつた人物。

「いやあ悪いね、街中で能力使つちゃつたけど、これ見逃してくれると嬉しいってことです」

「あ、それは犯人逮捕に協力してくれたということで処理できるから、問題はありませんが。。。つて、ああ早く警備員に連絡しないとつ？！」

「事情聴取とか、必要なのかなあ。連れがいるから勘弁して欲しいんだけど」

慌てて携帯を取り出し、アンチスキル警備員へと逮捕の要請をする。実際に護送などの機材を所持しているのは風紀委員ではなくアンチスキル警備員だ。

犯人を引き渡し、報告書を作成して風紀委員の仕事は終わる。ここからが本番だと言つても過言ではない。

「 そうですね、そちらはアンチスキル警備員の方の管轄ですから私には何も。でも協力者つてことですから、簡単に終わらせてくれると思いまよ！ わ、私も協力しますし！」

「そりやそろかい。いやあ、ありがたいってことです。連れはすぐ機嫌を悪くするもんで」

「はい、ありがとうございます。 あ、そういうえば電撃受けてま

したよね？！ だ、大丈夫なんですか？！」

へらへらと笑う白衣の男の腹を、慌てて初春は確認した。  
傍目に見ても強力な、事故レベルと呼んでも良い電撃だったのだ、  
某かの手段で防御したのかもしれないけれど、不安は残る。

「あれ、本当に無傷 ？」

「 あんまりジロジロ見ないで欲しいんだけどな。少しばかり恥  
ずかしいってことです」

「うわあっ？！ す、すいませんっ！」

見ればシャツに焦げ跡はあるが、確かに掠り傷すら見あたらない。  
一体どういう理屈だろうか、服が焼け焦げていて、肌は無事という  
のは不可思議なことだ。

例えば服越しにスタンガンを押し当てられたりしたならば焦げ跡  
が無いのも納得できるが、実際に服が焦げているのだから、電流を  
無効化したとしても、熱の跡が残つていておかしくないのである。

「ホントに、大丈夫なんですか ？」

「 ああ、ちょっとした体质つてことです。ああいう攻撃は効かない  
んだよ。

それよりも服を焦がされた方がよろしくないね。まあ、白衣の前  
を閉じれば問題はない、か」

不思議そうな初春に、白衣の男は苦笑してみせる。  
はあーと田をぱちくつさせれば、確かにぴんぴんしている。何か  
能力が関係しているのかもしないし、大丈夫なのだろう。  
確かに焦げたのはシャツの腹の部分だから白衣の第三ボタンあたりからしたを閉じれば見えることはないだろうが、まったくもって  
暑苦しい。

「しかし一度田となると、何か運命じみたものすら感じるのは、名前  
を聞いてもいいかな？」

「あ、はい！ 私、ジャッジメント風紀委員第一七七支部の初春飾利といいます！  
あの、貴方のお名前もお伺いしても？」

「ありや、言つてなかつたつけ」

「はい、前回はドタバタしてお伺いしてなかつたので」

ゆらりと首を傾げる白衣の男の仕草は、その外見に似合わず妙に  
子供じみていて、違和感を感じる。  
いわゆるギャップ萌えというヤツを狙っているのかと、初春は全  
くもつて見当違いのことを考えた。

「僕は」

「おー、こんなところで待つてたのかよテメエは？ 探したぜエ、さ

つきの広場にやいねエんだからなア」

ぐるり、と突然聞こえた声に振り向くと、そこには先ほど店で強盗犯の一人を豪快に蹴り飛ばした少年が立っていた。

片手にはマクロナルドの近くにある牛丼チーノの袋を提げている。じつや近場で昼食をとることにしたらしい。

「ああ、そういうキミも随分と遅かつたじゃないか。何やってたんだ、アケセラレータ一方通行？」

「うつせエなア、メシ買いに行つたら絡まれたンだよ。しょうがねエから別の店探して來たンだ、俺アトロピカルバーガー楽しみにしてたンだけどなア」

「あれ、お連れさんつて？」

「うんうん、コイツつてことです。あれ、もしかして一人は知り合いだつたり？」

「ああ？ 知るかこのンな歩く花瓶娘」

「花瓶 ツ？！」

さもじつでもよそうに、空氣を吐くように自然に悪態をつかれ、思わず衝撃に思考が停止する。

初対面の人間相手にここまで好き勝手言える人間に未だかつて会つたことがあるだろうか、いやない。（反語）

そもそも下手すると自分よりも年下の相手から、言こよに扱われるのはどうなのだろうか。実際問題、年上の威儀とか何とか。

「まあまあ初春堪えて堪えて」

「つて佐天さん、どうしてここ？」

「INの人気がフラフラ歩いていつたから、私も初春追っかけなきやつて思つてさ。そしたら方向が同じだつただけだよ。それにしても派手にやつたねえ」

周りを見れば確かに、狭い路地裏は強盗犯が放った電撃によつてあちらこちらが焼けこげており、白衣の男の炎にしても、強盗犯に怪我を負わせないように配慮はしても周囲は氣にしていなかつたらしく、見事に焦げを作つていた。

見るも無惨、といつのが並びはまる有様である。

「オイオイこれはテメエがやつたんですかア？ ちょっとほしゃぎすぎだら、こくら何でも」

「強盗犯の片割れ蹴飛ばしてカウンターの向こうに吹っ飛ばしたアンタにや言われたくないと思つんだけど」

「あいや正當防衛だつつの。俺に楯突くのが悪いんだろオガ

全く悪びれもせずに言い放つ少年、白衣の男の呼びかけを信じる

ならば名前は『一方通行』。

能力の正体は分からないうが、至近距離で放たれた銃弾をはじくところから、それなりの強度の能力者らしい。

「オラ用事が終わつたンなら行くぞ。ゲーセン巡りは終わつてねエ  
んだからよオ」

「やれやれ、マイペースな人に振り回されるのは、残念ながら慣れ  
てるつてことです。 悪いね、警備員にはキミの方からよろしく  
頼むよ、初春飾利サン」

「え？ ちよ、ちょっと待つて下さいー セめて連絡先 お名前  
だけでもー！」

勝手に歩き出してしまつた一方通行アクセラレータに連れられて、白衣の男も歩  
き出す。

それは、困る。なんていうか状況的に止めるのも無理そつだが、  
せめて警備員アンチスキルに説明する時のために連絡先、最悪名前だけでも聞い  
ておかなければ風紀委員の仕事が立ち行かない。

「 ああ、それもそうか

ゆらり、と男は振り返る。

何処か空虚な瞳と薄く微笑んだ脣。前に会つたときもフリリと消  
えてしまつた、つかみ所のない姿。

その男は今回もまた、とらえどころのない様子で口を開いた。

「 カガリ、だ。

みんな僕のことをそう呼ぶよ。僕はよくあつあつあづらづらしててるから、もしかしたらまた、こうして会うこともあるかもね。その時にはまた、よろしくってことです」

結局フーリーと男 カガリは消える。

入れ替わりのよう警備員アンチスキルの護送車のサイレンが聞こえ、初春は自分がしなければいけない仕事を思い出した。

とりあえず鞄の中に一つだけ持つていてる手錠を犯人にかけて、もう片方の強盗犯も回収に行かなければいけない。あちらは一方通行アクセラレータが吹っ飛ばした後そのままだが、この短時間で目が覚めるようなことはないだろう。

だからそれは確かに“いつも通り”というわけではなかつたけれど、十分に風紀委員ジャッジメントとしての初春飾利の日常だった。

## 第2話『男、少女、第六位』（後書き）

主人公の能力の一端が明らかになりました。  
とはいえたままだこれだけでは分からないと私は思いますけどね。  
ちなみに作者は眞面目に熱力学とか語る姿勢を持たないので、その  
あたり触れないと感じで行きたいと思います。  
一応ガチ理系なのでやろうと思えばやれるのですが、ちょっと面倒  
なので、申し訳ない。

### 第3話　『少女、一人、風紀委員』（前書き）

試験前なのに、同時に引っ越し。  
一体全く持つて何なのか、もうわけがわからないよ！

### 第3話『少女、一人、風紀委員』

「初春、聞きましたわよ！ 第七学区の強盗事件、お手柄だつたそうですね！」

#### 風紀委員第一七七支部。

第七学区内は居住区、学校区としては学園都市の中でも一、二を争つほどに巨大な学区であり、故にそこに存在している生徒たちも非常に多い。

分母が大きければ、それにつられて当然のように分子も増える。それは例えば学区内における犯罪数、および犯罪者の数もそうであるが、もちろん同じように風紀委員や警備員の数も多い。

第一七七支部もその内の一つ。大能力者を一人、<sup>レベル1</sup>低能力者が一人という能力者編成は、支部の規模に対しては随分と豪華な面子であった。

特にその内の大能力者が学園都市内でもかなり希少な空間転移能<sup>タ</sup>力者というのも、この支部の検挙率などの水準に影響を与えている。他の支部ではバイクや車などを使って補つている機動力を、単独で、しかもさらに高いレベルで備えているというのは非常に大きなメリットになっていた。

「残念ながら店の設備に被害は出てしましましたが、幸いにして被害者の中に怪我人はおらず、犯人も一人とも逮捕。盗まれた現金もすべて回収完了でしたわ。事後処理も完璧で、警備員の方も褒めて

いましたのよ」

「そうですか。でも私はたいしたことしてませんよ、白井さん。ほ  
とんど通りすがりの一人組がやつてくれたようなもので、はあ、こ  
んなんじや 風紀委員失格ですね」

風紀委員第一七七支部は、全体的にじんまりとした事務所という雰囲気を湛えていた。

清潔な白で統一された室内の調装は、アットホームというよりは完全にシステムティックなもので、ところどころにおいてある鉢植えやPC周りの私物などに生活というか、仕事をしている個人の名残を感じることが出来る。

給湯室の方に行けば個人が有志で持ち寄った紅茶やコーヒー、ココア、お菓子の類が整理整頓されており、そこは学生らしい所帯じみた部分が感じられるだろう。

基本的にはボランティアである風紀委員であるが、その仕事内容は本職の警察官にも勝るとも劣らず、それなりなハードワークを使命感で支えている状態だ。

決してオーバーワークというわけでもないのだが、かなりの時間を支部で過ごすのだから、可能な限り仕事環境は過ごしやすいように整えておきたい。

「そんなことはありませんわよ。正直、完全に予想できなかつた状況からあそこまでの被害を店に受けられては、慎重になるのも当然ですの。

結果として犯人を捕らえることもできたのですから補償もあるでしょうし、でしたら店側としても風紀委員をとやかく言つこともないというものです。風紀委員とて万能ではありませんから、で

めることをすればいいのですわ

結局のところ風紀委員シャッジメントは学生に過ぎない。

そもそも取り締まる相手が能力者が多いからこそ、同じ能力者である学生でないと対抗できない場合もある、というものが、実際のところ犯罪者の割合は圧倒的に無能者や低位能力者であることが多い、警備員アンチスキルでも十分に対応できる。

むしろ相手が銃火器ジャッジメントで武装していたりする場合には学校の制服に腕章をつけただけの風紀委員シャッジメントの装備では対抗できない場合も多い。

一応学園都市謹製の特殊素材を用いた盾や防具などの装備も無いことはないのだが、パトロールの際にまでいちいち必ず装備しているというわけにはいかないので。まず威圧感があつては、元も子もないことであるし。

そういう相手ならばしつかりとボディアーマーを着用し、こちらも実銃や各種対能力者使用の装備を整えた警備員アンチスキルの方が適任だつたりする。

そもそもいくら使命感があつたとしても学生のボランティア。

学業優先であることは当然であるし、勿論いくら覚悟があるといつても風紀委員シャッジメントの活動で必要以上に重傷を負つといつのもナンセンスである。

出来ることを、出来る限り。職務中に負傷することは状況が許さなかつたのならば決して悪いことではないが、もちろん褒められたことでもないのだ。

むやみやたらに危険に身を突っ込むのは、勇敢ではなく無謀と呼ぶ。

「　　白井さんがそれを言いますか」

「何か仰いまして?」

「いえ別に、何でもありませんよ? そんなことより白井さんも、事後処理の後半を代わってくださつてありがとうございました」

「気にしないで下さいな。現場到着が遅れたのですから、そのまま暇してたりしては私の矜持に障りますの。初春は頑張つて犯人を追いかけてくれたのですから、久しぶりに頭脳労働を受けただけですわ」

第七学区駅前にある某有名ハーバーガーチェーン、マクロナルド。学生たちで賑わう、ちょうど放課後に当たる時間帯。そこに突然現れた二人の強盗に、偶然にもその場に居合わせた初春は、犯人を捕縛して警備員に引き渡した。

本来ならこのような荒仕事は背後で感心の声を上げている同僚大能力者の空間<sub>レベル4</sub>転移能力者、白井黒子の担当であり、低能力者で戦闘に使えるような能力でもない自分は後方支援が主である。だからこそ黒子は、決して強度の低い初春を卑下するわけでも何でもなく、惜しみない賞賛の言葉を送った。

「それにしても初春、さつきから何を調べておりますの? 確かに今日のメンテナンスは中止になりましたが、非番なのには変わりないんですよ?」

あと、危険だからと固法先輩から貴女を必要以上にPCに近づけないように言われてるんですけど

」

「何を言つてゐるのか、さっぱりです」

黒子の言葉のとおり、事件があつたとはいえ今日は基本的には非番であることから、支部の中に詰めている風紀委員は初春と黒子だけだ。

その黒子も事件を聞いて駆け付けた後の処理をしてきた帰りであるし、初春はそれこそ調べものがしたくて色々と融通が利く支部のPCを私的利用しようとしたに過ぎない。

ちなみに第一七七支部が機能していない内は、他の支部がそれぞれ不足分を埋めていてくれているから、本来ならば事件があつたとしても一人が出てくる必要はなかつたはずなのだが。

「さつきも言いましたけど、犯人だつて一人とも私が捕まえたわけではないんですよ。通りすがりの人が協力してくれなきや、逃げられてたかもしません」

「通りすがり、ですの?」

「はい。名前だけは聞いてましたから、ちよつと気になつたんで調べようかと」

支部に戻つてきてからこつち、初春は延々PCに向かつてカタカタとキーボードを叩いていた。

風紀委員の支部においてあるPCは決して最新式のものではなく、むしろ初春が日常的に自宅で使用しているものに比べても旧式の烙印を押されてしまうことだらう。

しかし使用目的、および使用者が使用者なために様々なことについて融通が利く。たとえばその最たるもののが、書庫パンクへのアクセスであつた。

「 支部のPCの私的利用は控えるよつにと、固法先輩から言いつけられていたような気がしますの」

「私的利用なんかじゃありませんよお～。だつてホラ、せつかく事件解決に協力してもらつたのに素性が知れないままじゃ報告書を書くのも大変ですし」

書庫パンクとは、学園都市の学生達の情報を保存したデータベースである。主に能力について詳しくデータ化されたそれは、基本的に一般の学生には閲覧の権限がない。

能力はあくまで学業の一環として開発されるが、実際に能力行使を大々的に規制する方法などあるわけがなく、日々の生活に能力は密接に関係している。

その中の要素の一つは、やはり能力を用いた戦闘だ。決して多くの能力に該当するわけではないが、能力の強度レベルは戦闘能力に影響を及ぼす場合が多い。

何より能力の詳細が知られてしまふことは、乃ち相手に大きなアドバンテージを与えてしまうことになるのだ。

また、学園都市では有る程度以上の強度レベルの能力者になると、学内の研究機関と協力して某かの研究に従事している場合がある。

そのような場合には、やはり能力の詳細を敵対組織に知られてしまふのは、かなりの問題があるだろう。

例えば研究の詳細を知られてしまうことになるだろうし、そこか

ら対抗策を練られてしまつ可能性もある。企業利益が絡んでいる分だけ、むしろこちらの方が深刻かもしれない。

「やうひと思えれば私のノートPCからでも書庫に接続<sup>パンクハッキング</sup>ぐらいは出来るんですけど、やっぱり素直に支部のパソコンを使う方が波風立たないですし」

「まずその発想から何とかしなさいと申しているんですのー。ていが物騒なんですわよ貴女は、」トヨシ関連に限っては…」

「やだなあ、物騒なのは私じゃなくて簡単に突破される学園のセキュリティですって」

「その発言が既に物騒なんですのー！ とにかく風紀委員<sup>ジャッジメント</sup>としてといいますか一般市民として犯罪行為は慎んで下さいましー」

唯一例外を挙げるならば、それなり以上の規模を持つた研究機関や教師、風紀委員<sup>ジャッジメント</sup>や警備員<sup>アンチスキル</sup>などの治安維持組織などだ。

こちらはある程度のレベルまでの閲覧ならば、特に許可を得ることなくアクセス出来る。事件の度にしかるべき場所へ申請などしていっては、捜査が滞る。

もちろん申請無し、というよりは組織に応じて閲覧できる層があり、風紀委員の一支部が許可無しに閲覧出来る層などでは大能力者の能力の詳細程度で、個人情報までは確認出来ない。然しその程度であつても、初動捜査には十分に過ぎた。

「しかし初春、貴女が数十分から一時間も検索して見つけられ

ないんですの？」

「あ、はい。流石に“カガリ”っていう名前だけですと、ちょっと無理が……。

名字かなつて思つて検索したんですけどH.I.T.しなくて、名前かなと思つていろいろと漢字を変えて検索しても駄目で……。読み仮名でも検索出来てるはずなんですけど」

「それは妙ですの。確かその彼、能力開発を受けた『発火能力者』なのでしょう？ だとしたら書庫パンクにデータが無いはずはありませんわ。たとえば無能力者だとしても、能力開発を受けていれば書庫パンクにデータは残りますもの」

突然に現れ、強盗犯二人を無力化した白髪の少年と白衣の青年。結局のところ自分がしたのは意識を失った犯人の拘束と、警備員への連絡だけ。小学生でも出来る簡単なお仕事です。少し前までは小学生だったのも確かだけど、風紀委員としては実に情けない。

白衣の少年の方は自分と同い年か、あるいは下手すれば年下の可能性もあるだろう。身体強化系の能力者だったのか、銃弾を弾き、あの細い体からは予想もつかない程の力で拳銃を構えた強盗を蹴り飛ばしていた。

白衣の青年は間違いなく自分より年上だろう。大学生いや、高校生か。おそらく三年生ぐらいだろう、背丈は百八十を超える長身だつたし、顔立ちも随分と大人びていた気がする。

彼などは見事に片方の強盗、発電能力者から大能力者クラスの電撃を食らっていた。

だというのに、無傷。本人は『発火能力者』バイロキネシストと嘯いていたが、火

や熱で電流をビリヤッて防いだのだろうか。

「一度あることは二度ある。一回も会ったんですから次もあるかもしませんし、出来ましたらしっかりと調べてちゃんとしたお名前を知つて、お礼をしたいところです」

「単に興味があつただけではありますなの？」

「それもそうですが」

“カガリ”、とだけ彼は言った。

順当に考えれば名前なのだろう。名字なのか名前のかは分からぬが、普通は自己紹介をするならばフルネームと所属ぐらいは言つて欲しい。

「まさか偽名だったという可能性はありませんわよね？」

「だつたとしても不思議じゃありません。別に不良の類には見えませんでしたけど、ジャッジメント風紀委員に名前を知られたら困るような人つて可能性もありますし」

「はあ、だとしたら探すのは不可能に近いですわね。

学園都市一百三十万人の学生の中から、ひたすらに顔写真を照会し続ける作業なんて、よっぽど退屈を愛する人間でなければ耐えられませんの」

「出来ないこともありますけど、ちょっと御免被りたい」とこ

りではありますね」

ジャッジメント 風紀委員第一七七支部所属、初春飾利。

戦闘などでは殆ど活躍できない低能力者でありながら風紀委員として立派に活動する彼女の本領は、情報処理能力の高さにある。幾つものディスプレイを並べながら、並列してPCを操作、現場のバックアップをする。それは監視カメラの映像をチェックしながらの誘導などから、容疑者を書庫<sup>パンク</sup>から検索する作業まで、幅広く何でもこなす。

今までも目撃情報だけを頼りに正真正銘<sup>パンク</sup>一百三十万人いる書庫のデータから犯人を捜しだしたことだってあった。けれど、それは仕事だからで、正直普段の些細な調べ物からそのレベルの労力を費やすのは馬鹿馬鹿しい。

「　　『発火能力者』　のカテゴリーで絞り込みは致しました?」

「ポピュラーな能力ですから、それでも膨大な数になりますよ?」

「確かに学園都市でもトップ10に入る能力ではありますわね。やれやれ、八方塞がりではありませんの」

『発火能力者』。  
『発電能力者』。  
『念動力者』。  
『水流操作』。

これらは学園都市でも代表的な能力であり、それぞれのカテゴリーに非常に多くの学生が存在している。

それを一々調べるのでは、結局のところ覚悟が必要な能力であることには違わない。これは正直、キツイ。

「 ちょっと時間がかかるかもしませんねえ。今日明日とかでやる必要もないことだし、後回しにしますか」

「 その方がよろしいですね。 そういうえばもう一人、協力して下さった方がいらっしゃったんですね？ そちらの方は調べなくててもよろしいんですの？」

「あ、そういえば」

一回も会った衝撃的な白衣の男性の方にばかり意識がいついていたと、初春は手鼓を打つ。

確かに協力してくれた通りすがりの人は一人だった。強盗犯を豪快に蹴り飛ばして全治一週間の怪我を負わせた。正当防衛とはいえ、白髪の少年。どちらかといえば書類の処理が面倒だったのは彼の方である。

「 確か名前は “<sup>アクセラレータ</sup>一方通行” <sup>アクセラレータ</sup>とか呼ばれてたような」

「 “<sup>アクセラレータ</sup>一方通行” ? まるで能力の名前みたいですね」

「渾名ですかね？ とりあえず検索かけてみましょうか」

カタカタカタ、と軽快にキーボードの上を白い指が走る。

マウスやキー ボードなどの前時代的な端末以外にも、学園都市には当然のようにタッチパネルや音声入力式の端末も存在しているが、初春は軽い快音がする黒い板を気に入っていた。

実際には利便性と汎用性から学園都市内でも殆どの場所でキー ボードは未だに使用され続けているが、特に初春はこの端末を愛している。

何より手首を固定したままに両手の指が届く範囲での検査で、基本的にPCの全ての操作ができるのが良い。自分でキー配列を工夫すれば更に自由度や利便性は上がるし、使いこなしているという実感があるのも良かった。

「あ

「見つかりましたの？」

「はい、こっちは意外に早かったですね。やっぱり能力名だつたらしいです。

えーと、学園都市序列第一位、『<sup>アクセラレータ</sup>一方通行』って、序列第一位？！

ガタン、と椅子の肘掛けを大きく叩いて、初春は思わず体を浮かせた。

隣に立っていた黒子も組んでいた両腕をだらんと垂らし、はしたなく口と目を丸く開けている。

学園都市序列第一位。

文字にすると非常に簡潔なものであるが、それも当然、つまるところ学園都市に存在している一百三十万人の能力者の頂点。ただ一

人存在する絶対強者ということである。

大能力者レベル<sup>4</sup>というエリート中のエリートである黒子にしてみても、軽く雲の上の人間だ。いや、もはや人間という表現を当てはめても良いのかすら怪しい。

何せ学園都市に七人しかいない超能力者レベル<sup>5</sup>というのは、単独で軍隊を相手に出来る戦力を保持しているのだから。

「お姉様と同じ、超能力者レベル<sup>5</sup>。しかも、序列第一位ですの」

「はー、確かにいとも簡単に強盗の人を制圧してたから只者じやないとは思つてましたけど、まさか第一位とは思いませんでした」

書庫パンクにあるのは、顔写真と能力の名前のみ。

どんな能力か、ということは一切書いてない。それどころか本名すら無く、写真の中の白髪の少年は如何にも不機嫌そうにこちらを睨みつけている。

「そいいえば白井さんが『お姉様』って読んでる人って、常盤台中学の『超電磁砲』なんですよね？」

「ふむ、その通りですわ。お姉様こそ常盤台中学が誇る天下無敵の電撃姫。学園都市序列第三位、『超電磁砲』の御坂美琴お姉様ですわ！」

ああお姉様、今日はお姉様とお買い物にいけなくて申し分かりませんの。。。でも黒子は、黒子は何時でもお姉様のことを思つてありますわ！ ああお姉様お姉様」

「あーあトリックしちゃつた。白井さんつてこいつなると長いからな  
あ」

横で体を抱えてくねくねと氣色の悪い動きを、氣色の悪いだらしない笑顔で始めた黒子を放置して、初春はぼんやりとマウスを動かした。

そういうえば超能力者のリストなんて初めて見る。普段の捜査で使った資料は大能力者レベル4が精々であるし、支部にいる間は考えてみれば忙し過ぎて書庫巡ネットサーフィンりなんてしていなかつた。

その分だけPCを好き放題弄つたりして支部長の頭痛の元を銳意作成していたりしたのだが、そこは割愛。

「えーと何々、学園都市序列第一位『未元物質』。

学園都市序列第三位『超電磁砲』。

学園都市序列第四位『原子崩メルトダウンし』。

学園都市序列第五位『心理掌握』。

学園都市序列第六位『無尽火炎』。

学園都市序列第七位『削板軍霸』。

あれれ？ なんで最後の人だけ名前で、能力名がないんですね

かね つて、あああああ！……

「ど、どうしましたの初春？！」

一人一人、データを呼び出して見ていくてみる。

第三位の御坂美琴以外は顔写真すらない者も多く、能力については当然ながら説明などされていない。

が、その中の一人。『学園都市最高の“発火能力者”』である超レベル5バイロキネシスト

能力者の項目を開いたとき、初春は思わず歓声というよりは驚きに近い大声を上げた。

「み、見つけました！ 見つけましたよ白井さん！」

初春が指さす、ディスプレイ。

そこには先程口に出した、学園都市序列第六位、『無尽火炎』と

いう能力名の超能力者。

学園都市最高の『発火能力者』バイロキネシストとだけ説明されている欄の隣、半分近い超能力者が“NO PICTURE”と表示されていた写真の項目。

そこに、つい今日もつき合つたばかりの、精悍かつ爽やかな顔つきながらも無表情な、

白衣の男の写真が、載せられていたのだった。

第3話　『少女、一人、風紀委員』（後書き）

話が進まんっ！  
初春をもつともつと黒くしたい。

## 第4話『一位、六位、超能力者』（前書き）

実は明日引っ越したり。そして明日、試験だつたり。

今日うやしたのは後顧の憂いをなくすだけで、決して現実逃避じゃないんだからねつ！

あ、次からは毎日更新はさすがに無理です。暫く空きます。  
そろそろ倫敦の方も執筆しなきやね！

## 第4話『一位、六位、超能力者』

「いらっしゃいませ、こんばんわ。お客様はお一人様でよろしいですか？ 喫煙席でよろしければすぐに」案内できますが」「

「あー、ハイハイどっちでもいいですよ。腹減ったんで早く案内しろっつんだ」

「まったく、キミは腹が減ると途端に機嫌を悪くするなあ。あ、コイツのことは気にしなくてよいってことです」

「は、はあ　？ それではお席の方に」案内いたします」

夜。時刻は大体十時ぐらいだろうか。いくら太陽が出ている時間が長い夏とはいっても、流石にこの時間になると外は暗い。

基本的に暗くなつたら完全帰宅時刻であり、自炊が推奨される学園都市とはいっても、もちろんの事情で外食を余儀なくされる学生はいるし、当然ながら多数存在する大人たちも利用する。

そのためにふつうならば学生が出歩かない夜の時間であつても、それなりの数の飲食店が営業していた。

代表的なものは、ファミレスだろう。外の世界でも全国的なチエーン店が何種類か、学園都市の内部でも軒を連ねている。

学生の昼食などにはお手軽で安価なコンビニやファストフードチエーン、丼チエーンなどが喜ばれるが、流石に夕食までそれでは心が貧しくなるというものだ。

「『注文がお決まりになりましたら、お手元の呼び出しボタンを押してください』。これから、メニューで『いざ』します」

「どうも、ありがとうございます」とです。ほら一方通行アクセラレータ、水

「おウ」

店内は残業やら何やらを終えたのだろう大人たちで賑わっている。そもそも規模としてあまり大きくない店なのか、既に禁煙席は満席だ。

ところどころにちらほらと親子連れも見えるのは、学園都市に勤めている教師や研究員たちの家族だろう。一二百三十万人の八割を学生が占めているとはいえ、残りの一割は立派に大人。学生たちが快適に過ごすためには彼らの存在が欠かせない。

そもそもアルバイトなどが推奨されない場所であるから、こういった店の従業員などはしっかりと外部から店員を派遣してきているのだ。大学生などになると比較的バイトもするようになるらしいが、特に高校生に対する学園都市のカリキュラムはバイトに現を抜かしていられるレベルではない。

学園都市は、まさしく学問のための都市であった。

「なんつウカ遊びすぎて腹減ったなア。。。昼飯食ったのは三時ぐらいだつたはずなんだが」

「お開きする頃にはボーリングやつたりバッティングセンター行つたりしてたから、疲れるのも当然つてことです。もともとゲーセン

なんてそこまで数がないんだから、仕方ないと言えば仕方ないかも  
しないけどさ」

「最後のゲーセンで会った連中と意氣投合しちまつたからなア。大  
勢で騒ぐのも、たまにはいいもんだ」

「よく言ひつよ、群れるのは嫌いだつていつも言ひてゐるくせに」

「だからたまにはつて言つてんだろオが。それに普段からつるむよ  
うだと目障りになんだよ。一期一会で会つた連中だから、後腐れな  
く騒げンだ。いつも大勢でいんのは、俺の趣味じやねエ」

「ま、そうだね」

カラリ、と店員が持つてきたお冷のグラスの中で氷が音を立てる。  
夏だからとキンキンに冷えているグラスは表面が自然と結露して  
いて、手についた水滴を一方通行はベクトル操作で一滴残らず床へ  
弾いた。

ちなみに当初の予定と違い、昼食はアツアツの牛丼を余儀なくさ  
れたので、堪え性のない第一位は早々に熱と日差しの反射をデフォ  
ルトに戻している。

体力を削る要素が一つ無くなつたからか元気になつた白髪の少年  
は、そこからさらにペースを上げて遊び倒し、第七学区最後のゲー  
センで出会つた、おそらくは武装無能力者集団の類だらう不良達と  
意氣投合。

互いの素性どころか名前も喋らぬままに、ボーリングやらバッテ  
ィングセンターやらで遊び倒した。

もつとも彼らも意気投合した相手の一人が、多かれ少なかれ能力者であるだろうことは勘付いていたし、二人にしても相手が無能力者<sup>レベル</sup>だらうなと当たりをつけていた。

ここでその勘織りを確信へと変えてしまえば、軋轢が生じるのは明白。よつて互いに空気を読んで一切の個人情報を漏らさなかつたのは、懸命であると同時に粋といつものだらう。

「俺が一緒にいんのは、俺が触つてもコワフレねエ奴だけだ」

「該当するのは僕ぐらうこと、かな？」

「否定はしねエよ。まアいつかはテメエも、コワセルようにならねエといけねエンだらうがな」

「キミは僕を殺せないし、僕じゃキミを殺せない。お互に能力の相性が悪すぎるってことです。

まあ楽しみにしてるよ。僕としても、誰かが僕を消してくれるのが心待ちで仕方ないつてことです

片手の指で足りる友人と自分との視線を遮るように、水の入ったグラスを目の高さに掲げる。

光のベクトルを操作すれば、水とグラスで偏光して僅かに歪んだ像など簡単に元通りに直すことも出来るが、特にそんなことはしなかつた。

決して長い付き合いというわけではないが、それでも外見上は軽く五つばかり年上に見える友人は、きっと相変わらずの色を感じさせない無表情でこちらを見ているのだろうから。

「さて、ぐだらねエ話は止めだ。腹も減つたし何か食わねエと死んじまつ。

ふつつの定食も飽きたし、何か無エかな、季節限定とか当店限定とかの面白そうなメニューは」

「そのミーハーなどいろは何時まで経つても治らないね。僕にしてみれば、とっても不思議つてことです」

「俺ア退屈が一番嫌いなンだよ。日々刺激が無エと、退屈で死ンじまいそうだ。つーかテメエも似たような存在だろオガ、いつつもいつも愚痴ばっかり言いやがつて」

「僕のそれはキニとはちょっと方向性が違つてことですか

真面目な目を普段の氣怠げなソレへと変えて、一方通行はメニューへと視線を落とした。

学園都市最強の超能力者である彼にとつてみれば、日常は実に退屈な代物なのだろう。カガリが彼と知り合つてからずっと変わらず、面白いモノ、目新しいモノ、珍しいモノを探す姿勢は変わらない。特に顕著なのが食べ物で、基本的に目の前でメニューの端から端までじつくじと眺めている白髪の少年は、基本的に限定期品の類に弱い。

季節限定の商品には必ず手を出し、奇抜なメニューがあれば一切躊躇せず、むしろ楽しそうに果敢に挑戦する。

カガリ自身は体质上その煽りを食らったことはないが、それにしてもいくら珍しいモノが好きだからといって、その姿勢が一体どうから湧いてくるのか、彼にとつてみれば不思議で仕方がなかつた。

「お、いいなコレ。『夏を乗り切る新メニュー！ 杏仁麻婆！』」

「

「“パリリとした麻婆ソースと甘い豆腐がナイスマッチ！ 口の中で混じり合つ、未知の甘辛メニュー！”」

「 ホント、僕には全く分からないつことがあります」

「なアに言つてんだ？ こォいう少しの間だけ一瞬、だけど閃光のように輝いてアーッ！ という間に消えてくメニューだからこそ、挑戦する価値があんだろオが。

すいませHん、この杏仁麻婆つづーの定食で。あとコイツにメロンフロート一つ

メニューの写真には、杏仁豆腐と麻婆豆腐を合わせたトンテモ料理が載せられている。

パツと見た感じでは変なところなど何も無いが、麻婆の泥の中に浮いた豆腐がやけに真っ白で、ついでに麻婆の泥はやや透明な汁と混ざり合っていた。

写真を撮ったプロの腕が相当良かつたのだろう。冷静に考えれば信じられない組み合わせなのだが。真っ赤な麻婆の中に純白の豆腐、そしてその周りに悪い夢かとも言いたげに配置された各種の缶詰フルーツが、色鮮やかで目に美しい。

「 いやア楽しみだぜ。どんな味がすンだろオなア？」

「さつと肩の肉が抉れたり、歯が生え替わったりするような味だと思つてことです。骨は拾つてあげよう、成仏するんだぞ」

「つたく、フロンティア精神を理解出来無<sup>ヒ</sup>奴だな。そんな無氣力な面してやがるから、路地裏歩く度に余計な連中から絡まれンだよ」

「あれはどっちかっていふと一緒に歩いているキミのせいってことです。僕は基本的に争い事は好まないんだよ。暴力は振るうのも振るわれるのも、教育上よろしくないってことです」

「失礼致します、お先にお飲み物の方をお持ち致しましたーー！」

やや大きめのグラスいっぱいに注がれた、盛大に気泡を立てる透き通つた緑色の炭酸飲料。

見る目を楽しませる美しい色の液体には目の前に座る少年の髪の毛よりも白いアイスクリームが浮いており、そこにチョコレートを棒状のビスケットに塗りたくつた菓子が一本刺さっていた。

例えばそれは小学生などの子どもが、好んで注文する商品。たとえ今が初夏の、それも尋常じゃなく暑い熱帯夜だったとしても、大の人が飲むのは少々恥ずかしい代物だ。

まだ辛うじて少年と言える一方通行<sup>アクセラレータ</sup>がそれを飲むのならば、まだ何とか絵になつたかもしれない。しかし実に嬉しそうにストローに口をつけたのは、力ガリの方だった。

百八十を優に超える身長を持つ彼がメロンフロートを啜つている姿は、ある意味では十分に第三者が目を見開いてもおかしくはない光景だ。

「一口」と二口二口とはにかむ様子だけ見るならば、とても高校生には見えないだろう。精々が中学校低学年、あるいは女子中学生

である。

もちろん彼が、身長百八十を超えて、肩幅広く、足の長い立派な青年でなければの話なのだが。

「うん、やっぱり炭酸は美味しいな。この喉を通り抜けるシュワシュワって感覚がたまらないってことです」

「テメエは何か飲む時アいつもそれだよなア？ 僕には良くわからんねエってことです」

「人の台詞を取らないで欲しいってことです。そういうればキミは食べ物は嫌になるぐらい冒険するくせに、飲み物はいつも決まってブラックのコーヒーだよね」

「あア、俺は至高の飲み物を見つけちまたからな。特に缶コーヒーは最高だ、あの安っぽい苦さがたまんねエ」

「大変お待たせいたしました、こちら杏仁麻婆定食でござります。熱かったり冷たかったりしますので、お気を付けてお召し上がり下さい」

ドヤ顔で笑う一方通行の前に、大皿が一つと小皿が一つ。それに中華スープとご飯の盛られたお椀が一つずつ置かれる。  
アクセラレータ

小皿が二つあるのは、メロンフロートしか注文していないカガリに対する配慮だろう。もともと彼は友人と違つてこの手のゲテモノ料理を好かないので、口をつけることはないだろうが。

「来た来た！ なるほどなア、こいつが杏仁麻婆か 」

「こ れ は ひ ど い」

実際に目にしてみると、ソレのインパクトは並大抵のものではなかつた。

鉄鍋に盛られた麻婆豆腐は一般的のソレとは異なり、血の池地獄と見紛う程に毒々しい赤色をしている。おそらく、いや、間違いないくらい。それも、相当なレベルで。

その麻婆豆腐に彩りを添えているのが、これまた目を見張るぐらいに真っ白な杏仁豆腐だ。こちらは麻婆で煮込んだわけではなく、麻婆豆腐の上に盛りつけているらしい。

おそらくは麻婆の方の豆腐も杏仁豆腐に使われる独特の舌触りのものを用いているのだろうが、それにしても鮮やかな白だ。 血の池地獄に浮かぶ、白骨のようなイメージだが。

ちなみに鉄板の外周部に彩りを添えるべく並べられているフルーツ達は、当然しつかりと熱せられている。これがパイナップルやリンゴならまだ我慢できるかもしれないが、みかんあどになると十分に悪夢の範疇だ。

こんなものを食べる奴は、よほどのキワモノか、味覚が破壊された奴に違いない。そう万人に思わせる料理である。

「いいねエいいねエいい面構えしてやがンじゃねエか！ おい見ろよテメエこの毒々しい色をよオ！ 食べる奴に食欲つてもンを起させねエ見た目、辛い麻婆ソースと甘ったるい杏仁豆腐の混じり合つた力オスな匂い！」

「こいつア俺に挑戦してやがンな。いい度胸だ、学園都市序列第一位の実力つてもンを、祖のみに味あわせてやらア！」

「 南無」

スパーーんを取り、ぐるっと一混ぜ。この手のミッククス料理は基本的に混ぜ合わせるのが基本的なコンセプトだ。  
よく冷えた杏仁豆腐に、麻婆が絡む。どうやら豚挽肉ではなく鶏挽肉を使っているようで、あつさりとした鶏肉を使うことで甘い汁との調和を試みているらしい。

「 メンジヤマア 」

「 デキルナキ 」

「 いただきまーす つと 」

パクリ、パクリ、もぐもぐもぐもぐ。

「 アクセラレータ  
一方通行? 」

もぐもぐもぐもぐ。

期待にあふれた表情のまま、まるで凍り付いたかのよう、機械にでもなったかのように、黙々と一口田を咀嚼し続ける。

そもそもからして、そこまで歯のない食がある食べ物ではないはずだ。豆腐の種類によるが、下手すれば飲み込むことだって簡単のはず。

「おい、そんな調子で大丈夫か？」

「だだだだだ大丈**bi**だ、**m**ンだい無イ」

「見るからに問題大ありってことです。 まつたく無茶しやがつて、僕は知らないって言つただろうに」

「ぐり、と杏仁麻婆を飲み込んだ瞬間、一方通行は口から白い煙を吐き出して小刻みに震え出す。

予想以上の味だつたらしい。さすがに一方通行とはいえ、味覚から来る精神的ショックまでは反射出来ない。他の能力者からの精神干渉なら話は別だが、この衝撃にはベクトルが存在しなかつた。

「 おいおい、ホントに大丈夫か？」

「 あア、大丈夫だ。ちょっと意識が良いカンジに飛んじまつたが、乗り切つた。

くそ、まさかこの俺が一瞬でも敗北しかけるとは、ヒンでもねエ敵だつたぜ。俺はコイツを好敵手(ライバル)に認めてヤンよ

「 隨分と安い好敵手もあつたつてことです」

ぶるぶると震えながらも、一方通行は第一位としての矜持を賭けてスプーンを手にする。

一口、たつたの一口食べただけで、あの有様だつたというのに。

アクセラレータ

アクセラレータ

なおも挑戦しようと言つのか。いつたい何処からそのエネルギーが沸いて出でてくるのだろう、カガリは心底呆れた視線を友人へと向けた。

「まあ、食べ物を粗末にしない姿勢は評価できるってことです」

「なアおい、これ炎で燃やせたりしねエか？」

「前言撤回。自業自得なんだからキミだけで頑張つて下さいってことです」

震えながらもスプーンを手にして杏仁麻婆に果敢に挑戦する一方通行を見て、カガリは呆れたように溜息をついた。

彼は生まれの関係上、食べ物を粗末にしたり、お金を無駄遣いしたり、そういう行為に対しても非常に抵抗感がある。

そういう意味では一方通行は基本的に遊び以外ではさほど金を好んで使う生活をしないので、友好的な関係を築けている一助だ。

「そういえば一方通行」

「辛くて甘くてくか、か力、か力kか力k つは、今おかしな世界に意識がとんでもやがつたぞ ！ なんだ？」

「今日の“実験”は、中止なのか？ 僕の方には連絡が来てないってことです」

「 ッ

瞬間、空気が凍り付いた。

何とか鋼の克己心で以て杏仁麻婆を退けた一方通行から、途端に感情の色という物が消えて無くなる。

怒りも苛立ちもなく、ただ純粹に氷のような事実がそこにあるだけ。

あるいは何かの感情があつたのかかもしれないが、カガリはそれを探る、という姿勢をそもそもにして持ち合わせていなかつた。

「まあほら、最近この時間帯はキミと一緒にいるからね。僕の方に連絡が来なくてもおかしくはないってことです。

けど僕としては正直、今日はもう眠らないと負担がかかってしまふので 出来れば早めに用事をすませてしまつた方が嬉しいことです。無いなら無いで、それにこしたことはない。そうだろ?」

「あア、テメエは夜更かし出来無い体質だつたな。そりや悪かつた、今日は散々連れ回しちまつてよオ」

「そういうこと言つてゐるわけじゃ、なつてことです」

何とか完食した、綺麗に空になつた杏仁麻婆の皿に空虚な視線を落とす。

その瞳には何も写つていなかつた。皿も、机も、視界の上端にちらほらと見え隠れする友人も。

実際に網膜に映像が投影されているか否か、そんなことは問題じやない。瞳に移すという意志がなければ、人間はそれを見ているということにはならないのだ。

「今日で何回目だい、<sup>アクセラレータ</sup>一方通行？」

「さうな、百回から数えンの止めちまつたよ。いつものお相手がペラペラ喋ンので確認するだけだ」

「キミの田標まで、実験完了まで、あと何回だりうね？ 僕は正直、飽きてしまつたつてことです」

「 そうかよ」

ギロリ、と視線が疾る。その視線だけで人間を殺せるんじゃない  
かというぐらいに凶悪な視線だが、それを受けたカガリは相変わら  
ずの無表情を崩さない。

あア そうだ、そオ いえばこの友人は決してブレぬ」とがなか  
つたンだつたか。

その感情の色を見せない無表情を暫く睨みつけた<sup>アクセラレータ</sup>一方通行は、1  
人で動搖して激昂している自分がまるで道化のようだと、フンと鼻  
を鳴らしていつも通りの不機嫌を装う。

「 今日の実験は調整の都合で深夜らしい。場所は第十学区の倉  
庫、細かい時間は俺の携帯の方に連絡が入るンだとよ」

「 おいおい、そいつは随分と、何時にも増して適当つてことですか」

「 さア な、俺にも理由なンて知るかよ。 で、どうすンだよ？  
テメエ長い間起きてられねエ 体質だろオ ガ」

「うーん、とはいえ僕は強制じゃないとはいえる見届け役だからなあ。それに、キミを一人で実験に出すわけにもいかないってことです。心配だ」

「ケツ、テメエに心配される程、耄碌しちゃあいねエよ。おい、俺の名前を言つてみない、俺の名前を言つてみない」

不機嫌な表情の中に、自嘲を含んだ笑みが混じる。

本人は自信満々の笑みのつもりなのだろうか。語調は勇ましいが、苦笑いにしか見えなかつた。

「学園都市序列第一位、『アカセラレータ一方通行』」

「だろオ？ いくら俺と第六位の能力の相性が悪いからつてよ、格下に心配される云われは無エんだよ。

とつとと帰つて、明日に備えて寝ちまいな。 また明日も隙してンだろオが。どつか、行くぞ」

「 やれやれ、生憎と振り回されるのは慣れてるつてことです」

無表情が一瞬崩れて、笑みが漏れる。

その笑みも結局のところ感情が感じられない、仮面のようなものだ。それは力ガリの特徴、個性のようなものなのだから仕方がない。しかし一方通行アカセラレータには、そこに呆れを感じることが出来た。

「　ホントに、大丈夫なのかい？」

「ぐどい。何もあるわけ無エだろオが。俺ア“最強”なンだゼ？  
なア、“絶対無敵の第六位”サマ？」

「その看板、キニアケセラレータが相手でも下ろしたつもりはないから、皮肉みたいに使わないので欲しことです」

ガタリ、と音を立てて席を立つ。

こうして呼び出されて付き合つた後は、基本的に飲食の代金はアクセラレータ通行アケセラレータが持つアいうのが二人の間での決まり事だつた。

もちろんカガリとレベル5超能力者である以上はそれなり以上の額を学園都市から貰つてゐるわけだが、そのあたりは当人達の感覚アものなのだろう。

「じゃあ僕はアケセラレータ厚意に甘えて帰らせてもらひつてことです。また明日な、一方通行」

「おウ帰れ帰れ。ちゃんと明日は朝起きンだぞ」

ありがとうございましたー！と元氣な店員の挨拶を背に受けて、カガリは通り慣れたファミレスを出た。

熱帯夜とはいえ、ビル風は勢いが良く随分と肌寒い温度だ。昼間との温度が違い過ぎて、一日中外に出ていた人などは風をひいてしまつここともあるだろう。

「 やれやれ、心配な子ども達が多すぎて、お兄さんは心労が絶えなぃってことです」

今し方出てきたばかりのファミレスを振り返りながら、カガリは呟いた。

ああ言つてはいるが、一方通行<sup>アカセラレータ</sup>が“実験”に関して一定以上のストレス、悩みを抱えていることは間違いない。そしてその原因というのが単純に無いように関するものではないことも分かるからこそ、自分にはどう対処していいか分からぬ。

そもそも自分は、能動的な存在ではなかつたか。  
自分のような存在が、他人の悩みを解消しようと思案するのが、そもそも間違いなのではないか。

もつと適役がいるだろ。結局のところ自分は、誰かの悩みと共に感したり出来る存在ではないのだから。

しかし同時に、実際それが誰かの役に立つか、ということとは別にして、自分は誰かを心配する存在ではあった。

それは純粹に、前提条件だ。自分という存在は、他者の“面倒を見てやる”姿勢を前提条件として植え付けられている。  
だからこそ、最終的にその“誰かの力になろうとする自分の悩み”が労を結ぶかどうかは別として、きっと自分は悩み続けるのだろう。

「 うん、そうだね。悲しいかもしれないけど、それでもこれが現実つてことです」

誰かに言い聞かせるように、教えるようにカガリは虚空に向かつて囁いた。

能動的に干渉する存在ではないから、だからこそせめて、友人として自分は一方通行のそばにいよう。

きつといつか、彼にも側に居てくれる人物が現れる。自分のような存在ではなく、もっと親身に、自分のことのように彼のことを考えてくれる人物が。

そんなことを考えながら踵を返し、彼は学園都市の路地裏へと白衣を翻して歩き出す。

一陣の突風、ビル風が白衣を巻き上げて、その次の瞬間には、陽炎のようにカガリの姿は消えていた。

## 第4話『一位、六位、超能力者』（後書き）

一方通行 ゲテモノ好き。

ほんとうに  
どうしてこうなった？

マジでこんな予定無かつたのになあ。。。てか一通さんキャラ崩壊激しくないか？ちなみに力ガリの正体、能力については複線ばらまいています。予想されるのも、よろしいかと。  
展開を早く、進めていきたいですね。テンポ良いストーリーを目指に、頑張ります！

## 第5話『長点上機、常盤台、超能力者+』（前書き）

実は先日引っ越しをして、更新遅れました。申し訳ないってことです。

ちなみに同時に試験も。

これは素早く書き上げたから、勉強から逃避なんてしてないんだからねっ！

ほんとに、ほんとなんだからねっ！

## 第5話『長点上機、常盤台、超能力者+』

「一方通行」  
アクセラレータ

「なンだよ」

「僕はキミに一つ、言いたいことがあるってことです」

宇宙空間に打ち上げられた衛星に搭載されたスパコン、『樹形図  
ダイヤグラムの設計者』によって完全に“予言”された天気が公開される学園都市では、分単位、秒単位で次の天気が分かる。

そんな学園都市で、わざわざ雨の日を選んで出歩く奴は居ない。故に今日もたくさんの人で賑わう第七学区の大通りは、相変わらず暴力的な日差しが降り注ぐ快晴であった。

「キミに呼び出されるのは別に構わないってことです。もう慣れるし、僕としてもキミと遊ぶのは楽しいと思ってる。  
けどね」

「おウ」

「研究室で実験協力している最中に、無理矢理呼び出すのはどうかと思つてことです。このままじや間に合わないって、研究

員の人たち泣いてたんだぞ？」

「知るか」

日々技術が進化し続ける学園都市。

最も一日、または短期間での進歩や成長がめざましい少年少女達が住む巨大都市とはいえ、季節の変化を除いては毎日の景色がそう変わることはない。

それは例の「ごとく一人そろそろと尋常じゃなく目立つ学園都市序列第一位と第六位にしても同じだった。

ブラブラと歩く白髪の少年は毎度のごとく気怠げだが、今日は紫外線や日差し、熱を反射しているので体調が悪いわけではなかった。ただ光は反射し切れてないのか、まぶしそうに目を細めている。

「いいだろオガ、あんなくつだらねエ実験。実験のシユミレーション段階で検証が足りねエから、まだまだテメエが出て協力するレベルじや無エよ」

「そこまで分かつてるんなら、言つてあげればいひつてことです」

「面倒臭エ。つウか俺のこのスパコン並の超絶頭脳を貸してやるレベルの実験じや無エよ、連中は」

もう1人の青年も、同じくいつも通りだ。

初夏とはいえこの気温。だといつのに長い白衣を着込み、汗の一つもかいていない。

ただし昨夜が遅かつたからか、心なしかコラリコラリと左右に揺れている気がする。あと若干フワフワ歩いている。非常に分かり易い、寝不足の症状だった。

「随分と自信満々だね。まあ納得出来てしまつのがキミがキミたる所以なのかもしないってことです」

「超能力者<sup>レベル5</sup>の演算能力なンて大体そんなもンだろオが。あア、ワケ分かん無エ第七位とテメエは違つたか」

「確かに。僕自身の演算能力なんてキミの足下にも及ばないだろうね。まあ僕の本質はそういうところじゃないってことです」

「ありや演算してゐるワケじや無えのか」

「自動つてことです  
オート

時間は午後。ちょうど今日はどの学校の授業が早めに終わつているらしく、まだ早い時間なのに大通りには学生の姿も多い。もちろん一人に関して言うと、どちらも学校なんてものには通つていなかから放課後も授業中も関係ない。好きな時間に起きて、好きな時間に歩き回るだけだ。

たまに学生がいではない時間帯に出歩いてしまつたりして警備ロボット、通称ドラム缶から注意を受けることもあるが、大概は片手間に一方通行<sup>アクセラレータ</sup>が能力を使って電気信号を操作し、追い返す。

基本的に一方通行は日常的に能力を使い、快適な生活を楽しんでいた。学園都市としては建前として能力の乱用を自粛するように呼びかけているが、勿論それを鵜呑みにしている学生などいない。

特に一人は、超能力者の中でも相当にフリーダムに動き回っている方である。質の悪いことに、この一人は系統こそ違うが、どちらも学園都市において敵無し、と言い切れる存在だった。

「…………で、キミにとつてはどうでもよくても、実験の途中で呼び出されたんだ。まさか何も考えてないことは、ないはずだよな？」

「おウ」

「ないはずだよな？」

「お、おウ。そりや、そオだ。まあなんだ、とりあえずメシでも食うか」

「…………やれやれ、振り回されるのには慣れてるってことです」

目指す場所は、いつものファミリー・レストランだ。

最近どうやら一見して普通じゃない客の来店が

二人除く

増えてきたおかげで店員も肝が据わったらしく、以前一回強盗事件に遭った時も全く慌てず冷静に対処出来たらしくと噂であった。おかげで繁盛しているらしいが、逆に濃いメンツばかりが集まっていると密かに店長が冷や汗を流しているのは咎に付けて決して見せない裏事情である。

「いらっしゃいませ、こんにちは。いつもの席が空いていますか、そちらでよろしくですか？」

「おウ」

「 隨分と慣れたのは僕だけじゃないみたいってことです」

よく見る店員に案内されて、このまたよく座る席へと移動する。実はあからさまに怪しい二人組がよくこの席に座っていることを常連の客なら大体が知つていて、意識して座らないようにしているのだが、そんなことは誰も知らない。

この時間帯にファミレスなどに来る奴は大概がお喋りに夢中で、長居する。だというのにその席はしっかりと空席であった。

「さて、何か面白メニューは無いかなア」と

「 ああ、コイツはいつも通り放つておいてもいいってことです。僕は「一ラを」

「はい、かしこまりました」

真っ先にメニューの端から端まで食い入るように眺め始めた白髪の少年を完全に無視した店員は、比較的常識人だと認識している白衣の青年からの注文をにこやかに受ける。

しつかりと食事をとる一方通行アキセラレータに対し、この青年が飲み物、それも炭酸しか頼まないのもまた同じくいつも通り。

たまに新人の店員がしどろもどろに応答してしまつことはあっても、やはり常連としてはこの店の居心地が良いことには変わりなかった。

「杏仁麻婆で懲りなかつたのかつてことです」

「そんなことで挫けてたら、第一位の名が泣くつてもンだろ。おオ  
い店員さん、あんこ入りパスタライス下さア」

「かしこまりました。こちらは「注文の「バークドーピング」といいます」

「ありがとうつてことです」

もはや アクセセラレータ一方通行の注文について店員も動じることはない。

昨日は確かに存在していた杏仁麻婆はメニューから消去されてい  
た。あれの危険性をローン店全てに知らしめるには、一日だけで  
十分だつたようである。

ちなみにメニューはタッチパネル方式の近未来型。リアルタイム  
で料金や商品が表示される上に、会員などは自動的に価格が修正さ  
れるので、セールだの何だと悩む必要が無い優れものだ。

もつとも様々な実験の恩恵で文字通り、腐るほどの金が通帳に残  
つてしまっている アクセセラレータ一方通行や、そもそも炭酸系の飲み物しか頼まな  
い力ガカリなどには無用の長物かもしれない。

むしろ白髪の少年にとつとしてみれば、面白メニューを口頭で照  
会してくれる馴染みの店員の方が何割かありがたかつたりするのが  
寂しいところだ。

最後に頼りになるのはやはり人と人との関わりだというのは、真  
理の一つなのだろう。

「お待たせいたしました、こちら『あんこ入りパスタライス』でございます。ミルクの方はサービスですので、『じゅっくりおくつるぎ下さいませ』

「来た来た来たア、今日も期待してゐるゼHー！」

「これまた随分なゲテモノつてことです。ていうかそろそろ『ザート』と『メインディッシュ』の組み合わせは止め欲しいってことです」

にこやかに笑う店員が持つてきたのは、大皿に盛られたパスタ。かなり分量がある。例の如く小皿が一つ付いているのは、もはや形式美となつた同席者への配慮以外にも本来は一人分という理由があるのかもしれない。

いや、むしろ量としては十分に一人分であつたとしても、このキワモノを一人で全て食べようとする客がいないからだろうか。

「ああ、気になるのはそこなんだ」

「ンだよ、なんか言いたい」とでもあるのか？

「いや別に。ただ、味には言及しないんだなつて呆れちゃつたつてことです」

期待の通り、あるいは危惧した通り、次のメニューもこれまた見た目に厳しい料理だつた。

『あんこ入りパスタライス』。これほど分かり易いメニューも無いだろう。とにかく見てそのまま、という代物なのだ。

おそらくは抹茶が練り込んであるのだろうパスタは平べつたい麺を使つていて、熱々。その上に白いクリームがかけられていて、白いゲレンデには真っ黒なあんこが敷かれている。

だが危ぶむ無かれ、パスタの下にはまだボスが潜んでいる。何故かピンク色に着色された得体の知れない、米。それは単体で十分に異色を放つ存在だろうに、さらにおかしなことになっているのだ。

ああ、なんということだろうか。それ自体は冷たいはずなのに、ほかほかと湯気を上げる生クリームとあんこ。この表現は何度となく使つたが、悪夢以外の何モノでもない。

「それじゃ、いただきまアす！」

「ドキドキ

ぱくん、もぐ、もぐもぐもぐ。

あんこと生クリームを抹茶パスタに絡めて一口食べた一方通行の反応を見るべく凝視する。

呆れながらも、最近は若干この挑戦と友人の反応を見るのが樂しみになりつつあるガガリであつた。

「どうだい？」

「

「普通に美味エ。なンか表紙抜けだな」

「はあ、なんだ良かつたじゃないか。クソ不味いのに当たるよりはマシってことです」

普段と違い、ぽかんと目を見開いてパスタを飲み込む友人に、こちらもきょとんとしたカガリは当然の反応を返してみせる。

どうやら今回は麺の方が小細工をしていたらしく、普段の『メインディッシュ+デザート』といつイカれた組み合わせではなかつたようだ。

米も決してゲテモノではなく、しっかりと味を計算していくじを使って炊いた餅米は、普通の米よりもこのメニューのバランスを安定させる。

どうやら見たところ麺の味が、上に乗つかっているクリームやらあんこやらと調和しているらしい。それならば確かに、まあ、今までの料理に比べればマシだな。

「つまんねエ」

「はあ?」

「こんなフツーの味を求めてたわけじゃ無エンだ、俺は。そんなんモンじゃ俺的好奇心は満たされ無エンだよ」

「散々痛い目に遭ったのに、まだ懲りないのかつてことです」

「痛い目に遭うのも、俺的好奇心を刺激すンだ。満たしてるのでつ

ても過言ぢや無い」

「 はあ」

とは言つても味は氣に入つたらしい。ぶつくさ言ひながらも白髪の少年は黙々とパスタを口へ運んでいく。

一方通行はゲテモノ料理、キワモノ料理、イロモノ料理の類が大好物ではあるが、それとは別の話として随分と舌は肥えていた。

「 お客様」

「 ん ？」

黙々とパスタを処理していく一方通行をぼんやりと眺めながら最後に残つた黒い炭酸飲料を飲みきつた力ガリの耳に、聞き慣れない声が届いた。

ぐるんど、微妙に人間離れした柔軟加減で首を曲げた彼の目に飛び込んだのは、これまた見慣れない店員の姿。短めに髪の毛を整えた若い女性で、若干不気味な力ガリを丸くした目で驚いた、というか怯えたように見つめている。

「 も、申し訳ござりませんお客様！ 店内が少々混み合つて参りまして、もしよろしければ、相席をお願いしてもよろしいですか？」

びくり、と哀れなぐらい震えた店員が涙声にも近い声が漏れる。

それを聞いた周りの席の客 大概が常連であった から信じられない物を見るような目が集まつた。

この迷惑こそかけないが扱いづらい常連は触れずにそつとしておくのが最良といつのが店側と客側、共通しての認識である。

どうやらこの若い店員、新人のようである。もしかしたら大学生のバイトなのかもしれないが、どちらにしても触れてはいけないものに直ら触れに行くあたり、ただ者ではない。

もつとも、すでに後悔し始めているようなのではあるが。

「相席イ？」

「は、はい！ 出来ましたりでよろしくんですが、はい、本当に、出来ましたりで ！」

「おや、相席だつてよ。じオスンよ？」

もはやがくがくと震えつつある店員としては、おそれべ無駄に威圧感のある一方通行アケセラレータから「嫌だ」と一言言つて貰えれば、それを幸いと一目散に逃げ出すつもり満々なのだろう。

いくら相手が怒つていなし、というか期限を悪くしていないう段階にいるとはい、正直な話をするば正体までは知らないだろうとはいえ、この一方通行の前には長いしたくないといふだらう。

「 僕としては新鮮で、それもまた良いんぢやないかと思つて  
ことです。キリはじつだい？」

「俺もまア、たまには悪くねエな。　いいぜ、連れて来いよ、そ  
の不幸な奴をよオ」

「は、はい！　かしこまりましたあ！」

ギラリと目を光らせた一方通行<sup>アクセラレータ</sup>が意地悪そうに、といづよりは凶  
悪そのものと言いたげな顔で笑う。

何とか外見が中学生程度の体躯と身長だからマシだが、顔だけ見  
ると犯罪者を通り越してテロリストである。某巨大大国コメリカ当  
たりから悪の枢軸扱いされても否定出来ない。

「　まあ子ビも泣かれンのも慣れた」

「子ビもがいるところ出歩いたが最後、何もしないのに風紀委員<sup>ジャッジメント</sup>  
や警備員<sup>アンチスキル</sup>が湧いて出てくるのは不思議つてことです」

「あいつら、1人見かけたら10人はいやがるからなア」

ざわりざわりと密かに浮ついていた店内が、今度は怯えるかのよ  
うに静かになり始める。

新入り店員の目論見は見事に失敗し、もはや半泣きに近い有様で  
彼女は『相席でも良いから。風情あるし』と綺麗な笑顔で言つての  
けた迷惑な客を迎えて行つた。

店内の客、全てが彼女に向ける視線はこれ以上ない同情を含んで  
いるが、同時に他人は他人だ。

出来ることなら一生でも、あんな立場に立たされたくない。皆が  
皆、そう思つてゐることだけは間違いないのだろう。

「お嬢様、いかがでござります。」迷惑をおかけしておつますが、

「ああ、ありがとう。ほら黒子アンタも礼言いなさい  
ひとつついで座れっつうのっ！」

「あああお姉様の愛が痺れるうあうあうああうあああああああ？」

もはや死んだ目をしていた店員が連れてきたのは、連れだつた二人の女学生。

そし  
てやけに丈の短いスカート。

密かに学園都市の男子学生の間でも人気の名門女子中学校の制服。厳しい学則故にほぼ百パーセント外部に出回ることがないというそれは、そもそも外を出歩く学生すら少ないとから神秘的な雰囲気すら纏っている。

「『めんなさいね、』『歓談中に邪魔しかやつて』

「待ち人が来たらすぐに退出させて頂きますの。少しの間だけ、失礼いたしますわ」

1人は茶色の真っ直ぐな髪の毛を、肩にかかるぐらいの短さに切りそろえた少女。活発で勝ち気そうながらも、誰ばかることなく美少女と称するだろう中学生ぐらいの少女。

いや、来ている制服が中学生のものだから当然に中学生なのだが、おそらく連れよりは先輩なのだろう。

あくまで自然体ながらも、何より印象的なのは瞳。自分自身の道をしつかり真っ直ぐ歩いているのだと伺わせる真っ直ぐな光を宿らせている。

きっと今まで一度たりとも、自分が歩いてきた道を、これから自分が歩いていく道を疑つたことなどないのだろう。そう思わせる強い力を秘めた瞳であった。

もう片方の少女は、おそらくは後輩。

ツインテール……が、枝分かれしてDNAの螺旋構造のようになつた特徴的な髪型をしている。

こちらも美少女。しかし色香……とはまた違つ、具体的なんだか抽象的なんだか分からぬが、だいたい斜め四十七。ぐらい違う雰囲気を辺りにまき散らしており、実に不可思議というか、違和感を感じる。

まあ見たところ間違いなく年下の少女であることにには違いない。

これが三十。や四十五。や六十。などでない辺りが、微妙な理由を端的に表しているだろう。とにかく絶妙な違和感があるのだ。

もつとも袖に付けている緑色の腕章は風紀委員のものだ。能力者を取り締まる立場にいる風紀委員には腕自慢も多く、この少女も制服が表すとおり、最低でも強能力者であることは確実である。

「 テメエは ツ? !」

「 .....はい? 」

その片方、髪の毛が短い方の少女を見た一方通行が目を見開き、  
アクセラレータ

睨み付ける。

信じられないものでも見たかのような、驚愕に満ちた瞳。いや、驚愕とも違つ、まるで宿敵と正対したかのよつた、神経の張り詰めた目であった。

決してそこに怯えはない。学園都市最強の超能力者、一方通行に怯えるものなど何もない。

だからあるのは、怯えや同様ではなく、緊張。

それも閃光のように、電撃のように疾るわけではなく、彼らしく静かに、氷のように、冷たくピリピリと敵意が走る。

小柄で華奢な少年ながらも、一方通行の持つ威圧感は潮一級だ。  
尋常じやないレベルで目つきの悪い、犯罪者どころかテロリスト一步手前の白髪の少年に睨まれた短髪の少女は、びくっと震えて一歩後ずさった。

「……へえ、こんな巡り合わせもあるのかってことです

「 あら、貴方はもしや……？！」

「うん？」

ツインテールの風紀委員<sup>ジャッジメント</sup>が、何かを思い出したかのように白衣の青年、カガリを指さす。

他人事のように一方通行<sup>アカセラレータ</sup>と、睨み付けられてビビる女子中学生をぼんやり眺めていたカガリは、今度は予期していない自分へのアプローチにびっくりと体を震わせた。

学園都市序列第一位『一方通行』。

学園都市序列第三位『超電磁砲』。

学園都市序列第六位『無尽火炎』。

学園都市に五十八人しかいない『空間移動能力者』の最上位に位置する大能力者。

それこそ濃いも薄いも様々なキャラクターを持った学生達が集まる学園都市の中でも、特に濃い主人公達。

本来ならこうして出会いはずのなかつた彼ら、彼女らがどうしてここで集まつたのか。

そしてその出会いが、どのようにこれから物語に関わっていくことになるのか。

当然ながら当事者であるところの彼らにそんなことは分からず、また同じように、未来もさっぱり分からない。

何せ未来なんてものは、能力開発よりもチップンカンブンなのだ。いつたい誰の言葉だつたか、しかしそれは、真実でもあった。

## 第5話『長点上機、常盤台、超能力者+』（後書き）

プログラミングのテストは完璧だつたはず。

電気と物理も何とかなつた。しかし回路がなア。

と、電気系学科の苦悩を冬霞は冬霞は打ち明けてみる。結局この界隈では共感してくれる人は多いんじゃないかなアつて、冬霞は思つ訳よ。

## 第6話『能力者、四人、レストラン』（前書き）

ついに、ついに夏休みだア！ と、思つたら意外にもスケジュール帳の中が予定でパンパンだぜ。

忙しい休みになりそうです。後期まで 保つかな？

## 第6話『能力者、四人、レストラン』

常盤台中学。

学園都市には大小様々な学校が存在する。

それは幼稚園や小学校は当然として、中学校や高校大学、のみならず専門学校や通常の学校といつて定義に当てはまらないような多種多様な学問を学ぶ施設をも内包していることを指す。

何よりカリキュラム自体が特殊で、国の中にあるはずなのに文部科学省の定めた大学設置基準や義務教育で教える科目などすら軽く無視して遙かに高度な勉強をさせる学園都市。簡単に括れるわけがない。

学生は自分の資質や望む将来に併せて、それこそ無数に存在するカリキュラムや進学先などから好きなものを選んで成長していくことが出来る。

もちろん自分のレベルが釣り合えばの話ではあるが、こと学問をするということを念頭に置く限り、学園都市は最高の場所であることは間違いない。

だが、やはり自然のように外の世界と同じような常識、体制だって存在する。

ましてや学園都市で習得する技術の代表的なものといえば、世界でもここでしか実用レベルの研究に成功していない超能力。そして能力には当然のように、序列があるのだ。

明確にランク付けがされた序列が明らかになる学園都市では、当然のように厳しく序列によつて様々なことが区別されていた。

それが最も顕著に出るのは奨学金だろう。

強度や研究などに対する貢献度、あるいは成績などによって、額

絵性に支給される奨学金は激しい差が生じる。

例えば大能力者<sup>レベル4</sup>などは学生の身分では考えられないぐらい多額の支給を受けるが、逆に無能力者は最低限に色をつけた程度の額だ。

もちろん生活必需品の類が相当に安価な学園都市では無能力者<sup>レベル0</sup>でもある程度の常識的な節制さえ心がければ十分に有意義な生活が出来る。

とはいっても奨学金の差はダイレクトに生徒間の格差に影響され、向上心にも影響すれば、逆に嫉妬や劣等感を刺激することにも通じるのだ。

だが他にも、違いはある。

例えば学力によって入れる学校が違うように、能力の強度<sup>レベル</sup>によって入学できる学生を制限する学校だつて、あつた。

その顕著なものが、常盤台女学園。

学園都市が誇る様々な学校の中でも上位に位置する、正真正銘のお嬢様中学校。その学生はすべからく最低でも強能力者<sup>レベル3</sup>というエリート揃いであり、幻覚な教育と最高レベルの能力開発が受けられる。学園都市全体で行われる超大規模な運動会である大覇星祭では長点上機学園に後れを取つてはいるが、それでもエリートの集まりにして、最強のお嬢様学校の称号は変わらない。

「　えーと、私の顔に何か付いてるのかしら？」

「　」

「しょ、初対面でいきなり他人様の顔を睨み付けるのは、よくないと思つんだけど。いや、そりゃ楽しくお喋りしてるとこらを邪魔し

ちゅうつて悪かつたとは思つけど

「 別にイ」

「 ツ、何が言いたいのよ ー。」

じつと睨みつけたままの田の前の田髪の少年に、常盤台中学の制服を着込んだ短髪の少女は、ぴくりと口の端と眉を歪め、語氣を荒げた。

確かに自分は、田の前の少年とは初対面。まさかここまで特徴的な少年を、忘れるなんてことはありえない。

とはいへ白髪の少年は何故か自分に敵意を向けてくる。こいつ、何も理由がないとも考えられない。極めて不可解、かつ同時に不愉快でもある。

「一方通行」

アクセラレータ

「 煩エな、分かつてンだよ、そんことぐらこは。 はいはい悪ウイジョいましたね、早く座れよそこのシンテニ下もよオ」

「 三 下 ? !」

ピキリ、と今度は同じく常盤台の制服を着込んだシンテールの少女が顔をひくつかせる。

三下 とは随分な言い方ではないだろ? か。自分たちは曲がりなりにも素性はさておき見るからに常盤台の学生であり、最低でも強能力者。間違いもしないエリートであるのだから。

もちろん彼女も三下扱いされたことなど、生まれてこのかた一度たりともありはしない。

いわば青天の霹靂とも言えるわけであるが、どうこう言ひ方をしても失礼であることには違ひが無いだろう。

「想像していたのとは随分と違いますのね。しかし確かに私はお茶をしに来たのでしたわ。遠慮無く、お邪魔させて頂きましょ、お姉様」

「ビリビリ　ハツ、ありがとう黒子<sup>黒くろ</sup>、もう少しでコイツに十萬ボルトお見舞いしちゃつとこりだつたわ」

「名前が違いますのよ、お姉様つ？！」

自らのチャームポイントであるツインテールを猫のしっぽのよう逆立たせた年下の少女、白井黒子がわめき散らした。

対してお姉様と呼ばれた方の少女は、大きく数回深呼吸をして漸く落ち着き。カガリの隣に座る。

ちょうど一方通行とカガリは隣り合わせに座っていたので、どうしても二人のどちらかと少女達がペアにならなければいけないのだ。

「あ、店員さんにカフェオレを一つ」

「私にはホットティーをお願いいたしますの。お砂糖とミルクもお願いいたしますわ」

「か、かしこまりましたっ！」

額の辺りからビリビリと、軽く強能力者を超える強度の電撃を出し始めた“お姉様”にビビリながらも新人は注文を受ける。元々からこの席に着いていた、この店の地雷らしき常連客もそうだけど、新しく連れてきてしまった客もトンデモない連中だ。というか、どうして自分はこの濃すぎる組み合わせを相席にしてしまったんだろうか。尋常じゃないレベルで、悔やまれる。

「あ、それと俺にハラオウン抹茶一ツ」

「 は？」

「ハラオウン抹茶だよ、やつてんだろ?」

「あ、はい、かしこまつました！　すぐにお持ちいたしますううううう！」

ギロリと機嫌悪く睨まれ、可哀想に彼女は逃げるようじその場を立ち去つた。

下手すれば、今までの一連のやりとりで十分にトラウマに近いダメージを負つたことは間違いない。というか今夜の内に辞表を提出していくもおかしくないだろ?。残念過ぎる。

いや、もう残念というよりは不運を通り越して運命だったとしか言いようがない。運がなかつたというよりは、そもそも運命という絶対の巡り合わせが悪かった。そう開き直ってくれるより他にない。

「 ハラオウン抹茶つて、何? 」

「俺も知らねエよ。まあ飲んでみりや分かんだる。一度あんこで喉も渴いてたところだし、丁度良い」

「はあ 。なんていうか、独特的の趣味持つてるわね、アンタ」

「煩エな、人の趣味にグダグダ口出していくじゃねエ」

「別にそんなつもりは無いけど 。ていうか口悪いわね、アンタ」

「煩エな、他人の口にぐだぐだ文句言つンじゃねエ」

「それは理不気だと思こますけれどビヘー」

「黙つて三下。早く座れ」

「三下ア?...」

再度三下呼ばわりされ、黒子は再度髪の毛を逆立てて怒声を上げるが、当然のように一方通行が気にすることはない。  
むしろテンプレ的なアクションにさつきまでは何とか反応していた目から全く興味が消え失せ、追撃する気すら一緒に消え失せたようだ。

「 キミは縄張り荒らされた犬かつてことです」

「ンだよ、何か言いたいことでもあるのかよ」

「別に。けど、そこまで威嚇することもないと思つてことです」

六人は何とか座れるだろうボックス席に、一人組が一組。しかも同じペア同士で対面しているのではなく、それぞれ斜めに分かれて座るというあまりにも空気の悪い状況。

それというのも最初にかがりと一方通行<sup>アクセラレータ</sup>が対面で座っていたのが良くないのだが、この空気でわざわざ席替えを言い出す度胸があるかというと、それは強度に関係なく誰もが同じ。

もちろん傍若無人に見えて意外とチキンな一方通行<sup>アクセラレータ</sup>も、胃痛持ちでストレス性な黒子もそう。ついでに同じく超能力者<sup>レベル5</sup>だが常識的な感性を保持している短髪の少女も同じ。

非常に気まずい空氣の中、誰から口を開こうか、お互いに機を伺い合っていた。

「 えーと、せっかくだし自己紹介ぐらいはしませんと、お姉様」  
「 ちょ、黒子アンタ ！」

「え、ええ、せっかく同じ席に居合わせたんですね。これも何かの巡り合わせ、一時の間だけでも親睦を深める」ともちろんお姉様は異論ありませんわよね？」

黒子<sup>ほくし</sup>、裏切る。

自分から敢えて口を開いたように見えるが、実のところ完全にキラーパスだ。一番やばい最初の自己紹介、および今の状況に対する責任を“お姉様”に擦り付けた。

「 くつ、裏切ったわね黒子、あんなに一緒にいたのに…」

「お、お姉様が私の想いに応えて下さった?！」

「んなわけないだろうがああ！ だから暑いのにひつづくなピカチユウウ！」

「痺れるううああああ？！？」

目を輝かせ、軽く飛びついた黒子にこれまた軽い電撃が襲う。

他の客の迷惑にならないギリギリのラインの電撃と叫び声ではあるが、常連である二人が一緒だからか、まだ店員からの注意はない。どちらにしても公衆の面前で能力を頻発するのは非常に勇ろしくないと言えるのであるが、まったくもって気にしてはいなかつた。何せ、貞操の危機である。

「 仕方がないわね。私の名前は御坂美琴。常盤台中学の一年生よ」

「私は白井黒子。お姉様の後輩で、風紀委員第一七七支部に所属しておりますの」

渋々ながらもしっかりと自己紹介する一人に、特に美琴の自己紹介に、カガリと一方通行は一人して互いに意味深な目配せを交わす。それを見た二人は怪訝な顔をするが、もちろん初対面の人間の目

ジャッジメント

線の示す意味など、分かるはずもなかつた。

「自己紹介してもうつて黙つたままじや、ちよつと礼儀に外れるつてことです。僕の名前は」

「存じておりますわ。 学園都市序列第六位、『無尽火炎』こと、カガリさんですわね？」

「あれ、なんで僕のこと知つてるの？」

「初春から聞きましたの。ほら、先日貴方強盗を退治されたでしょう？ その時に居合わせた風紀委員ですわ」

確かに先日、路地裏で自分に絡んできた発電能力者を撃退した記憶がある。

そういうえばあの能力者の後をジャッジメントが追いかけてきて。うん、確かに、そいつが強盗で警備員アンチスキルとの取り調べや事情聴取が云々という話もあった。

結局あの時は一方通行の機嫌アクセラレータが悪くなりそつだつたし、事情聴取も面倒だつたからその場の風紀委員ジャッジメント 確か初春飾利サンにその場を託して逃げたんだつたか。

「はい。あの後も初春は貴方にお礼を言えないものかと悩んでおりました。あのときの風紀委員ジャッジメントつて、もしかしてキミの同僚だったりするのかい？」

「はい。あの後も初春は貴方にお礼を言えないものかと悩んでおり

ました。ですから書庫<sup>パンク</sup>で貴方のことを検索して 」

「成る程ね、それで僕が超能力者だつてことも知つてゐることか。  
納得いったつてことです」

ジャッジメント  
風紀委員の持つてゐるセキュリティレベル、閲覧資格はランクC・  
図書館や公衆端末などのランクがDで、教師達がBであることを  
考へると、ある程度は十分に書庫<sup>パンク</sup>の検索が出来るのだろう。  
レベル5  
もちろん超能力者のリストが見られる程だとは思えないのだが、  
そこは風紀委員だ。何か特権とかの仕様があるのだろう。

「 それじゃあ「ouisのことも?」

「ええ、そのときに一緒に調べさせて頂きましたわ。 学園都市  
序列第一位、『アクセラレータ一方通行』さん」

「へエ。。。まさか俺のデータまで調べられるなンて、そいつ随分  
な特技持つてんじゃねエか」

ギロリ、と一方通行<sup>アクセラレータ</sup>の目が黒子を捉え、さしもの凄腕<sup>ジャッジメント</sup>風紀委員の  
黒子もビクリと震えた。

もちろん仮に初春が違法行為を行つていることを一方通行が知つたとしても、彼に初春をどうこうする権利も、する気もない。

「序列第一位に、第六位 。アンタ達が?」

「間違いありませんわ、お姉様。一方通行さんの方の眞偽は証明出来ませんが、カガリさんは書庫に顔写真がありましたの」

「へえ、自分以外の超能力者か。随分と久しぶりに会ったわね。  
常盤台の心理操作はいけ好かない女王様だつたし」

その情報が眞実だと知つて、美琴は不適にもニヤリと笑う。  
今まで自分が相手にしてきたのは武装無能力者集団の下端の下  
端や、そのあたりを転がつていてるエリート崩れの異能力者や低能  
力者。

常盤台には大能力者なども結構な数、揃つてはいるが、誰も彼も  
おとなしくて力比べをするような性格ではない。

「そういうことなら改めて自己紹介させてもらうわね。

私は常盤台中学の一年生、学園都市序列第三位『超電磁砲』の御  
坂美琴よ」

「『一方通行』だ。ヨロシク」

「学園都市序列第六位、『無尽火炎』こと、カガリだ。こっちもよ  
ろしくってことです」

テーブルを挟んで三人、奇妙な体勢ながら握手を交わす。  
考えるとこの場所には学園都市最強の七人の内、半分近くが集ま  
つているということになる。

超能力者が三人もいたら、国一つぐらいは簡単に滅ぼせる。1人  
で一国の軍隊を相手に出来る化け物が三人も揃つてているのだ。学園

最大戦力といつても過言ではない。

「お待たせしました、こちらカフェオレとホットティー、ハラオウ  
ン抹茶でござります。

お客様、先ほどは新人がご迷惑をおかけしたようで、大変申し分  
かりません」

「あアいいんだよ別に、気にする程じゃ無い」

「ありがとうございます。今後とも、当店をどうぞご贊同に。こちら  
割引券でござります、どうぞ次回ご来店の際に使い下さいませ」

力チャンカチャンと静かに音を立てて三つのコップがテーブルに  
置かれる。

カフェオレとホットティーは「ぐくぐく標準的なこの店の人気メニ  
ューで、おやつ時や放課後のティータイムの時間帯にはガンガン売  
れていた。

一方、あんこ入りパスタライスに満足できなかつた一方通行アクセラレータが頼  
んだのは、見た目はそれなりに普通の代物だった。

冷房が効いている店内だから頼める代物は、分厚い茶碗に注がれ  
ており、熱々であることを示すかのように盛大に湯気を立ち上らせ  
ている。

中の液体は緑色。いや、ここは素直に抹茶と言えばいいのではあ  
るまいか。とにかくぐぐく普通の抹茶であり、サービスについて  
いる小さめの煎餅とセットで頂くのだろう。

今までのメニューと違つて、あの一方通行アクセラレータが頼む品にしては随分  
と見た目が普通過ぎる。何か、トンデモない味か臭いかをしている

に違いなかつた。

「 来た来た、一部で有名なハラオウン抹茶」

「あ、私これ自販機で見たことあるわ」

「へエ、こいつを知つてゐるなンて見所があるじやねエか第三位。コイツは元々自販機オリジナルだったのを、この店でレストランで出せるレベルまでクオリティを追求したものらしいんだよ。

椰子の実サイダーやらスープカレー缶やら、キングランブータンジューースやらと一緒の自販機傑作シリーズなんだ。

もう実機の自販機の方じや幻の一品らしいんだが、さて、ビンな味がすンのか拝見させてもらひづぜH 「

先ほどまでの緊張感は何だつたのか、アクセラレータ一方通行は嬉々として、その細い両手で茶碗を捧げ持つ。

自販機巡りが立ち読みと同じく趣味の一つである美琴は見たことがあるらしいが、それはうらやましいことだ。レストランなど外食の奇天烈メニューばかり追い求めている上に出不精のアクセラレータ一方通行は、未だかつてコイツに出会つたことがなかつたのである。

「そんじやま、早速。

ズ、ズズ、ズズズズズズ

ズズズズズズズズズズ

」

「ドキドキ」

「も通りドキドキと興味深そうに注視しているカガリの前で、  
一方通行はゆっくりと抹茶を啜る。  
一口、一口、三口。

別にお茶の席ではないので、三口で飲みきらなければならないなんて作法はない。なのに一方通行は何かに魅入られたかのように一息で、長い時間をかけて、抹茶を飲み干した。

「 力

「 か？」

「 力、力力、力力力力力力力力力力！」

「え、ええ？！　えええええ？！－！」

抹茶を全て飲みきつた一方通行が、突然甲高い笑い声を上げ始め、いきなり狂人と化した白髪の少年に、常盤台のお嬢様一人は盛大にビビッて後ずさった。

いつものことだといえばその通りではあるのだが、やはり突然このような態度を取られると恐い。特に、初対面の間柄ならば。

「あ、甘エ！　地獄のように、天国のように甘エ！　てか純粋な砂糖よりシロップよりも甘エ！！　甘すぎて頭がガンガンする、過糖過ぎて脳みそが自動で激しく回転すンぞこりやあ！　トンデモ無エ  
甘さだアアアあああ！！！」

そのあまりの悶えように、思わずメニューのカロリー表示をチエックした三人は絶句した。

およそ飲み物に、否、1人分の食物として存在してはいけないような尋常ではないカロリー量。それはどんな運動、勉強、苦難を乗り越えればこのカロリーを消費できるのか想像もつかない糖分の暴力。

味なんて想像できるもんじゃない。下手すれば化学的に合成したりとあらゆる人工甘味料を凌駕するだろう人工的な甘味。  
その暴力の前に晒された一方通行アキセラレータに、あんな症状が発症したとしても頷けてしまう。

「ねえちょっと、あれって本当に第一位？ いつもあんなカンジなの？」

「信じられないかもしだれだけど、正真正銘の真実ってことです。あんな調子で面白メニューを追い求めては失敗する毎日なんだよね」「第一位ともなりますと、個性的ですわね。いえ、あんな様では個性的などという音便な言葉では片付けられない気も致しますが」

それは言わない約束である。

彼のことを知る者は大概が某かの手段で第一位の情報を知つて、彼を殺そうと襲いかかつて来た者であり、それらは須く返り討ちに遭つていた。

よつて彼が第一位であることを知る者は、「ごく僅か。暗部の人間などは情報を渡されているかもしれないが、その情報と目の前の二一クな白髪の少年が一致することは一生涯無いだろ。」

「それで、第一位と第六位ともあるつものが揃つてこんなところで何をしてんのよ？ 長点上機学園の制服着てるみたいだけど、あそこつてこの店からは随分と遠くない？」

「ああ、僕も一方通行アカセラレータも学校には通つてないってことです。あっちこっちの研究施設で実験に協力したり、あるいは自分自身に課せられる実験を消化したりの毎日さ」

「くそつたれな実験を、な

「あら、気がついたようですね」

「いい感じに狂つてやがつたぜ、この飲み物。これさえあればビンだけ演算しても大丈夫な力口リーがあンな」

「そりゃあ恐ろしいってことです」

あんまりにも甘かつたらしく、気を利かせて、といつか当然の未来を予想して店員が持つてきた、暖かい“普通のお茶”を煽る。確かに脳は人体で最もカロリーを消費する部分だ。特に能力者の演算は相当に脳を酷使するから、もしかしたら演算能力を拡大する実験などに効果があるかもしない。

「今日は実験の途中でコイツに拉致されたから、実は何をするつもりなのか全然分かんないってことです」

「別に何か用事があつたわけでも無エンだよ。ただ、1人は暇

だからな。 セウジウテメヒらはどつしたンだよ。常盤台のお嬢様が、こんなところで油売つてちやまざいンじやねエのか？」

イライラと質問する一方通行に応えて、黒子が口を開く。

上品に紅茶を啜つていた彼女は普段から初春の相手で疲れているからか、一人の超能力者<sup>レベル5</sup>の相手を早々に諦め、力オスな部分は全てお姉様に丸投げしていた。

「ああ、私たちは待ち合わせよ。黒子がどうしても友人に会つて欲しいって言つもんだから」

「そう嫌そうな顔をなさらないで欲しいですの、お姉様。もちろん私とてお姉様が普段からファンの人たちの無神経な振る舞いにほとほと呆れていますわ。

けれど初春は まあ、その、優秀な風紀委員<sup>ジャッジメント</sup>ですの。なんといいますか、ちょっと色々と問題なところはありますわ。

それでも分別を弁えた大人であることは違いありませんわ。それに私、あの子にあの調子でお願い事されると断れませんの。胃が痛くなりますし」

「 アンタも苦労してるのね」

ゆつくりゆつくり、胃を労るかのようにゆつくり紅茶を啜る黒子に、普段向けているものとは違う同情した視線を美琴は送る。

いつもなら自分のペースで美琴に変態行為を繰り返す黒子ですが、今の彼女は世間の、といづみよりは個人の荒波に揉まれて随分と疲れて見えた。

「 おや、噂をすれば影ですよ、お姉様」

「へ？」

と、黒子がゲッと口元を歪め、まるで本当は会いたくないけど、それでもどうしても会わなきやいけない嫌な上司にでも町中で遭遇してしまったかのような表情で、窓の外を見る。

その表情はあまりに生々しく、美琴もいつものように軽く悪態の一つもついてやうづかといふ気分すら湧かず、黒子につられて外を見た。

そこにあるのは綺麗に磨き上げられたガラス窓。

大きめに設われ、外の光を十分に店内へと導くガラス窓からは、外からこぢりを見つめる一人の女学生の姿を写していた。

1人は背中の中程までのばしたストレートの黒髪と、強気な性格であることを感じさせる自己主張する眉毛が特徴的。

もう1人はクセのあるショートカットの頭の上に、色も種類も鮮やかで様々な花冠を乗せ、片袖に盾の意匠をあしらつた緑色の腕章を付けた少女。

ここに登場人物達が出そろい、物語は始まりを告げる。

なんてことのない巡り合わせか、それとも運命のいたずら、あるいは運命そのものか。

その判断が彼らにつくのは、これから彼らが何てことのない日常を通り過ぎ、非日常に、それも突然的に始まって終わるものではなく、彼らの歩く道行きそのものを変えてしまうような、事件。

そんな事件に、巻き込まれてからのお話であった。

## 第6話『能力者、四人、レストラン』（後書き）

次話はついにレールガン第1話！

ここからピッチを上げて、原作に入れていきたいと思います。  
どうぞよろしく！

## 第7話 「常盤台、駅上機、横川中学校』（記書き）

来週が終われば、楽になれる！

とりあえず今週は書きためた「コイツを投下です。夏休みに入ったらヒマになるなんて幻想でしたね。

バイトに部活にボランティアに、正直暇つぶしもあつらしね。

## 第7話『常盤台、長町上機、樋川中学』

第七学区は、航空宇宙産業に関する研究を一手に引き受けた第二三学区に匹敵する広さを誇る、学園都市最大級の学区である。

航空宇宙、という非常に大規模な研究をする第一三学区が広大な敷地面積を実験に使用するためのスペースとして確保しているのならば、この第七学区はまさしく学園都市といつ名前の指示通り、学生のために存在しているような学区だ。

その敷地の中は常盤台中学を代表とするお嬢様学校によって作られた閉鎖的空間である『学舎の園』や、他にも各種様々な学校が犇めぐ。

学生の数が増えれば、当然のように学生のための施設も増える。第七学区は巨大なデパートや各種喫茶店、ゲームセンターなどの娯楽施設を多数抱える、学生の為の街であった。

そんな第七学区の中央通り。

先日、かなり大規模な強盗事件があつたファーストフード店も程近い。他にも学生が学校の帰りに寄るのに都合の良さそうな喫茶店やら屋台やらが立ち並び、中央の道は多数の縁が植えられ、ベンチや、腰掛けることを想定された頑強で座りやすい造りの花壇が並ぶ。この暑い盛りだというのに、あちらこちらで学生達はクレープやハンバーガーや飲み物を片手に談笑していた。

結局のところ彼らとしては、そこに腰を落ち着ける場所と馬鹿話が出来る友人達が居れば何も問題ないらしい。いかにも学生らしいと言えようが。

「まさか、ここまで大所帯になるとは思いませんでしたの」

「つうか何で俺達まで連れ出されてんだよ？暑イ、怠イ、涼しいところに行きてエ、むしろ涼しいところで行きてエ」

「自堕落にも程があるってことです。まあ、あのままだと結局のところ居づらうことには変わらなかつたから、どつちにしう出なきやいけないことになつてたとは思つけどね」

よく使用する慣れ親込んだファミリーレストランから追い出された一行は、第七学区の中央通りの一角、通行人の迷惑にならない都合の良い場所で車座になつて対面していた。

??放課後ということもあって、人通りはかなり多い。流石に多数の学校を抱える第七学区は巨大であるが、それでも全ての地域に均等に様々な施設が存在しているわけではない。

??だからこそ彼ら学生は学園都市にも数少ない娯楽施設が集中している中央エリアに好んで集まり、完全下校時刻までの僅かな時間を有意義に過ごそうとしていた。

?

「あ、あの、その節はありがとうございました！ 改めまして、

私は風紀委員第一  
ジャッジメント

七七支部所属の、初春飾利と申します！」

?

??真っ先に興奮した様子で口を開いたのは、頭の上に花飾りを乗

せた少女。

？？柵川中学校の極めて一般的かつスタンダートなセーラー服を着ており、右の袖には立て続けをあしらつた特徴的な緑色の腕章をつけている。

？？

「ああ、あの時は後のこと全部任せて逃げちゃって、悪かったってことです。もしかして何か迷惑かけちゃったかな？」

「いえ、それは顔見知りの警備員アンチスキルの人アンチスキルが適当に書類を弄ってくれたんて大丈夫だつたんですけど」。

？？そんなことより、十分なお礼も出来なくて、申し訳ありませんでした」「

「いやいや、それは別にどうでもいいってことです。大したことも、していないしね」

？

？？綺麗な長い黒髪と語尾が特徴的な顔見知りの警備員アンチスキルは、かなり話が分かる人で、じどうもどろに先ほどまでは確かにいた協力者のことを説明する初春に「気にするな」と笑ってみせた。

？？基本的に法律を遵守する存在である外の世界の警察官アンチスキルとは異なり、こちらは転じて基本的にボランティアである警備員アンチスキルは、そのあたり随分と融通が利く。

？

「それより初春、隣の方は 同じ中学の方とお見受けしますけど、どなたですか？」

？

？？力ガリと初春に對して三角形の位置に、美琴と並んで立つていた黒子が、半ば置いてけぼりの状況に耐えかねたように口を開いた。  
？？その言葉に釣られるようにして、全員の視線が初春の隣で飄々と笑っていた少女が目をぱちくりさせる。

？

？？初春と同じ柵川中学のシンプルなセーラー服を纏い、ツヤのある黒髪を背中の中ほどまで流している。

？？側頭部のやや上、アクセントになる位置には白い花弁をあしらつた髪飾りが清楚なイメージを添えていた。

？？何より、美琴とは違つ、意志というよりは意思の強さを表す真

つ直ぐな瞳。

？？超能力者であり、絶対的な実力以外でも本人の資質、あるいは人柄などから滲み出るカリスマのようなものを持つた美琴。

？？黒髪の彼女の視線に感じるものは美琴のそれとは違い、等身大の人間として共感を覚える類のものだ。

？

「あ、自己紹介遅れてすいません。私、初春の同級生の佐天涙子つていいます！」

「佐天さん、ね。初めてまして、私は初春の同僚で、風紀委員第一七

七支部に所属しております、白井黒子と申しますの。

？？こちらは私のお姉さまで」

「御坂美琴よ。常盤台中学の一年生。まあ一応は黒子<sup>へんたい</sup>の先輩つてことになるわね。でも年上とかは気にしないでくれると嬉しいわ。どうぞよろしくね」

「御坂、美琴？ もしかして常盤台の超電磁砲？」

レールガン

？？

？？驚いた、というよりは“やつぱり”と言いたげな吐息を漏らし、目を見開いて美琴を見た。

？？そこに何か嫌な感情を『えられる響きはないが、だからこそ美琴は困惑する。

？？自分がそうなりたかったか、そういう扱いを望んでいるか、そういうことには彼女は紛れもない学園都市序列第三位なのだ。

？？娯楽の少ない学園都市の中で、巷に情報が公開されている超能力者レベル5は、例えば一一などの外の世界のアイドル達と同等以上の人の氣を誇る。

？？もつとも超能力者の殆どは書庫レベル5にも顔写真はおろか本名すら載つていらないという体たらくだから、実際に巷に名前が知られている超能力者は美琴ぐらいなのだが。

？

「いやー、まさか本当に超能力者《レベル5》に会えるなんて、流石は初春！」

「だから私、本当だって言つたじゃないですかッ！ それなのに佐天さんが『じゃあこの田舎見て確かめるおー』なんて言つから」

？

？？泣きべそのような声を上げながら、初春が佐天の胸をポカポ力と叩く。

？？元々この場は常々黒子がお姉様お姉様と慕う人物が常盤台の超電磁砲レベル5だと知った初春が、若干の黒い圧力を『えながら黒子に頼んだのであるが。

？？あまりの嬉しさに舞い上がって、下校の途中、佐天に話してしまったのが運の尽き。

？？基本的に暇をしているので初春に構つか、ネットサーフィンに勤しむしかない佐天が、そんな好機を見逃すはずがない。

「学園都市最強の発電能力者<sup>ハーベクトロマスター</sup>、どんな人かと思つたけど 意外と普通？」

「普通 ？」

「あ、いや、悪い意味じゃないんですよ？ ただちょっとホラ、なんか如何にもつてカンジの超能力者を想像しちゃつてたから、なんか拍子抜けつていいますか。むしろ安心したつていいますか ねえ初春？」

「あ、は、はいそうですね！ 私も白井さんのお話を聞いていたときの印象とは、ちょっと、その、違う様な 完全無欠のお嬢様を想像してたのは、まあ、事実なんですけど。

？？でも佐天さんの言つとおりです！ 別にだからどうこうつてわけじやなくて、むしろ親しみが湧くぐらいです！」

？

？？超能力者<sup>レベル5</sup>。強度によつて厳格な序列がつけられてしまつ学園都市において、5と4、5と3、5と2、あるいは5と1か0。その比較のどれにも違ひなどない。

？？大能力者<sup>レベル4</sup>であるうと無能力者であるうと、圧倒的な能力を保持する超能力者<sup>レベル5</sup>の前では一様に等しい存在だ。即ち、無力。  
？？だからこそ、彼らは憧れと畏れを一身に集める。まるでアイドルのように、あるいは独裁者のように。

？？そしてアイドルのようにと形容されるからには、当然のように

ファン達による偶像化という宿命がついてまわるものだ。

？？まさか超能力者はトイレに行かないなんて考えている者はいな  
いだろうが、それにしても神格化に近い恐怖を向けられる存在であ  
ることには違いない。

？？例えば常盤台中学における御坂美琴が、近寄りがたい完全無欠  
のお嬢様として遠巻きに憧れ、結果として親しく喋る知人が全く存  
在しない、などという半ばイジメにも近い状況に陥っているようだ。

？？

「 はあ、やっぱり私ってそう思われてたわけね。なんていうか、  
周りの認識と自分自身の認識との間に随分と齟齬があるんじゃない  
かとは思つてたけど」

「 常盤台中学ではお姉様に話しかけることはあるが、近づくことす  
らファンクラブの間で牽制し合つてありますもの。抜け駆けは村ハ  
分ですわ。

？？もつとも最近は会員ナンバー001である“この”私が、お姉  
様に“迷惑をおかけする”ことがないよう、しつかりと統制してお  
りますので“心配無———”あッ？！

「 な、ん、で、一年生のアンタが会員ナンバー001なんでものにな  
れんのよッ！..」

ゴインツ、と鐘を叩くような鈍い音がして、失言をかました黒子が  
頭を抑えて蹲る。今しがた制裁を加えた拳から煙が上がっているの  
を見れば分かる通り、お姉様の拳骨は尋常ではなく効く。

？？

「 おイ花瓶」

「だから花瓶じゃありません

つて、

貴方は確か 「

「一方通行だ。あのツインテのペースでうつかり着いて来ちまつた

が、俺達は何時になつたら」無沙汰出来んですかア？」

？？楽しく冷房の効いた快適なファミレスでランチを楽しんでたつてのによオ、追い出されちまつて不機嫌MAXなンですけど？ 責任とつてくれません？」

？

？？見事な拳骨を喰らつて悶絶する黒子を呆然と眺めていた初春は、横あいから聞こえてきた極めて不機嫌そうな声に、ビクリと身を震わせた。

？？小動物のように怯えても仕方がないくらいの迫力がそのドスの効いた、だとうのに自分と同年代の程度の声には込められていたのである。

？

「つウかよオ、マジで迷惑なんですけど？ 別にテメエらのお仲間でもなんでも無Hのに同類扱いで一緒に会計済ませちまつてよオ。俺は冷房に当たり足ンなかつたつてのに 」

「まあまあ 一方通行、そこまでイライラすることでもないつてことです。

？？どうせこれからPのプラスなんて何も考えて無かつたんだろ？？旅は道連れ世は情けつてことです。いづれのモ一興じやないか

「またテメHは少しでも樂しそうなもンがあるとホイホイ着いて行きやがつて 」

？？いいか、いつも散々俺に振り回されてるなンて言つてやがるけどよオ、実際振り回してンのはテメHの方なンだからなア？！」

？？？

？？？ダラダラした白衣の胸ぐらを掴み、ブンブンと前後に力の限り振つてみせる。

？？ベクトル操作などしてはいなかから、これは純粹にモヤシレベルの力のしか持たない自分のスペック。だといつのに超能力者の第六位である友人は驚く程に軽く、そんじょそこらの小学生にも例えられるこの腕力でも簡単に揺さぶられていた。

「そりは言つても、最初に僕の予定も聞かないで無理矢理連れ出るのは君の方つてことです」

「俺ア いりんだよ、ビうせ大概ヒマしてンだろオガ

「その珍しくヒマして無い時が今日だつたわけだが。というかその理屈は理不尽極まりないつてことです」

若干の諦め、というよりはむしろ嬉しそうな響きすら伴つた力ガリの言葉が勘に障つたのか、一方通行は友人を揺さぶる手に力を込めた。

アハハハハと一本調子で笑い続ける力ガリの方が、若干、いやかなり身長が高いから、その様は片方が凶悪の権化である一方通行だったとしても、実に滑稽な構図である。

「 どつちかつていうと、むしろコッチの方が学園都市第一位か、と若干の失望は抱きましたけど」

「正直、それは否定出来ないわね。なんていうか、超能力者っぽくないというか、ホントに第一位なの？」コイツ

無言で断つていれば年齢不相応の迫力がある少年も、普通に年上の友人とケンカしている姿を見れば、背伸びして糸がつていてる子どものようにも見える。

もちろん超能力者レベル5という称号、そして学園都市序列第一位という格付けは伊達バカではない。

その能力は書庫にも載つておらず、運良く対峙して生き残れた者にも、正体がつかめない。だというのに、間違いなく最強。

第三位である超電磁砲、御坂美琴に対しても、一位と一位は別格と言われている。その理由は不明だが、どちらにしても圧倒的な実力を備えているであろうことは想像に難くない。

「あン？ 疑つてんなら今ここで気持ちよくブツ殺してやろオカア？」

「ふうん、良いわね、そういう流れ嫌いじゃないわよ。私も一度、自分以外の超能力者レベル5と戦つてみたいと思ってところだし」

「ちょ、ちょっと御坂さんも一方通行さんも落ち着いて下さいよっ？」こんな往来で能力使つたりしちゃダメですって！」

眼光鋭く睨み合つた二人を見て、初春が慌てて間に割つてはいる。超能力者が具体的にどんなことを出来るのか、というのは知らな  
いが、どちらにしてもこんな往来で学園都市序列第一位と第三位が一触即発の状態で睨み合つていいわけがない。

「じゃあ僕が立会人を　」

「力ガリさんも余計に煽らないで下さい！　もづ、せつかく御坂さんと遊ぼうと思って白井さんにお願いしたのに、これじゃ台無しですよぅつー！」

学園都市一百三十万人の中で七人しかいない超能力者<sup>レベル5</sup>。

その中でも特に有名で特に人気の高い、同姓かつ先輩という魅力的なポジションにいる超電磁砲<sup>レールガン</sup>こと御坂美琴はミーハー気味の有為春にとつてみれば最高の憧れだった。

「しかしながら初春飾利サン、いつたい遊ぶって言つても何する氣なのか分からないつてことです。結局こうしてファミレスからは追い出されできちやつたわけだけど、何かプランもあるのかい？」

ぱちくりと目を瞬かせた初春が黒子の方を向き、それにつられて1人を除く全員の視線が一力所に集中した。

確かに、黒子に頼んだのは初春でも、この場をセッティングしたのは黒子の方。もちろん美琴は今日の段取りについて何も聞いていないし、無理矢理連れ出された力ガリと一方通行も同じ。

「も、もちろんプランは出来ておりますのよー。ちょっと予定とは違いましたが、まずはデパートにでも行きまして、ショッピングを

「 ちよつと黒子、このメモ」

「 つて、お姉様？！」

おそらくは今日の予定を書き出したメモと思われるものを取り出した黒子の背後に回った美琴が、それを電光石火の速さで取り上げる。

ザツと素早く目を通せば、女の子らしい丸文字で、とても女子中学生とは思えない欲望丸出しの計画が書き込んでいた。

曰く、初春をダシにしてお姉様とのスーパーいちやいちやタイムとか何とか。媚薬などといつ言葉を用いている段階で、もはや警察にブチ込んだ方が良いのではないかと思わせるだけの変態っぷりである。

「 却下。却下却下却下あ！ 黒子ほくろおー！ このアンタの欲望丸出しの計画なんかに協力できるわけないでしょ！ うがあつ！！」

「 名前が違いますのよお姉さ ぴかたゆうつ？！」

手加減抜き、とはいえた人体を殺傷しない程度の本気電撃が黒子を襲う。

天候すら操作できる超能力者レベル5だが、絶妙に調整された電撃は執拗に、強烈に、しかし明確な怒りを持つた制裁である。

「 初春さん、佐天さん、こんな奴のことなんて気にしないで、

ゲーセンでも行かない？ その一人も、良いわよね？

「つうか俺達ア 同行することになつてんのか」

「まあ気にする程じやないつてことです。じつせヒマだつたし、やること思いつかないなら一緒に遊ぶのもまた一興」

鮮やかな笑顔を浮かべて同意を求めてくる美琴に、一方通行アカセラレータと力ガリは顔を見合わせる。

確かに予定は無かつたし、自分たち自身が腐つてしまいそうながらいにヒマはしている。力ガリにしても、今日はもつ実験なんて気分でもなかつた。

それに別に他人と一緒にいるのがことさら嫌いというわけでもない。アカセラレータ一方通行は一期一会の馬鹿騒ぎはそれなりに好きな方だし、力ガリは人との交流を好む。

「まあ色々と複雑な事情はあつけどよオ

「は？」

「いや、別にテメエに話すような」とじやねエ。気にすンな、第三位

ただ、田の前で首を傾げる不思議そつな顔を見ていると、若干のしこりを胸に感じるのもまた事実。

まさかこの少女は、自分たちのことを知らないのだろうか？ あの凄惨な毎夜の出来事を、血煙香る実験を。

「この太陽のような少女は、知らないのだろうか。学園都市に息づく闇を、自分たちが塗れている闇を。同じ超能力者という位階にいながら。

「いいぜ、別に、ヒマだし付き合つてやんよ」

「あら、本当に良いの？ 別に無理してまで来て貰おうとは思つてなかつたけど」

「ちゅうじゲーセンでも行いつと思つてたところなんだ。結局のところ同じ場所に行くことになんだろが。だったら別に、一緒でも問題無エ」

見極める必要がある。

ここで出会つたのが仮に偶然であつたとしても、その出会いが導く結果すらも偶然とは思えない。そこには某かの必然があつても不思議じやないだろう。

となると自分たちに出来ることは、ここでの出会いが何を生むのか、それを考へることだ。それを考えなければ、致命的な不幸を、悲劇を生みかねない。

ならば、見極める必要があるので。彼女の人柄を、彼女の能力を、彼女の実力を。

見ているだけでイライラする顔も。感情をめまぐるしく変えるが故に、押し込めていた感情を刺激するその顔も。何を思つているのかを、見極める必要があるので。

「おイ、花瓶に没個性

「また花瓶つて言つたあ？！」

「ぼ、没個性！」

ギロリと柵川中学の二人に睨み付けるような視線を送つた一方通行<sup>アクセラレ</sup>が口を開く。

相も変わらず他人につける渾名が酷い。当然一人もいきなりの暴言に、むしろ呆然と目を見開いた。

「はじめまして、学園都市序列第一位『一方通行』だ。よろしく

「は、はあ、初春飾利です、どうぞよろしく？」

「佐天涼子よ。ていうか没個性つて何ですか没個性つて！」

日だまりの中ですら、暗がりを探して息を潜める。

そんな悪党<sup>アウトロー</sup>な生き方をする必要もないぐらい強すぎ<sup>アカセラレ</sup>る、学園都市の超能力者<sup>レベル5</sup>。

しかしそれは、能力での話。

その精神は、心は、未だに成長途中の少年のものだ。いくら彼が強くても、無敵でも、それは 变わらない。

そしてそれは学園都市の全ての学生についても、言えること。彼らは全てが不完全であり、成長途上なのだ。

結局のところ、だから、学園都市で起るることは全て、学生達の物語。

すなわち不完全で成長途上な心と心のぶつかり合いで。だからこそ彼らはもがき、あがき続ける。

もちろんこれから楽しくゲーセン巡りに洒落込もうとしている彼女たちにそんな自覚はないだろうが。

その彼女たちを一步、二歩、下がって見守る超能力者の第六位。<sup>レベル5</sup>  
彼の瞳が妙に優しげに笑っていたのを見ることが出来たのならば、  
もしかしたら、自分たちの立ち位置といつものにも勘づくことが出来たかもしれない。

しかしそれも当然、仮定の話であるのだ。

第7話『常盤台、長野上機、横川中学校』（後書き）

黒子 胃痛持ち  
美琴 無自覚でし

なんかね、やうに色々とおまけ属性が付いてきそうな今日この頃。

## 第8話『少年少女、放課後、クレープ屋』（前書き）

投稿が暫く空いてしまって申し訳ありませんでした！  
作者近況については活動報告を「」参照下さい。ホント、夏休み  
は死ぬほど忙しかったぜエ。

## 第8話『少年少女、放課後、クレープ屋』

広い広い学園都市の中でも、格段に広い第七学区。その中央広場には当然のように学生たちが多く集まっている。

中央広場と言つても、言葉から想像するような開た空間があるわけではない。強いて今、言葉による説明を試みるならば、広い遊歩道の両側に車道が据えられた、暗渠のような公園と表現するべきだろうか。

実際に一般的な暗渠といえば車道一車線分ぐらいが精々なのだろうが、ここは元々からしてこういう作りである。

故に学生たちが限られた放課後を謳歌する公園は、広々としていて快適だった。

「いやあ遊んだ遊んだ！ 久しぶりに遊び~~く~~したねー、初春！」

「そうですね、佐天さん。最近は風紀委員ジャッジメントの活動と勉強で忙しそぎてゆっくり遊ぶ時間もとれませんでしたし、満喫しました」

そんな夕方近く、という今は若干早いおやつ時の時間帯。思いに寬ぐ学生たちの中に、些か異質な集団が散らばっていた。

子ども連れと思しき、大人である。

学園都市には一百三十万人以上の住人が居住しているが、その八割以上が学生。

いくら教師や研究員、各種施設の職員なども存在しているとは言つても、二百三十万人中の八割には束になつても敵わない。特に第七学区は学生街といふこともあり、纏まつた数の大人の姿は目立つ。近くにはバスガイドらしき制服をまとつた女性の姿もあることから、おそらくは学園都市のガイドツアーであることは予想できるが、それでも物珍しく、それなりに学生たちの視線は集まつていた。

「確かに、今日はこれでもかというぐらいに遊び尽しましたわね。私がゲーセンなんて初めてでしたわ、お姉様」

「の割にはシューティングとかイイ線いつてたじやない。やっぱり空間移動能力者つて空間把握能力が高いから、ガンシューティングとかレー・シングゲームとか得意なのかもね。」

それに引き換えアンタ達、言った割にはそこまで強くないし

「あン？」

「こちとら毎日毎日ゲーセン通いしてんだよ、なんて大口叩いといで、私と格ゲーで五戦中一勝二敗一引き分けなんて、随分と残念な戦績じやない？」

「うつせエな、今日は寝起きだから全力出すのが急かつたんだよ。本気出せばテメエなんてイチコロだ第三位。手加減されたことも分かんねえのか、三下が」

「まあ経験値が高くて強いとは限らないってことです」

だがその中でも更に異質な集団がいた。

間違いなく学生であり、第七学区の中央通りを歩いていても年齢的には一切違和感はないだろう。

しかし彼ら、彼らの風貌と雰囲気は、それなりに超常現象についての親しみがある学園都市の学生たちでも、思わず一度見してしまう特異さが存在していた。

まず常識の範疇から目立つのは、常盤台中学の制服を着込んだ二人の美少女。

そもそも美少女という段階で人類の半分の熱烈な視線を獲得したことには保証されるものであるが、こと学園都市の中においては常盤台中学の制服というものにも大きな意味が存在している。

誰もが憧れる、<sup>レベル3</sup>強能力者以上の能力者でなければ入学を許されないお嬢様学校。その押しも押されぬ名門校は女子校ばかりで構成された『学び舎の園』という自治区に近い空間の中にあり、全寮制といふこともあって、このような広場へは滅多に出てこない。

もちろん『学び舎の園』の外にも寮はあるのだが、純粹培養お嬢様の多い常盤台中学の生徒は、登下校の途中に寄り道をするという発想がそもそもない者が多かつた。

言わば学園都市的な希少種。お目にかかれば「利益があるかも」という類の存在だ。

さて、その集団の中にはもう一人組の少女達がいた。

こちらも常盤台の一人には若干派手さという点でこそ見劣りするが、実際には負けず劣らずの美少女である。

シンプルな明るい紺色の襟と鮮やかな赤いタイのセーラー服は、第七学区に存在する柵川中学の夏服。

特に背の低くショートカットの方の少女は頭に色とりどりの花々

をお花畠のように乗せており、それが童顔な彼女には非常に似合つており、魅力的であった。

背中の中ほどまで綺麗な黒髪を伸ばした少女も、白い花弁をあしらつたシンプルな髪飾りをしており、清潔で清涼なイメージを自らに添えている。これもまた、魅力的だ。

だが、どちらかといえば、やはり人目を引いたのは彼女達に同行している一人組の男だろう。

片方は目つきの悪い少年だ。だいたい中学校一年生か二年生ぐらいの年頃で、ブランド物の黒いシャツと、これまたブランド物のスリムなデザインのジーンズをシンプルながら見事に着こなしている。日本的な顔つきをしているのに髪の毛は新雪よりも真っ白で、その凶悪な光を宿した瞳は鮮血のよおうに紅い。

何より今し方、人を殺してきましたよとでも言いたげなピリピリとした空気を辺りに放つており、見ているだけでも圧迫感がある。それが同行者達に向けられていないというのが、もはや奇跡なのだろう。少しでも武芸を嗜んでいたり、多少の修羅場を経験したことがある人間ならば、彼に人殺しの匂いを感じることが出来たはずだ。

もう一人は連れの少年よりも少しばかり年上の青年だ。高校生にも大学生にも見える長身で、短めの髪の毛を無造作にオールバックに纏めている。

着込んでいるのは、このクソ暑い初夏の日中うだとうに長袖の白衣。しかも裾はダラダラと脛の辺りまであるポートに近いものだ。

顔立ちは精悍で、ハンサム。優しげな微笑みを浮かべてはいるが、その目をよく見れば、実は何も映していない空虚なもののが分かることだろう。

初夏という季節に全く不釣り合いな格好と特異な存在感に思わず視線が行くが、実際に目にしてみれば驚くほどに存在感が薄い。

フワフワと雲か霧のようだ。まるで学園都市の超科学によつて現実世界に投影された、立体映像であるかのように。

「しつかし、思う存分遊んだら少し小腹が空いたわね。どこかで軽くオヤツでも食べようか？」

「賛成です！ 私、最近@ちゃんでちょっと話題になつてるクレープ屋知ってるんですよ！ すぐ傍なんで案内しますよ、こっちです！」

やや浮かれ気味の佐天が楽しそうに先行する。普段からネットサーフィンを趣味として愛好している彼女は学園都市の様々な噂や伝聞形式の情報について非常に詳しい。

もつとも信憑性という点では若干の不安要素があるわけだが、彼女ほどにもなるとガセネタであつても楽しんでしまう豪胆さを併せ持つていた。

勿論クレープ屋に関してはネットの口コミはあるが、それなり以上に信頼性のあるサイトから仕入れた情報である。個々人によつて好みも変わらうが、試してみる価値はあるだろう。

「佐天さん、随分と『機嫌ですね』

「一方通行からマルヲカートで三勝もぎ取つたからね。  
、つとこ、  
アクセラレータ

「誰が没個性だつての誰が！」

「どうやら先ほど<sup>アマ</sup>の暴言をかなり氣にしていたようである。

一方通行<sup>アカセラレータ</sup>に没個性呼ばわりされた佐天は、常々自分の個性はともかくキャラクターが弱いことを気にしていた佐天は、ゲーセンに入れるや否や<sup>アカセラレータ</sup>一方通行のプレイスタイルをじーっと観察していた。

そして彼が苦手にしているゲーム、そしてそのゲームプレイの癖を観察し、分析の結果として見事に勝利をもぎ取ったのだ。しかも、三回も。

「けつ、あんなの偶然に決まつてんだろオが、調子に乗りやがつて」

「へつへーん、『勝負つてのはなア、その時点での実力がモノを言うんだよ。コンディションとか相性とか場所の不利とか、グダグダ言つ奴は負け犬だぜ』なんて大口叩いてたくせに、よく言つよ！」

「クソ、このアマ絶対いつか殺してやらア」

「学園都市序列第一位ともあるつものが、無能力者相手に本氣出すんですか？」

そこには空氣読むでしょ・♪♪

ギリギリと一方通行<sup>アカセラレータ</sup>の中から破壊的な音が聞こえる。佐天の軽口には非常に苛々するが、確かに無能力者相手に、それも特段自分に敵対しているとかいうわけでもなく、ましてや先ほどまで一緒にいた相手に能力をふるうのはカッコわるい。

自分に向かってくる者にはどんな仕打ちをしたところで心が痛むことなどないが、それ以外の弱者相手に暴力を振るうのは品性が下がる気がする。

何しろそれは、自分が最強であることの証明にはならないのだから。

「ふむ、君が言いくるめられてるなんて初めて見るつてことです」

「煩エな！」

「君がそれにキレないのも、珍しい。なんか随分と丸くなつたってことです、アクセラレータ一方通行？」

「

逆らう奴は、問答無用で全殺し。

全ての人間が自分に恐怖していればいい。全ての人間が自分を忌避していればいい。全ての人間が、自分に触れなければいい。

自分はただの恐怖でありたい。自分はただの暴力でありたい。自分はただの脅威であればいい。

それが自分、学園都市序列“第一位”、アクセラレータ一方通行。

「まあ、この面子だからね。色々と思うところもあるのも分かるつてことです。君らしくは、ないけどね。僕としては君が楽しければそれでいい」

「別に、そんなこたア無エよ。俺アいつでも変わンねエ、一方  
通行だ」

「もうかい。それならそれで僕は別に構わないとことです。もと  
もと僕が君にビーハツ言つ權利なんて無いからね」

すぐ近くにあるはずのクレープ屋が、やけに遠くに思える。  
常盤台と樋川組の四人は、背後から漂つてくる不穏な気配に思わず無言。楽しいはずの道中が、突然おかしな空気に包まれた。当然ダラダラ冷や汗を流している佐天の責任では絶対にないのだが。

「あ、ああっそろそろ近くですよクレープ屋！ ていうかアレですアレ！」

「ほ、本當だ！ うわあー綺麗な屋台ですねえ佐天さん！」

ついに空氣に耐えられなくなり、佐天は慌てて目の前のクレープ屋に走り出した。

じちやじちやした裝飾が流行る中で、必要最低限のセンス有る外觀はクレープの味そのものに自信があるのだという無言のメッセージを発信しており、分かる人には分かる玄人向けな店である。

もちろん女の子向けといふこともあり外装は全体的にファンシーな色を用いているが、それでもシンプルなことには変わりない。

ともすれば男性でも違和感なく来店することが出来るだろう。もちろん外見と服装による個人差と、注文の内容による差もあるだろうが。

「さあて、何にしようかなー！　イチゴクリームは鉄板だけど、バナナと小豆も捨てがたいし。ちょっと今月のお小遣いピンチだけど、奮発して『テラックス三種盛り』とかも」

「すいませエん店員サン、この『ホイップクリーム』とお好み三種の豆クレープ』を一つ。小豆と納豆とチリビーンズで」

「…………」

クレープ屋の大きめな看板を眺めながらメニューを悩んでいた佐天が、隣で何の躊躇いもなくスラスラと注文をする一方通行に待つたをかける。

自分だってこの店はネットのロゴ<sup>アカセラレータ</sup>で漸く知つて、今日が初めての来店だというのに。どうしてこの少年はまるで知つていたかのようにメニューを選べたのだろうか。

しかも、こんなマニアック、というか誰も選ばないだろうチョイスを。

「あン？　そんなの知つてたからに決まつてンじゃねエか」

「どいで？！　どいやつて？！」

「ともなげに言い放つ一方通行を問い合わせる。

自慢じゃないが自分はかなりの情報通であるのだ。ネット媒体にこそ限られるが、親友の初春のようにハッキング技術こそ持ち合っていないが、それでもそれなりにネットの世界のことは通じてい

るのだ。

だといつにこの男、自分が巡回している板の片隅にあつた情報を何故知っているといつのか。

「よく行くサ店の兄ぢやんがなア、俺がそういう料理とか好きなの知つてよオ。オススメだつてンで、この店教えてくれたンだ」

「あの人は他にもいくつか紹介してくれてたね。やっぱり最後に頼りになるのは人伝での情報つてことです」

「ま、俺アそういうメニューばかりの店つてのは逆に風情が無くて嫌エなんだけどよ。

このメニュー、豆の種類がお好みで選べつから、逆に簡単にや氣づけねエ組み合わせつてのが気に入つたぜ」

「ほんちホイップクリームとお好み三週の豆クレープ、小豆と納豆とチリビーンズですねー。お待たせしましたー！」

皿慢<sup>アキセラ</sup>げに話す一方通行の前に、注文した品が差し出される

それはおよそ、佐天にとってクレープという定義に当てはめることが出来るギリギリのラインというものを、わりやあもうブツちぎりで、一切の良心の呵責なく斜め上どころか次元すら異なる世界線へと

向かつて吹つ飛んでいく代物であった。

クレープ生地はじく普通の、スタンダートなものだ。昨今では生地に色々と混ぜ物をする風潮もある中で、しっかりと基本を守っているのは好感が持てる。

クレープのベースはホイップクリームだ。厳選された素材から作られたそれは舌に優しく触れるまるやかな食感を食べる者に与え、ふわりと崩れるクレープ生地と共にこの店のランクというものを悟らせるだろう。

だが、トッピングがいけなかつた。純然たる事故、といつよりは人災と言つべきだらうか。ここまで酷い組み合わせを、佐天は未だかつて見たことはあるか、聞き及んだことすらない。

一番最初に目に付くのは、小豆。薄い黄色のクレープ生地と、白いホイップクリームの中で一際目に立つ。

どうして餡子といつのは乳製品との相性がよいのだろうか、よく一緒に使われる。だからこそホイップクリームに小豆といつ組み合わせはむしろ定番のものであり、今更騒ぎ立てる代物ではない。

しかし次が不味かつた。小豆の隣に見え隠れするのは茶色く、ねばねばと白い糸を纏つた日本人の朝ご飯のお供。即ち、納豆である。甘納豆、なんて食品も存在するが、基本的にこれは甘味と合わせる食料ではない。そもそも日本人の中でも強烈な臭気から苦手とする者も多いといつのに、何故よりによつて小豆とホイップクリームに合わせようと思つたのか。

注文主、否、もはや店主の正氣すら疑う。これは魔の組み合わせと言わざるをえない。

しかし最も恐ろしいのは、それらではないのだ。

その一つの豆の隙間からさらに強烈に個性を主張する刺客。茶色といつよつはまさしく小豆色をした、スペイシーで濃い臭いを放つ物体。

そう、つまり、これこそチリビーンズである。

タコスなどに使われるスペイシーな味と食べ応えが持ち味である食べ物は、確かにクレープ生地と合わないこともないだらう。

小豆と納豆の隙間から見える千切りキャベツと白髪ネギは、おそらくこの組み合わせに対しして店員がチョイスしたトップピングなのだ。何とか全体の味の調和がとれるようと工夫が見られるが正直どうなんだろうか。

「 それ、おこしーの?」

「 分かんねエから、食つンだよ」

「 それ、食べるの?」

「 食べられるか、じゃねエ。食べるンだよ」

店員からクレープ（謎）を受け取った一方通行アクセラレータが、その物体をしげしげと眺める。

見るからに毒々しい色合いと、ここまで近くに来れば明確に嗅ぎ分けることができる強烈な臭い。そもそも臭気が強い食材であるチリビーンズ、納豆、ネギ、甘ったるいホイップクリームとこっそり入ったカスタードなどが組み合わさっているのだから当然とも言えるのだが、それにしても酷い。

あまりのカオスに、思わず意識が遠くなる。とりあえず近寄るなと言いたくなるが、この店に寄ろうと言い出したのが自分である手前、さすがに逃げるわけにもいかなかつた。

「モソンじゅまア、 いただきます」

「 ドキドキ

「

「 もぐ、 もぐ、 もぐもぐ、 もぐもぐもぐ、 もぐもぐもぐもぐ」

L

「？」

۷

- ? ? ?

作った張本人である店員を含め、沈黙が辺りを支配する。  
そんなきわめて特殊な空氣の中で一方通行はいつものように、ド  
キドキと見守る力ガリの前で、クレープを一口、そして二口三口、  
黙々と満足するまで口に運んだ。

全くの無表情 そして鬼気迫る雰囲気、言葉をかけねりとする心臓  
踏まれる無言の“行為”。

て見たことがない。

楽しんでいる、といひのとは違う。嬉しい、とうような感じでもない。それは言つなれば彼の中では趣味を超え、もはや習慣であつた。

۱۷

לען?

「ええええええ？！？」

突如奇声を上げて悶え苦しみ始めた一方通行に、旧知の仲であり普段の奇行を

よく知る力ガリ以外の全員が驚愕の声を発する。

一応しつかりと立つてはいるのだが、一方通行の両足と上半身はガクガクと震え、痙攣一步手前だ。

こと“食べ物”を口にして、やつていい反応ではない。風紀委員である初春などは心配を通り越し、半恐慌状態で慌てふためきながら救急車を呼ぼうと携帯電話相手に悪戦苦闘している。

「い、い、い、い、い、い、いつてりとしながらまろやかな小倉の甘みを中和するあつさりした味つけのホイップクリームとのベストマッチ！ そしてそこに来てする粘着質ながらも丁寧な豆の味と芳香！ チリビーンズのスペイシーな辛味がその調和にカオスを添えてやがる。

何より異なつた三種類の豆の異なつた食感がたまんなく違和感を醸し出してンゼエ！ こいつはパネエ、マジでイかれてやがる！ どうしたらこんな組み合わせが選択肢に上がるようなメニューを平気な顔して出してられンだア？！」

「

## 総括

どうやら人災レベルとしか思えないこの混沌とした食べ物に、  
方通行は随分と高評価を下したようである。

ア  
クセラレータ

「要するに、おにしかつたってわけ？　その存在そのものが信じられないクレープ」

「いや、不味イ。ヒンでもなく不味イ。けどその中にも極めて特異な調和が存在しやがンだ。

「こオいう料理はよオ、美味くつても意味が無エンだ。かと言つて不味けりやいいつてもンでもねエ。

その組み合わせは無エだろ？！つて中に、考え出した奴の個性とか、思わず納得しちまうような部分があつてこそなんだよ。

その点コイツはパークドーム、堪ンねエー。店といいメニューの裏側をつくようなやり方といい、一流だぜ。いいセンスしてやがる」

「あつそ。もつ、よくわからんないから言及しないわ

「テメエみたいな三下にゅ分かんねエだろオな、この興奮はよ。まだ成つてねエゼ第三位

「それに関しては真剣に余計なお世話よ、ホント、マジで」

凶悪な顔つきを歪めたドヤ顔でさつぱり共感出来ない、といづよりは理解できない持論を滔々と述べる一方通行に、美琴は心底疲れた様子で反応する。

自分の感性とあいられない存在はことさら相手するのが疲れるというものだ。基本的に話が一方通行になるのだから。

「ていうか黒子、あんたダイエツトしてたんじやないの？　豆乳ホップクリームとバナナなんて甘つたるもの食べて大丈夫？」

「あまりよろしくはないです。ですがお姉様、私最近ちょっと胃の調子が悪くて。お腹に優しくてストレス解消になる甘いものでも食べなければやつてられませんわ」

「アンタも苦労してんのね」「

「そう思って頂けるのでしたら、もう少し黒子を労わって貰えますと嬉しいです。ぐ、具体的には、そう、身体的スキンシップとかピカチュウツ?...」「

「調子にのんなつ!」

クレープ屋の前で騒ぐ六人組はこれでもかという程に目立つていた。既に何人もの学生が、珍しい常盤台の制服に目を付けて写メつていたりしている。

そもそも五人組という人数の段階である程度目立ててしまう上に、一人一人のキャラクターが外見を含めて非常に濃いのだから、人目を引くのも当然だらう。

もちろん件の五人は今更そんなものを気にするようなタマジやない。悠々自適に、クレープ屋の前での馬鹿騒ぎを楽しんでいる。

もちろん店の前で営業妨害一步手前の馬鹿騒ぎをされるクレープ屋の方はといえば、たまつたものではないだろうが。

「つかよオ、花瓶にツインテ」

「人を大雑把に属性で括るのは止めて頂けません?...」

「私は花瓶なんかじゃありませんっ！」

好きで頼んだものではあるが、やはりその圧な臭気に耐えられず盛大に噎せていた一方通行が初春と黒子に問い合わせる。

トンデモない渾名をつけられた一人は懸命に抗議をするが、そもそもこの男、しっかりと本名で呼ぶ他人なんて片手の指で数えるぐらいしか存在しないので、まったく気にした様子もなかつた。

「ジャッジメント 風紀委員つてのは随分と暇人なンだなア？ 支部の人員が一人もこんなところでサボつて大丈夫なのかよ？」

「ジャッジメント 本来、ジャッジメント 風紀委員の活動は校内の治安維持が主ですの。アンチスキル 近年では警備員の手が足りないので校外でも活動しておりますが、基本的には越権行為ですわ」

「ですから校外の見回りとかは手が空いている風紀委員や研修中の新人とかで自主的にやってるんですよ。

拘束権こそありますけど、それも現行犯とか指名手配犯とか相手に限りますし、実は普通の学生とあまり変わらなかつたりします」

「まあボランティアに過ぎませんから。もちろん仕事はしっかりとやつておりますわよ？」

とはいえた毎日毎日風紀委員として活動していっては体が保ちませんの。今日は自己申告の非番ですわ」

「豆乳で作られた体に優しいホイップクリームのまろやな甘みを味わいながら、澄ました顔で黒子は言う。

給料や報酬の出ない風紀委員は、自らの正義感を糧にして職務に

励むより他ない。ならば自己管理は普通に仕事として治安維持を行つてゐる市政の警察などよりしつかりとやらなければならなかつた。疲労や無気力を言い訳に仕事をサボることがないよう、かといつて体を壊すこともないよう、学業の妨げにならなによつて、風紀委員の仕事が必要以上の負担にならないように。

であるから休暇や非番は基本的に自己申告であるし、その日の見回りのシフトなんてものも、研修などの例外を除き基本的に組まれていない。

その日いる人員で回す。もちろん助つ人などを非番の人間に“お願い”することぐらいはするが、その姿勢がないものにはそもそも風紀委員など務まらないのだ。

「もちろん非番の最中だらうと風紀委員としての自覚はしつかりと保ち、一般学生の模範となるべく行動するのは当然のことですわ。そうですね、初春？」

「え？ ええ当然じゃないですか白井さん！ いつもモートとしているように見えて、その実しつかりと周りにおかしなことがないか確認してるんですから！」

例えば

「

本人の言葉とは真逆に、目の前のクレープを食べるのに集中しているようにしか見えなかつた初春が、黒子の言葉にキョロキョロと慌てて辺りを見回す。

口の端っこに拭い損ねたクリームがついてしまつてゐるのは「愛嬌だらう」。その姿はどうやらかといえば風紀委員といつよりは、リスやウサギといった小動物だ。

「あ、ほら見て下さいあの銀行！」

「あアン？」

キヨロキヨロと辺りを忙しなく見回した初春は、大通りに建つて  
いる何の変哲もない銀行を指さした。  
外見も名前も別に不思議な点などない。学園都市の中でも幾つか  
の支店を持つ持つ大きな銀行だ。

「あの銀行が、どうしたンだよ」

「もう、しつかりと見て下下さいー！ほら、こんな瞬間にシャ  
ッターを閉じてるなんておかしいと思いませんか」「

瞬間、轟音。

夜間の重機による強盗すらも防ぐ分厚いシャッターが、内側から  
大爆発を起こして上げ、吹き飛ぶ。

大質量による攻撃もしつかりとシャットダウンするはずだとい  
うのに、恐ろしく違和感のある光景であった。

「　　って、えええええ？！」

「おのれ何事、私とお姉様との蜜月をおー！初春！惚けてない  
で警備員に連絡を！」  
アンチスキル

「ふえええ？……」

明らかに異常<sup>ジャッジメント</sup>に、黒子は風紀委員<sup>ジャッジメント</sup>として自分の頭を切り換える、手にしていたクレープを一気に口の中へと放り込む。

確かに非番ではあるが、目の前で異常が起こっているのに見過ごすわけにはいかない。厳密な職務時間の設定が無いというのは、すなわち何時いかなる時であるうと職務中<sup>ジャッジメント</sup>といふことでもあるのだ。

「黒子！」

馬鹿騒ぎをする他のメンツを尻目に既に自分の分のクレープを食べ終えていた美琴が叫ぶ。

今の爆発、例えば爆発物だとしたら自分も相手も危険なものであるし、仮に超能力であつたとしたら強能力者は優に超えるだろう。

「お姉様はそこでおとなしくしていて下さいませ！ 毎回毎回申し上げておりますが、超能力者<sup>レベル5</sup>であるうと一般生徒は一般生徒です。治安維持は我々風紀委員<sup>ジャッジメント</sup>と警備員<sup>アンチスキル</sup>にお任せを！」

「お腕につけた風紀委員<sup>ジャッジメント</sup>の腕章を握りしめ、若干のホイップクリームがついた口元を威勢良く拭うと駆け出した。

「なによ偉そう！」

「まあまあ、彼女の言うことも一理あるってことです。一般人がむやみやたらに能力をふるひと、それこそ自分が風紀委員にとつ捕まりかねない」

能力の乱用は禁じられているが、もちろん学園都市の学生がそんなことを守るわけがない。俗に不良と呼ばれる人種にしてもそ่งだが、眞面目に能力向上のために努力している学生にしても、ただ学校のカリキュラムを黙々とこなすだけで能力が上がるなどと考えるはずがなかつた。

それは風紀委員として活動している学生としても同じであるため、ことさら強く言えない部分はある。黒子とてあまりにも便利すぎる能力を持つた空間移動能力者であるから、なおさら乱用の傾向は強い。

しかし、それも対人となると話は変わる。ただでさえ強度によってはつきりと威力が変わる超能力を高位能力者が低位能力者相手に行使するうことは、プロボクサーが場末の不良相手に本気の殴り合いをすることと同義だ。

「そりや言いたいことは分かるけど、一応は超能力者の私がああやつて能力が必要な場面で襲ひにされるつてのは、って、ちょっと待ちなさいよ第一位」

「あン？ 用も無く話しかけんな第三位。俺アこれからお楽しみなんだからよオ」

「お楽しみ、じゃないわよ！ 今さつき止められたばっかなの、元はどうして何の躊躇もしないで向こう行こうとしてんのアンタは？！ 馬鹿なの？ 死ぬの？」

「はッ、そんなの決まつてんじゃねエか。お祭りだつてんなら、飛び入り参加も歓迎だろオ？ 便乗しねエのは損つてもンだ。違エか？」

「大間違いよッ！ さつき黒子が言つてたでしようが。一般生徒が無暗やたらに能力を使つたら懲罰モノよ？ ちょっと癪だけど、これは風紀委員であるあの子に任せて」

「懲罰ウ？ 笑わせんな、一体どこのどいつに俺が罰せられるつてんだよ？」

焦つたような美琴の言葉を、一方通行は嘲笑う。

そこにあるものは絶対の自信。学園都市第一位として、否、ベクトルの支配者である一方通行としての絶対の自信。

強者にのみ許される傲慢と驕りは、決して馬鹿にされる対象、愚とされる対象ではない。むしろそれは、その者の実力を語らせる場合すらある。

ましてや彼ならば、それも当然と頷けることだろう。

「俺ア一方通行だぜ？」誰も俺を止めらんねエ。俺ア俺のやりたいようにせるさ、好きなことを、好きなだけな

「それに振り回されることはちの方の事情も考えて欲しいってことです

「煩エな！ オラ行くぞ、久々の鬱憤晴らしだ。

「ちよ、ちよと待ちなさいよアンタ達！　何のこと話してんの？」

おもむろにシャッターが爆破された銀行の方へと歩き出した一方通行ラーティアとカガリに、ペースを乱されっぱなしの美琴は驚きの声を上げた。

今、自分が言つたことを忘れたのかコイツらは。風紀委員ジャッジメントのお世話になるつて話したはず、っていうかソレを私に諭したのはアンタ達だらうが。

「つーん、でもキミと僕たちは立場が違うだろ？　悪いんだけど、僕は基本的に楽しそうなことがあつたらすぐ首を突っ込むのが信条つてことです」

「それに振り回されるこいつの事情も考えて欲しいってことですか」「別に僕はキミに付き合つて欲しいとは、言つてないはずなんだけどな」

「チツ、そオレいづ細けHことばつかり言いやがつて、面倒臭エ」

美琴の言葉など意に介さず、一人は悠々と歩を進める。  
誰も彼らに指図することなんて出来ない。何故なら

「

「なアに、テメエが気にする」となンて無エよ、第三位。俺たちは“最強”で

「

「“絶対無敵”つてことです」

あまりに自信満々に言い放つ一人に、美琴は言葉を失くす。

別に二人の身が危険だから止めたわけではない。二人共が自分と同じ超能力者であり、なおかつ片方は学園都市序列第一位、もう片方にしても第六位である。

この二人に勝てる者など、否、まともに勝負が出来る可能性のある能力者でだろうと両手の指で数えられるぐらいしか存在しないのではないか。

勿論その中には自分も数えられているだらうし、そもそも自分に勝てる人間を考えたところでも、やはり同じくらいの数しか想像出来ない。

先ほどどちらと言及したが、驕りでも何でもなく、真実として超能力者はそれ「だけの実力を持っている。

だから美琴が言葉を失くしたのは、単に彼らの自然な態度に拠るものだった。

彼らは、自分達が能力を振るうことを、「ぐぐぐぐ当然のものとして捉えている。

自分達の能力を、暴力を正当化出来ている。道端に屯っている不良たちの振るう安っぽい暴力などではない、本当の暴力を自分のも のだと正当化出来ているのだ。

それがどれほどまでに異質なことか。どれほどまでに鮮烈なことが。どれほどまでに憧れることか。

勿論、決して悪いことではないだらう。むしろ悪い、ことんまでに凶悪だ。しかし美琴は憧れるとまではいかずとも、その仕草、在り方に目を奪われてしまった。

あるいはそれは、例えば学校で何の問題もなく生活していた優等生が、放課後の河原で殴り合いをしていた不良たちの生き生きとした姿に惚れるようなものだったのかもしない。

言つならば隣の芝生、あるいは他人の持つ花、そのような類の憧れに類する感情だったのかもしない。

だが確かに彼らは美琴とは違う在り方をしている人種で、故に止められなかつたのも事実。

そして自分と違う在り方をする人間との出会いとは、往々にして自らの変化をも指し示すものである。

学園都市序列第一位『アクセラレータ一方通行』。  
学園都市序列第六位『フレーム・ジン無尽火炎』。

彼らとの出会いが生み出す大きな波乱と、物語の変化。それらはすぐそこに、迫っていたのであった。

## 第8話『少年少女、放課後、クレープ屋』（後書き）

今回はちょっとゲテモノ料理に凝りすぎて長くなってしまったね。次回はさうっと銀行強盗を退治して、展開を早いペースで進めていきたいと思います。

また、そろそろ人物紹介とゲテモノ料理まとめをやろうかと。何か要望などありましたら、感想欄で構いませんのでお寄せください。それでは次回も早めにお届けできるよう頑張っていきたいと思います。応援、よろしくお願ひ致します！

## 第9話『強盗、少年、天衣無縫』（前書き）

強盗犯三人相手の十数分ぐらいの戦闘のはずが、なんとか一万三千文字ぐらいに。

ちょっととばつかし調子に乗り過ぎちゃいました。とりあえず次回も早めに、ジャンジャン原作進めていきますね。

## 第9話『強盗、少年、天衣無縫』

「おい急げ！ 早いとこ退散しねえと風紀委員<sup>ジャッジメント</sup>か警備員<sup>アンチスキル</sup>が来るぞー！」

長閑な初夏の放課後。学園都市でも最大級の敷地面積を誇る第七学区の公園通りで、いつも通りの午後の風景を脅かす事件が発生していた。

普段ならば学生たちに向けて預金の引き出しやローンの取引などをしている大手の某銀行が、今日に限って完全に営業を停止している。

それどころか閉店を表す降りたシャッターは中心から大きく外側に向けてひしゃげ、爆発したかのような焦げ跡と、今もなお僅かながらも火が点いた破片が撒き散らされたままだ。

「へつへつへ、まさかここまで簡単にいくとはなあ。お前の能力のおかげだぜ」

「無駄口叩くな、時間は無えぞ！ 今ここで風紀委員やら警備員<sup>ジャッジメント</sup>や<sup>アンチスキル</sup>らに見つかったら終わりだぜ？！」

「大丈夫ですよ、車は用意してあるし、乗り捨てちまえば後は簡単に見つかりやしません。とにかく早くすらからねえとお繩で

「

「お待ちなさい、そこの三人！」

銀行から出てきた三人が、口々に勝手なことを言つ。この暑い盛りに揃つて黒い革ジャンを着込み、口元をスカーフで隠している。

両手に持つたバッグにはパンパンに札束が詰め込まれており、風体と状況から見て、明らかに銀行強盗そのものであった。

口元が隠されているためにしつかりと風貌を確かめることはできないが、大柄な男が混じっている割に全体的に若く見える。もっとも、学園都市は八割近くが学生であるから、仮に銀行強盗だとしても犯人が学生であるのは不思議ではないのだが。

「ジャッジメント風紀委員ですの！ 器物損壊および強盗の現行犯で拘束します！」

多少強引な方法ではあるが、とりあえず何とか強盗を終えて逃走を図る三人の前に、一人の少女が現れた。

強能力者以上レベル3の高位能力者しかいない名門校である常盤台中学の制服を纏い、栗色の髪の毛を波打つた特徴的なツインテールに結び、小柄ながら袖につけた風紀委員の腕章を誇示して精一杯に威圧している。

もちろん常盤台の制服を着ている以上は、彼女もまた強能力者以上レベル3の高位能力者であることは間違いないのだが、いかんせん中学生、しかも下手すれば小学校から上がつたばかりと見える少女では迫力はない。

それは銀行強盗の三人組にしても同じであった。いくら風紀委員の腕章があつても、ここまで小さな女の子が相手で恐ろしいなんてことはなかろう。

「 「 「 「

「 ?」

「 「 「 「 ぶはははははははは...」」

ジャッジメント

風紀委員の少女、白井黒子は強盗三人組の嘲笑を受けてポカンと立ち尽くす。

今までも外見から実力を低く見積もられることは多々あったが、ここにまであからさまに、しかもこの状況で侮られるとは予想外であった。

「 おいおいジャッジメント風紀委員も人手不足かあ？」

「 こなんジャッジメントお嬢ちゃんが風紀委員なんて、何の冗談だ？」

「 うつこ遊びも楽しいかもしないけど、あんまりお痛が過ぎると怪我しちゃうぜえ？」

ジャッジメント

風紀委員になるのにどれだけの訓練が必要だと思っているのだろうか。そりや専門職としてコンピューター関連の技術を持つている初春などは別だが、黒子はしっかりと訓練を受けている。

この訓練、やり方さえ工夫すれば無能力者でも能力者を捕縛できるようにみつちりと捕縛術を仕込まれるのだから、基本的に風紀委員はやたらと強い。

そもそも能力者同士の戦闘術というものは厳密に確立しているわ

けではないのだから、<sup>ジャッジメント</sup>風紀委員もやりやすいのだ。

「舐められたのですわね。相手の能力も強度も把握しない内によくもそんな大口を叩けたものですの」

「ハツ、舐めてんのはどつちだ？ こつちは三人、お嬢ちゃんは一人で三対一。勝ち目なんて」

「なら三対三の互角つてことです」

「調子乗つてんじゃねエぞ、三下が<sup>イヴァン</sup>」

「は？」

女子中学生相手に大人げなく凄む強盗三人の前に、一人の男が現れた。

背の高い、生氣のない灰色の瞳を持つた白衣の青年と、険しいをはるかに超えてもはや凶悪な目つきをした白髪の少年。

どちらもこの場所にはあまりに不釣り合いであり、あまりにも異質。あるいは唐突な出現に、強盗は三人とも先ほどの黒子同様、ポカンと口を開いて立ち尽くした。

「な、何をしに来ましたの二人とも？！ 治安維持は私たち<sup>ジャッジメント</sup>風紀委員の仕事ですのよ？！」

「煩工なア、俺達は俺達のケンカをしに来ただけだ。引っ込ンでな、ツインテ」

「ま、また人を属性で大雑把に括つて！ どんなに強度<sup>レベル</sup>が高くて

も一般生徒が無闇やたらに能力を振るうのは立派な学則違反ですのよ？！」

風紀委員として、そのような無法は許す訳にはいきませんの。こ<sup>ジャッジメント</sup>こは大人しく退いて下さいませ！」

「少なくとも窮地に陥つたお姫様<sup>ヒロイーン</sup>を助け出しに颯爽と登場とした勇者<sup>ヒーロー</sup>には見えない。

むしろ印象としては、火事場泥棒に近かつた。片や暑い日中に白衣の変態。片や人殺しの目つきをした小柄の少年である。

「だから煩エツツつてンだろオガ。他人のケンカに首突つ込ンでんじゃねエよ、お節介女<sup>ヒーロイーン</sup>」

「 いつの間にか私が邪魔者<sup>レベル5</sup>みたいになつてます。トンデモないお方ですわ、この超能力者<sup>レベル5</sup>」

常識的に考えて正当化されるべきは風紀委員としての職務をしつかりとこなしている自分のはずなのに、何故かこっちの方が首を突つ込んでいるかのように言われている。

もしかして超能力者の人達は自分達普通の人間とは感性が違うんだろうか。

なんというか若干、敬愛するお姉さまの感性というのも不安になつて來た。それだけでも十分損害賠償に値する。

「つづりわけで、有り難くも俺達が相手してやんよ。泣いて喜べ、三下共」

「まあ確実に涙を流す羽田にはなるだろってことです。喜びの涙とは、限らないだろうけどね」

「ずずい、と二人が前に出る。自信満々なその態度に、強盗達は揃つて顔を見合わせた。

正直、この二人組をどう評価すればいいのか分からぬ。判断に苦しむ。

どこからどう見てもカタギの人間には見えず、だからこそ実力を図りかねる。少なくとも女の子が可哀想だから、カッコつけたいから、という人種からは外れるだろう。

だが同時に、外見から判断できる要素も多い。

白衣の青年の方は上背こそあるが、ひょろひょろとしていて力など無さそうだし、少年の方はといえば下手すれば女子よりも非力ではなかろうか。

もちろん学園都市で若者といえば、当然のように能力開発は受けているだろう。しかし、その大多数は無能力者や弱能力者が占める。油断して潰されてしまうのは本末転倒だが、慎重<sup>レベル1</sup>に行動し過ぎても損をする。勘違いされやすいが、学園都市では強能力者の段階で十分以上にエリート。大学受験にたとえるならば、なれば外の世界における上位国立大学合格者ぐらいのランクなのだ。

「おう小僧共。もしヒーロー気取りなら痛い目見るからやめときな。そう簡単に漫画みたいにいくわけじやねえんだぞ?」

「そりだそりだ、痛い思いはしたくなんだろう。おとなしくお家に帰つて晩飯食つたら寝ちまいな！」

「三下共が、好き勝手言つてくれンじゃねエか」

「自分の実力と相手の実力、見誤るよつだと長生きできないつてことです」

「んだとテメエらっ！　舐めてやがんのかつ！」

「舐めてんのはどつちだよ、クソ共。俺を誰だと思つてンだ？　テメエら落ちこぼれ風情が適う相手じゃねエんだよ。さつさとケツ振つて逃げ出しな、負け犬野郎が」

ミシリ、と強盗三人組のこめかみの血管が悲鳴を上げる。

無能力者やら能力者やらが混じつた三人組であるが、腕つ節にはそれなり以上の自信がある。そうでなければ風紀委員やら警備員やらと鉢合わせする可能性が高い銀行強盗なんてするつもりはない。いくら能力者である可能性が高いとはいえ、クソガキにここまで馬鹿にされちゃ黙つていられない。プライドだつて、それなりにあら。

「（）ちが下手に出てやつてるからつて調子に乗りやがつて　！  
お望み通り痛い目に遭わせてやるよ、このクソガキがああーー！」

遂に耐えられなくなつたのか、三人組の中で最も大柄な男が一方通行に向かつて走り出す。

優に身長百八десятチを超え、体重百キロに達するだらうといふ巨体。対して中学生ぐらいの体格しか持たない一方通行。

そして意外にも俊敏な巨男は既にそのハンマーのよくな右腕を白髪の少年へ降り下ろそうとしている。

「あ、危ないっ！！」

あまりにも惨い結末を想像し、庇うには一歩出遅れた黒子が悲鳴を上げた。

学園都市序列第一位という彼の位階は知っている。だが、常識的に考えて目の前の光景は十分悲鳴をあげるに値するだろう。咄嗟に動こうとするも、間に合わない。空間移動を行うには両者の距離が近すぎる。

刹那の内の判断を行つ間に、虚しくも大男の拳は一方通行へと振り下ろされ

「　　ああ、そういう手で来ますか。それじゃつまらないな、一瞬つてことです」

「ゴシヤツ、といつ肉と骨が碎ける音と、無音の驚愕。

たつたの一人を除いた誰もが予想した、限りなく百パーセントに近い想像は、覆されたがためにその者達に思考の空白を強制する。

「　　が、がかああああ？！　俺の、俺の腕が　　あ　　？！！」

能力の発動を許さない奇襲と速攻。

相手が能力者で、なおかつ能力が判明していない状況ならば決して悪手ではない。むしろセオリー通りだらう。しかし今回ばかりは、相手が悪かつた。

「て、てめえ 一体なにしゃがつた ッ?!」

「あン? 別になンもしてねエよ。テメエが勝手にぶン殴つて来て、勝手に怪我しやがつただけじゃねエか。みつともねエなア、他人様に責任押し付けようなンて」

何をしたというのだろうか、黒子は目を見開いていた。

何をしたようにも見えない。一方通行の言つとおり、ただ勝手に大男が彼に殴りかかり、ただ勝手に同じぐらいの勢いで弾かれた。だがしかし、同時にその様はあまりにも不自然。あまりに理解できない痛みに捲つた袖から見える大男の右腕は、過度の負荷をかけられたかのようにひしゃげてしまつていて。

「なンだなンだよなンですかア? 大口叩いた割に無能力者とか、一体なンの冗談だよ?

つまんねエ、そんなんじや全然楽しめねエぞニトア! こいつア  
トンだハズレくじだぜ、失望だ」

「ぐ う ?!」

「おらビウしたよ、それで終わりか? そんな調子じやアツー! と

「 いつ間に殺しちちまつぞ木偶の坊がア！」

「 な、舐めやがって、この野郎おおお……！」

衝撃か何かで肩まで外れてしまつているのだろうか、完全に動かないらしい右腕をぶら下げ、大男は一方通行アカセラレータに飛びかかる。何故かは分からないが、殴つてしまえば自分が怪我をする。ならば相手は棒みたいな少年、残っている左手でもひつ掴んでアスファルトに向かつて投げ殺してやればいい。

「 く、くそ！ くそ！ くそ！ な、なんだコイツ、触れねえ？！」

「 おイおイ、そりや悪手だろ二下ニシテ。まあ知らねエなら無理はねエけどよオ、俺に触れる奴なンてこの世に一人いるかどうか」

「 ぎ、ぎやああ？！？」

掴もうと必死に手を動かす大男の左手を、一方通行アカセラレータが右手で掴み返す。

たつたそれだけで、さして力を込めていないだろう真っ白な右手に、大男は万力で締め付けられたような悲鳴を上げた。

「 ちつ、失敗したな、ハズレだコイツ。せめて景気良くな飛びなア！！」

「さやあああああ？！？」

痛みに耐えかねて前屈みになつた大男の腹臍掛けて膝蹴りを一発。続けて一步離れ、豪快にくるりと後ろ回し蹴り。

たつたそれだけで、一体どういう力が働いたのだろうか。軽く倍、あるいは三倍ほども体重差があるだろう大男は、まるで弾丸のように吹き飛ばされて銀行の壁面に突き刺さつた。

「！」この野郎？！

「おつと、君の相手は僕つてことです」

短く針金のような髪の毛を立たせた男が仇を討とうと一步踏み出しが、その前に力ガリが立ちふさがる。

ゆらり、と体重を感じさせない動きをする白衣の男は、

アクセラレータ  
一方通行

以上に得体が知れない。

だが仲間の一人をやられてしまつた今、男にも退くという選択肢は存在しなかつた。

「へつ、あの野郎もお前もどんな能力持つてるか知らねえが、俺だつてなあ！」

突き出した右掌に、集まる炎。いや、それは自然界に発生する炎ではなく、明らかに敵意を含んだ、人の生み出す焰だ。

その高温は能力者である男にこそ熱く感じることはないが、物理

法則に従つて生まれた弱い上昇気流は男の髪の毛を僅かに揺らす。

「発火能力者<sup>バイロキネシスト</sup>。その焰の威力から見て強能力者<sup>レベル3</sup>が、あるいは大能力者<sup>レベル4</sup>か」

「悪いが容赦はしねえ、仲間を傷つけられたからな。レアかミニティアムかウェルダンか、焼き加減ぐらいは選ばせてやるぜ?」

「強盗犯が一丁前によく吠える。ふむ、僕は料理のことはよくわかんないから、ショフのお勧めでようしくってことです」

「そうかよ。じゃあウェルダンで決定だッ!!」

一方通行を前に敗北した大男の一の舞を警戒しているのだろう。

男はその場からさらに大きく一步飛び退ると、右掌に生み出した焰を突っ立つたままのカガリへと投げつけた。

質量が固体に比べて圧倒的に小さい焰の玉は、大リーガーの投げるボール並の速さでカガリに迫る。

「ハツ、なんだアイツもハズレじゃねェか」

男の掌から放れた火球は見る見るうちに大きくなり、ビーチバレーナどにつかうかなり大きなボールよりも大きくなつて、カガリの顔面に着弾した。

着弾と同時に解け、弾ける。顔面だけではなく上半身全体を多い尽くす業火。とても人間に耐えられるものではない。

先ほどと同じく黒子は口の中で悲鳴を押し殺すが、直後、一方通行の不釣り合いなぐらいにのんびりとした声が辺りに響いた。

「何ボーやがンだよ、悪趣味だなテメエは」

「必要以上に痛ぶるキミ程じやないつてことです」

ありえない。

胸どころか腰から上を眩しいくらいの焰に包まれながらも平然と喋り始める力ガリに、黒子は目を見開いた。  
そしてそれは強盗犯の男も、また同じく。

「う、嘘だ、なんで生きてられる　?!」

「生憎と僕も発火能力者でね。焰の類は効かないんだ。ご愁傷様つてことです」

「不可能だ！　そりや電撃<sup>エレクトロハンド</sup>使いにスタンガン<sup>エレクトロハンド</sup>が効かないとかは聞いたことがあるが、発火能力者<sup>ファンタジー</sup>が火傷しねえなんて幻想だ！」

火傷や、温度による細胞の死。

基本的に電撃<sup>エレクトロハンド</sup>使いや水流操作能力者、発火能力者<sup>エアロハンド</sup>や空力使いなどは念動力者<sup>サイコネシスト</sup>の亞流である。

特に発火能力者は原則として空気分子の動きを制御することを基盤に、発火現象を起こしていると考えられていた。

空気分子に影響を及ぼし、発火させる。そこには『炎を自在に操

作する』といつてコアンスは含まれないし、当然ながら人体の構造上、火傷や火ぶくれなどの直接的に炎から受けるダメージならともかく、酸素が無くても生きられるなんてトンデモな副作用は備わっていない。

「まあ、小細工してるからね。勿論ビリヤッてる今まで、詳しく述べる義理はないってことです」

「ぐ、ぐそつ……」

上半身を包んでいた炎を振り払い、現れたのは完全に無傷な姿。

白衣すら、焦げていない。

強能力者<sup>レベル3</sup>は、大能力者<sup>レベル4</sup>は決して生半可な存在ではない。その自分の能力が、全く効いていない。これがどれだけ絶望的のことか。

( 服も焦げてない？ 私だつてさすがにスタンガン押しつけられたら熱で軽い火傷ぐらいはするわよ？ )

乱入した二人が押しも押されぬ超能力者であることを知る美琴は、その戦闘<sup>レベル5</sup>というにはあまりにも可哀想なリンチの様子を少し遠くからクレープ片手に観戦していた。

二人がどんな能力者だ、というのは流石に情報を持つていなかつたが、それでも超能力者である。

超能力者<sup>レベル5</sup>とは、他の強度とは隔絶した存在なのだ。大能力者と強能力者<sup>レベル3</sup>とを比べるのとは話が違うん。

その学園都市の頂点たる超能力者が、何の間違いであつても負け

るなんていとにはならないだろ？。そういうた確信があった。

(にしてもアレは非常識よね。一方通行の能力もわけが分からなかつたけど、

こつちも同じくらいたンデモよ。

ホントに発火能力者バイロキネシストなのかしら？ どつちかつていつと念動力者サイコキネシスト

つて言われた方がまだ納得できるつての)

先程も述べたが、仮に発火能力者が焰によつてダメージを追わない特質を獲得していととしても、まさか酸素が無くても活動できるなんて化け物ではないだろ？。

しかしさつきの力ガリは、上半身を完全に焰に包まれてしまつていた。それこそ呼吸に必要な大気どころか、肺の中の空氣すら燃やし尽くされてしまうほど。

そんな状態では呼吸なんて出来ない。ならば何かしらの方法で焰を防いでいたということになる。

( 念動力者サイコキネシスト なら、防壁みたいなものを作つて防ぐこともできるわよね。空力ヒアローハンド使いも空氣の流れで焰を自分まで届かせないぐらいはやるだらうし。

もしかして焰の上昇氣流で同じことをした？ いや無いわ、だとしたらああやつて焰に包まれるんじゃなくて、消し飛んだり不自然に流れたりしているはず。だとしたら一体どうやって ？)

思考に耽る間にも戦闘は続いている。否、先に感じた通り、もは

やそれは戦闘と称するものではなかつた。

強盗犯の男は自分が攻撃に晒されないように、格闘技でよく見る小刻みなステップを刻みながら、最初に放つたような火球を大小緩急つけて放つてゐる。

が、それも最初と同じく無意味。ただボーッと突つ立つてゐるに過ぎない力ガリは全ての火球に直撃してゐるが、まるで僅かの熱すら感じないとでもいうのか、平然と直立したままだ。

「くそ、くそつ、くそおつ！ なんで効かねえんだよおつ？！」

「残念だけど相手が悪かつたってことです。こと、その手の攻撃が効いた試しがないんだ、僕は。

キミが相手にしているのは学園都市最強の発火能力者だよ？<sup>バイロキネシスト</sup>それに、これでも絶対無敵の看板は降ろしたことが無いんでね。そろそろ飽きたし、お終いにしようか」

「ひつ？！」

今まで動きがなかつた力ガリが、ゆらりと一步前に出る。

自分の攻撃が一切効かなかつた得体の知れない能力者。そいつが始まつて攻撃体勢に移る。自分に危害を加えようとする。それがどれだけ、恐ろしいことか。

男はそれに、死のイメージすら抱いただろう。最初の威勢はどこへいったやら、無様に背を向けると、何時の間にかいなくなつていたもう一人の仲間を気にすることすらなく、がむしゃらに逃走を開始した。

「逃げるのかい？せめて最後の抵抗ぐらいは期待してたつことです」

「うわあああっ？！？」

その次の瞬間、目の前に現れる白衣の男。

黒子は我が目を疑つた。瞬きの瞬間、刹那の間にカガリは数メートルといえ移動の軌跡も見せず動いてみせたのだ。

もちろん空間移動特有の空気を裂く音はしなかつた。だとうのに、空間移動としか思えない瞬間移動。困惑するに足る現象である。

「キミの焰はインパクトに欠けるつてことです。バイロキネシスト発火能力者なら、このぐらいはやらなきや ねツ！」

「 ツ？！」

閃光、そして轟音。

その後にやつと、それらはカガリが翳した両掌から生み出された焰が生み出したものだと知る。

男が放つた火球などとは話にならない、轟火。掌というわずかに十センチ四方強×2から放たれたものとは思えない、焰の津波。至近距離から放たれたそれは発火能力者の男の全身を直撃。まるで本物の津波に巻き込まれたかのように、悲鳴すら飲み込んで打ち据える。

「 立派な公開処刑ですの」

驚くべき事に、男は一切の火傷を負うことなく、しかし火炎の津波に押し流され、強かに全身を近くのビルの壁へと打ち付けて見事に気絶していた。

打ち身や脳震盪はあるだろ？が、命にまで別状はあるまい。制圧方法としては乱暴だが、理にはかなっている。

「 一体どうこいつ手品よ、火傷もしないなんて常識の範疇外じゃない」

「それを教える義務はないってことです、御坂美琴サン。キミも超能力者なら自分で頭使って考えて欲しいな」<sup>ベル</sup>

「 もちろん、そのつもりではあるけどね」

離れて観戦していた身事が、ゆっくりとクレープを食べ終えて近づいてきた。

後詰めをする気すらなかつたらしい。万が一にすら備えないとほ、大分良い、もとい太い神経をしている。

「 おウ、もう一人はどうしたよツインテ。ありやテメエの獲物だぜ？」

「 はっ！ そういえば ？！」

呆然と戦闘を観察していた黒子が、一方通行の言葉にハツと気を取り直して辺りを見回す。

突つかかってきた二人組ばかり目立つていたが、そういえば確かに強盗犯は三人組であった。

「黒子！ あそこ！」

「あれは 佐天さん？！」

美琴が指差した先に、全員の視線が向かう。

そこには逃がした最後の一人の強盗犯と、その男に腕を掴まれた小学校低学年以下と見える子どもが一人。そして、その子どもをしつかりと抱きしめて、引き剥がそうとしている佐天がいた。

おそらくは人質にでも取ろうとしたのだろうが、その光景に瞬間、黒子と美琴の頭が沸騰する。

「いい加減離せよクソガキイ！」

「離すわけないでしょ・jk！ 子ども人質にするなんて、脳天お花畠か、この腐れDQNツ！」

乾坤一擲、渾身の力と体重で子どもを男から引き剥がした。

「早く逃げて！ タア！」

すぐさまその子の背中を転ばせてしまつぐりい強く押し、走らせる。

佐天の必死な瞳に、恐怖を力に変えて子どもはすぐさま近くに停まっていたバスの方へと駆け出した。

そちらの方にはバスガイドらしき制服を着た女性の姿が見える。どうやらバスツアーに参加していた子どもらしい。

「て、てめえよくも！　いつなつたらお前を人質にして逃げ切つてやらいあ！」

「佐天さん、危ないっ！」

顔を底うように上げた佐天の腕に手をのばす。

その様子を見て、美琴が叫び、すぐさま黒子が空間移動のための演算を高速で開始した。

「甘い！」

が、予想もつかないことに、最初に動いたのは危機に陥っていたはずの佐天だった。

掴まれた右腕を支点に、肘を大きく上に掲げて体を入れ替え、空いている左手で男の手の甲を掴む。

降ろした右肘はちょうど相手の腕の内側だ。器用にそれをつかつ

て、男の腕をまるでアルファベットの「L」の字のようになびかせると、そのまま手首を口づく、自分の体を沈みこませるよつにしながら左足に体重を移動、相手を引きずりこんだ。

「え、ぎこやああああ？！？」

「！」　「？」

瞬間、走る激痛。

見事に手首の急所を極められ、男はみつともなく悲鳴を上げると堪らず自然に膝をつく。

すかさず佐天は露になつた後頭部、頸椎めがけて左拳で、ハンマーのような拳鎗打ちを見舞い、綺麗に男の意識をはるか彼方へと飛ばした。

「あ、終わつちやつてましたか。よりによつて佐天さんに手を出すなんて、不幸な犯人さんですねー」

「おお初春、これつて正当防衛よね？　ちよつと加減効かなかつたから不安なんだけど」

「問題ないですよ、むしろ協力ありがとうございました」

「え？　え？　どうじつ」と？」

漸く警備員アンチスキルに連絡がついたらしい初春が、ひょつゝりと安全な場

所から姿を現した。

さも当たり前のように佐天の鮮やかな手並みを受け止めているが、やつとこを追いついた美琴や黒子は困惑しつ放しである。

「ああ、私ちょっと健康のために少林寺拳法習ってるんですよね。子どものころから、ずっと。

やつぱり家に籠つてパソコンばつか眺めてると不健康ですし。初春もやればいいのにつて、いつも言つてるんですけどねー」

「私は佐天さんと違つて似非インドア派じゃないんです。物理的な暴力よりも精神的な暴力の方が好きですし」

「やだなー、暴力じゃないよ。あくまで護身術だつてば、護身術」

「『知つてる初春？ 少林寺拳法つてね、金的、目打ちアリなんだよ。へつへつへ』とか言つてる人の言葉なんて信用できません」

軽くパフォーマンスとしてシャドーボクシングのようなことをしてみせる佐天の拳からは、ヒュンヒュンと鋭く空気を斬り裂く音がする。

とてもじゃないが数年程度の修行で身に付くスピードではない。下手すりや十年近い修行をしているのではないか。

あんまりにもあんまりな決着に、急いで駆け付けた二人は肩を落として溜息をついた。

「結局私の取り分、というか出番は無しですの　ってハツ！ あのお二方たはいづこへ？！」

「あ、せつこえぱ。わつきまでは確かに一緒にいたよつな」

「警備員アンチスキルの先生に、また上手いこと処理してもいいしかないですかねえ」

「そんな都合の良い」とが、何度も通用するもんですか！　ああ、胃が、胃が痛い　」

実は件の二人、一方通行の方は彼アケセラレータご自慢のベクトル操作で、カガリの方はその不可思議な能力で一気に飛び上がり、はるか上空ヘビルの上へと逃げていた。

一瞬のうちに数十メートル上空へと移動されでは、流石に黒子とて追いかれない。そもそもそんなところへ逃げているなんて思わないだろう。

ちなみにさして高くないビルだから、屋上から道路は丸見えである。

よつて怒りのあまり地団駄を踏む黒子の様子はしつかりと一人に見られており、良い笑いモノにされていたわけであるが　。

それを考えると今回の最大の被害者は、

めちやくちやに施設を破壊されてしまった銀行でもなく、過剰防衛に晒された強盗達でもなく、当然のように好き勝手暴れた超能力者一人でもなく。

「ここまで現場をしつちやかめつちやかにかき回され、ついでに後始末までやらされるとになつた、

敏腕ジャッジメント、  
風紀委員、白井黒子なのがもしけれない。

## 第9話『強盗、少年、天衣無縫』（後書き）

佐天さん 少林寺拳法有段者。

ちなみに小生も少林寺拳法を嗜んでおりますが、あれは良い武術だと思います。

当初は初春のポジションだったのですが（武道系女子）、彼女は完全にP.C.無双してもらつことに。

自重？ そんなもの、忘れちまつたよ（汗）。

## 第10話『第三位、第六位、超能力者』（前書き）

少し少なめ、九千文字ぐらいでお届けです。  
格下ばかりの戦いだったので、この辺りでガチバトルをと思いまして。

ていうか倫敦の方も更新しなきやなア。

あ、麻帆良在住も、あと十文字槍とかありましたつけ。あははは  
ははは。

え、天地逆転？ なんですかそれは（汗）

## 第10話『第三位、第六位、超能力者』

外の世界に比べ、科学技術が数十年の規模で進化している隔絶された世界、学園都市。

街は各種モノレールで繋がれており、最先端の科学技術があちらこちらでふんだんに使われ、学生たちの生活を豊かなものにしている。

例えば最も顕著にそのイメージを得ることが出来るのは、街中でいたるところを巡回しているドラム缶のような何かだらう。

これは未来に憧れる者ならば一度は夢見るだらう、掃除用自走ロボット。ある程度までのゴミならば吸引圧縮し、道端に学生が捨てた空き缶のような固いものであらうと綺麗に食べてしまつ最先端の機械だ。

似たような形のロボットは装備を換えて警備用のそれ、防犯用のそれとして銀行やビルなどに備えつけられており、この型のものにも生徒たちの喫煙を警告したり、不審者のＩＤを確認したりするAIは備わっている。

もつともこれらにも当然のことながら限界はあった。

大通りなどは比較的綺麗に保たれている方だが、ゴミが多くなる学生たちの溜まり場などは流石にロボットでも見回り切れず、ジャック風紀委員達が自主的に掃除したりしているし、路地裏などはそもそもからして巡回経路から外れている。

簡易ながら警備用ロボットとしての機能も併せ持つていてるコレらが周り切れない場所。

則ち其処は、ある程度の無法地帯だ。

風紀委員や警備員（ヤッジメントアンチスキル）が見回りこそすれ、やはり彼らも決して数が多いわけではないから手が足りない。

特にある程度の能力者を抱えた風紀委員などは学生たちの集まりだ。完全下校時間を超えると、当然のこととして彼らは活動出来なくなる。

そういうた時間には警備員（アンチスキル）やロボット達も集中的に路地裏を見回り出しが、やはり穴は簡単に生じるわけであり、そこにはみ出しあの達は好んで集まつた。

「 つて、そんな説明したら僕がまるで不良みたいに聞こえるつてことです」

第七学区の表通りから少し外れた裏通り。その更に路地裏に、一人の男の影があつた。

初夏とはいえ暑い盛り。だといふのに脛まである丈の長い白衣を羽織り、短い黒髪を無造作に後ろに撫でつけた青年。身長は高い。百八十ぐらいだろうか。ハンサムで精悍な顔立ちをしているが、灰色の瞳は驚くほど生気に欠けていた。

「 あれ、一方通行？」

アクセラレータ

人気のない路地裏に、乾いた声が響く。当然のように反応は無く、青年は困った様に頭を搔いた。

「おかしいな、どこではぐれたっけ？まったく、僕の知らない内にフラフラ歩いて行っちゃうのは勘弁して欲しいってことです」

青年 力ガリは呆れたように溜息をついたが、その実本当に起  
こつたのは彼が口にしたのとは全くの逆。

前を歩く一方通行の後を素直に付いて歩けば良いものを、何を思  
つたのか虚空を眺めながら考え方をしていた彼が、フラフラと路地  
裏に入ってしまったのだ。

彼は自分が友人の保護者代理のような気分でいるが、それも定義  
づけられた精神面での話。

実際の生活では世間知らずなのは力ガリの方であり、意外に気を  
遣う性格である学園都市第一位は大きな友人のために何度も溜息を  
ついていた。

ちなみに可哀想に、今も彼は力ガリの姿を探して道路脇の店などを  
を猛然と走り回っている。ご愁傷様である。

「あと一軒だけ珍品巡りがしたいっていつから付き合おうと思  
つたのに、これじゃ意味がないってことです。ふわあ、眠い」

すでに日が落ちて久しく、街灯はおろかビルの明かりすら入らない  
路地裏に吹き込んだビル風で、白衣の裾が翻る。

完全下校時刻には微妙に時間はあるが、こんな時間に路地裏を歩  
くような学生はいない。基本的には大通りを歩くように推奨されて  
いるし、彼らも路地裏には口クでもない連中ばかりいることを知つ  
ている。

特にこの街では素手に見える学生が、拳銃などより遙かに恐ろし  
い能力を持っていることなどザラだ。大部分が無能力者か低能力者  
ぶき レベル。

の普通の学生たちは、だからこそ余計な危険に首を突っ込もうとはしない。

もちろん、<sup>スキルアウト</sup>この場所にたまっている危険な不良達、あるいは武装無能力者集団と呼ばれる連中にも高位能力者など殆ど存在しないだろう。そもそも高位能力者なんてエリートが、こんな路地裏にドロップアウトするのも考えられないことだ。

だが異能力者ぐらいたまでの能力者では、喧嘩慣れした不良達にはとても敵わないだろう。戦闘訓練をしていれば話は別だろうが、普通に能力開発を受ける上で、戦闘能力は付随してついてくるものであって、決して鍛えるものではなかつた。

「帰っちゃおうかな。あまり長く起きてられないし、明日は実験もあるつてことです」

盛大な欠伸をしながら、カガリは伸びをして辺りを見回す。

そろそろ学生向けの店は殆どが閉店する。完全帰宅時刻が近いのでゲームセンターなども一部を除きしまつてしまふから、不良のような学生でなければ、つまらないので素直に帰つてしまふ。

面白い物、楽しいこと、珍しいものを見て回ること、余計なざじぎに首を突っ込むこと<sup>アクセラレータ</sup>が存在意義といつても過言ではないカガリにとって、夜は一方通行の“実験”的立ち会いをするぐらいたしかやることがない。

ましてや彼は体质として長く起きていることが出来なかつた。夜は寝る、まるでお子様だが仕方がないのである。

「あー、眠い。眠い眠い眠い眠い」

「 何どうしようもないこと呟いてんのよ、アンタは」

人気がないはずの路地裏に潑刺とした少女の声が響く。  
ゆらゆらと不審者の如く揺れていたカガリが振り向くと、そこには名門として有名な常盤台中学の制服を着込んだ少女の姿。  
茶色の髪を肩ぐらいまでのショートカットにし、強気な顔には自信と信念が現れている。両手を腰に当てて堂々と仁王立ちしているのは、背伸びしているようにも見えて不思議と年相応であった。

「 ああ、御坂美琴サンか。こんなところで、こんな時間に何をしてるんだい？ 常盤台のお嬢様が素行不良はどうかと思つてことです」

「 何よ今の溜めは？ ていうかすげえどうでもよさそうな顔してるわね。なんか言つこと無いの？ 学園都市に七人しかいない超能力者が偶然にも出会つたってこのに」

「 別に、いつも一方通行アカセラレータと一緒にいるから、特に感慨深いものはな  
いつてことです。ていうか自画自贊レベル？ やけっと恥ずかしいってこ  
とです」

「 やつかましい！…」

常盤台中学 に限らず、基本的に学園都市の中学校高校などは全寮制なのであるが、その中でも常盤台はお嬢様学校として知られるだけあって非常に寮則が厳しい。

特に門限は、ヤバイ。美琴の住んでいる寮は鬼のような寮監が厳しく監督しているため、一分一秒たりとも遅刻は許されない。遅刻したものは、なんかよくわかんない武術の餌食にされる。

まあ五分前とかにしつかり帰つてくれればいいのだが、やはり学生は時間、きりぎりまで遊びたがるものだ。

多かれ少なかれ、ある程度の学生が毎年必ず痛い目に遭つてている。

「で、アンタはこんなところで何してんの？」

「それは最初に僕がした質問なんだけど　まあいいか。僕はいつも通り、一方通行とゲーセン、珍味巡りをしてたってことです」

「ゲーセン、珍味巡り？　アンタ学校はどうしたのよ？　その制服、長点上機学園でしょ？」

常盤台中学に並ぶ、学園都市の名門学校。長点上機学園。  
生徒全員が強能力者以上などといふことはなく、一芸があるのならば無能力者でも入学できる。

学園都市の全ての学校が競い合う超大規模な運動会、大覇星祭では年齢の差もあり、常盤台中学をも破つていた。

力ガリと一方通行、少なくとも超能力者を一人も有している辺り、名門校の名に恥じぬ顔ぶれである。

「ああ？！　じゃあアンタ達、毎日遊び暮らしてるっていうの？！」  
「ああ、僕も一方通行も籍だけ置いててね。学校に通つているわけじゃないってことです」

「はあ？！　じゃあアンタ達、毎日遊び暮らしてるっていうの？！」

「別に遊んばつかじやないってことです。僕も一方通行も研究所に

所属してるからね、そっちの方の実験があるから、意外に忙しいよ？」

まあそれでも、遊んでるのは否定できないってことです」

「 『呆れた。いくら義務教育は卒業したっていつも、それじゃ  
とも“学生”なんかじゃないじやないの』

「余計なお世話ついて」と曰く

軽く溜息をついてみせる美琴に、カガリは唇の端を歪めて笑つて  
みせる。

虚無的な瞳には、いつの間にか妹を見守る兄のよつな、ともすればお節介ながらも優しい光が宿っていた。

「一方通行はさ、学園都市第一位だ。アクセラレータ顔写真こそ出回つてないけど、  
目立つ姿をしているからね。色々と、こぞりやけに巻き込まれるの  
もうこいつのことです」

「？」

「そんな彼が、のんびり学生生活なんて出来ると思つかい？ キミ  
は運良く光の中で育つことが出来たけど、きっと彼は小さい頃から  
苦労しつぱなしだったってことです。

『気づいた時には、あんな歪んだ性格になっちゃったんじゃないかな。

力を持つって、それだけで色々なリスクを負つってことです。大  
なり小なり、キミにも理解できないかい？」

「別に、ことさら非難したいわけじゃないわよ、そのぐらい、言われりや分かるわ、私だって」

「よくできましたってことです。キミはやつぱり、賢いね」

「ツー 軽々しく女の子の頭触んなつ……」

まるで父親か兄が、娘か妹にやるよつに頭を撫でられる。自分に兄はいないけれど、もしいたらこんな感じだったのだろうか。触れた掌から髪の毛越しにも優しい気持ちが伝わってきて、思わず強く力ガリの腕を跳ね除けてしまつ。

振り払つた腕は、大の大人のそれにしては、やけに軽かつた。まるで、空気のようだ。

「やれやれ、お兄ちゃんは悲しいつてことです」

「確信犯か！ 感電死させられたいの？…」の変態…」

「あつはつは、キミじや僕は殺せないと思つけどね。 とにかく最初の質問に戻るけど、どうしてこんな時間にこんなところにいるんだい？ 常盤台中学の寮の門限は厳しにはずつてことです」

「ピリビリピリビリと軽く体の表面に電気を纏わせて威嚇していた美琴は、カガリのその言葉にハッと当初の目的を思い出した。寮の門限破りは厳罰。そして同室の黒子に不在を誤魔化してもらうのも、それなり以上のリスクを伴つ。

見つかった場合は連帯責任というのと、成功したあとの自分の貞操的な意味でも。

「 そつよ、そつだつたわ、ずっとアンタを探してたの？」

「は？」

「ちよつとツラ貸しなさいよ。人が来なくて広いところ、行くわよ」

だらしなく緩められたネクタイを美琴が掴み、締めあげる。脅しているかのような構図なのだが、美琴の方が遙かに身長で劣つてゐるからか、迫力はない。

その表情は勝気で、楽しそう。ともすれば悪戯つ子な彼女が彼氏に何かを要求しているような、あるいは妹が兄に何かを怒つているかのような、そんな微笑ましさがある。

「昨日の一件、一部始終見せて貰つたけどね」

「はあ」

「悔しいけど畠田見当つつかなかつたのよ、アンタの能力」

「へえ」

「炎で人間吹つ飛ばして火傷一つさせないわ、炎に包まれても平然と呼吸してみせるわ、空間移動じみたことまでしてみせるわ、挙げ句の果てには電撃も効かないんですつて？ 初春さんから聞いたわ

よ

バイロキネシスト  
発火能力者の強盗犯が放った、高位能力者相当の炎。  
それを受けた火傷しないならまだしも、顔面を完全に覆われてしまえば呼吸ができないはずなのに、カガリは平然とお喋りしてみせた。

それだけではない。強盗犯が逃げ出そうと背中を見せた瞬間には、反対側へと回り込んだアノ能力。順当に考えれば空間移動以外にはありえないが、この男は間違いなく発火能力者のはずである。  
まるで噂に聞く理論上のみ存在する多重能力者<sup>バイロキネシスト テコアルスギル</sup>。あるいはこの超レベル<sup>5</sup>能力者の第六位、発火能力者であると同時に、空間移動能力者、そして念動力者<sup>サイコキネシスト テレポーター</sup>でもあるんじゃないだろうか。

そうでもないと、あの現象の理由が説明できないのだから。

「でね、いくら私でも傍目に見てるだけじゃ分からないうつて思ったのよね。やっぱり実際に相手してみて体で感じると分かることってあるじゃない？」

それに思えば、超能力者相手に戦つたことないのよね、私。経験のないことって、やっぱり早いうちに経験しどかないと後になつてやつとけばよかつたつて後悔することもあるし……」

「 要するに、僕と腕試しがしたいってことかい？」

かくん、と首を傾けて問うたカガリの言葉に、我が意を得たりとばかりに楽しそうな笑みを美琴は浮かべた。

バトルマニア、と言われるのは心外だが、やはり超能力者までの道を着実に上り詰めて行き、達してしまった自分である。今更かも

しないが、自分の力を試したい、思う存分に力を振るいたいという思いは常に胸中を渦巻いている。

何せ超能力者なのだ。天候さえ左右するこの力、燻らせておくのは非常に勿体無い。

よく格闘技などある程度身に付けた人間が、自分の力を試したがるという事例が存在する。

それは非常に不安定なもので、当然のように危険につながる。何せ事故や不確定な事柄というのはいつ何時でも起こりえるし、上には上がるのだから。

それに比べ、美琴の持つ衝動はどちらかといえばスポーツマンのそれに近かつた。

どこまでも正道に基づいた、彼女の思つとおりの言葉を使えば、腕試し。

戦闘ではある。超能力者は一人で軍隊を相手に出来る能力を持つているのだ。当然、そこには死すら可能性として存在しているだろう。

だが美琴は稀有にも、それら全てを了解した上でなお、スポーツにも似た清々しいスタンスで力比べを欲していた。

闇に堕ちてしまった者たちにとって、それがどれほどまでに眩しいことだろう。カガリは昨日、

一方通行が始終ごく僅かながらも居心地悪そうにしていた理由を今になつて悟つた。

「見かけによらず、随分と好戦的つてことです。まさか超能力者同志で戦つて、今まで通りにいかないことがくらい分かつてゐるよね?」

「もちろん知つてるわ。超能力者の序列が実力によるものじゃなくて、研究の有用性が影響しているつてこともね。」

だから私が第三位でアンタが第六位だからって、油断する気は一切ないわ。それに、まだアンタの能力の正体も分かつてないってのに、油断なんてするもんですか」

「ふむ、参ったね、どうやら退く気はないみたいってことです

困った顔をしてみせる力ガリに、美琴はぶんぶんと縦に首を振る。元々、気になつた相手に対してしつこいまでも干渉しようとする性格だ。基本的に場の雰囲気に流されがちな力ガリでは彼女を振り切ることなど出来ないだろう。

「はあ、僕もつ眠いんだけどな？」

「少しぐらい我慢しなさいよ、大人でしょ？ それとも田が覚めるぐらいい強烈な電撃流してほしいのかしら」

「これだからバトルマニアは 。仕方ないな、ちょっと行つたとこうに河川敷がある。そこで腕試し、やるうつてことです」

学園都市の能力者は、<sup>レベル3</sup>強能力者からエリートだ。

<sup>レベル4</sup>大能力者で既に軍隊において戦略的な運用が出来るレベルなのだ。これが何を表すのかよく分からぬかもしれないが、要するに戦闘機や戦車、あるいは戦艦などの兵器が持つ役割を、たった一人の人間が持つているということなのだ。

戦車や戦闘機、戦艦同士のぶつかり合いに、公園程度の戦場では役者不足だ。

ましてや超能力者は、単独で軍隊と戦うことが出来る。言つなれば、戦闘機を束にした一部隊、そしてそれをさらに束にした軍隊に相当するということである。

公園遊びとか、草原でも十分かどうか。<sup>レベル5</sup>超能力者同士のぶつかり合いとは、則ち国同士の戦争なのだから。

「なんか視線を感じるわね」

「そりゃ名門で知られる常盤台中学のお嬢様が、こんな時間に堂々と繁華街を出歩いてたら注目もされるってことです、<sup>アンチスキル</sup>警備員に見つからなきやいいんだけどな」

家路を急ぐ学生達が疎らに通り過ぎていく。

学生寮が乱立している地域とは真逆の方向へ歩く一人は確かに目立つ。常盤台中学の制服单品ならともかく、白衣の不審者と一緒にいると違和感MAXである。

「ほら、ついたよ。ここなら多少暴れても、加減さえしてれば問題はないだろうつてことです」

「確かに、この時間なら人通りもなさそうね。思う存分やれそうだわ、楽しみね」

暫く歩いて辿り着いた、河川敷。

さすがに完全下校時刻を過ぎてしまったので、周りには人気がない。そもそも夜にこんなところに来る連中は大概がリア充であるか

ら、容赦しないで戦うことが出来るだろ。

「私から仕掛けにおいて何だけど、覚悟は出来るわよね？ そりや当然加減はするけど、うつかりっこもあるし、熱くなつたら加減忘れちゃうかもしないし」

「今更だね、最初にそう言つて頼むのが普通じゃないかつてことです。

ま×その辺りを気にすることはなによ。自信過剰に聞こえるかもしだいけど、君じや僕に傷一つだつて付けられないだらつてことです」

「へえ、言つてくれるじゃない。上等だわ」

ビリビリビリ、と美琴の全身から電撃が溢れ出る。  
弱能力者から着実に着実に強度を上げていった彼女は、下地がしつかりと出来ている分だけ、大能力者とは出力が違つ。

溢れ出る電撃はすでに半径一メートル近い空間を完全に制圧しており、装備を調べていない人間では踏み入る事すら出来ないだろ。

「さつきは序列なんかで油断しないって言つたけど、分かつてるわよね？ それでも私が第三位でアンタは第六位なのよ？」

「もちろんしつかり理解してるってことです。僕の研究成果の殆どは君から生み出された研究成果と酷似している。そういう意味では君と僕とは似たような境遇に置かれているのかもしれないね」

「 え？」

「まあ君が普通に正道を歩いていくなら関係のない話つてことです。気にすることじやない、君は光の中に居る方が似合つていて。でもね、目的にもよるけど基本的に戦闘つてことになつたら、僕は『絶対無敵』だよ。この看板は一方通行<sup>アクセラレータ</sup>が相手でも降ろしたことはないってことです」

不穏な言葉に一瞬氣を取られた美琴の目の前、約十メートル弱の間合いを取つた力ガリが能力を解放する。

美琴の電撃<sup>パワーキネシス</sup>が鮮烈ならば、力ガリの炎は豪快。足下から、全身から吹き出した劫火は彼の周囲数メートルの範囲を瞬く間に焼き尽くし、生えていた芝生を灰へと変えた。

学園都市最強の発火能力者<sup>パワーキネシス</sup>の称号は伊達じやない。その火力は美琴と同様に、戦車や戦闘機に匹敵する。

応用性が低いと言われる発火能力者<sup>パワーキネシス</sup>だが、能力者の数は多いため理論として高いレベルで確立されており、なおかつ高位能力者になると火力は恐ろしい程に高い。

拳大の火球が炸裂するだけで、大きなトラックや下手な小屋など吹き飛んでしまう。なにしろこの能力は他の能力者と違つてどこまでも、とここん攻撃的なのだ。

そういうたった攻撃的な能力者たちの頂点に、目の前の男は立つている。電撃<sup>エレクトロハンド</sup>使いの頂点に立つ自分と同じように、発火能力者<sup>パワーキネシス</sup>の頂点として。

「我が身の心配をしなきやいけないのは私の方だつて言いたいのかしら?」

「さあ？ それは是非、自分の身で確かめてみて欲しいってことです」

上等！

格下相手の小競り合いなんかより、負けるかもしれない勝負の方が全然楽しいに決まっている。

自分はまだまだ頂点なんてつまらない場所にきてしまったわけではない、まだまだ乗り越えなきやいけない壁は、乗り越えたい壁はたくさんある。そんな気分にさせてくれる腕試しは大好物だ。

「大きな口叩いたんだから、吠えヅラかかないでよねっ！」

「それは僕のセリフってことです！」

瞬間、辺りに炎と電撃が振りまかれる。

河川敷の全てを覆うかという破壊の奔流。これが本当にたつた二人の人間から生み出されたものかと疑う学生は、学園都市にはないだろう。

もしこれを引き起こした者がどちらも、学園都市の何百万人の頂点に君臨する、超能力者なのだと知ったのならば。

第10話　『第三位、第六位、超能力者』（後書き）

次回、ついに激突、超能力者！

そして本来ならぶつかり合うはずだった原作主人公はどうぞ応援、よろしくお願ひします！

?!

## 第1-1話　『焰、電撃、交叉衝突』（前書き）

やつと描写できたまともなレベル5の戦闘です。例の「J」とく予定を

はるかにオーバー、一万三千文字ぐらいですか。

化学とか物理の知識に欠けるので、ちょっといろいろと試行錯誤してますが、不明な点などありましたら」連絡ください。

## 第11話『焰、電撃、交叉衝突』

第七学区を走る大きな川。地図には名前があるだろうが、この川をジョギングや部活動の練習などで使う学生たちは、ただ「川」とだけ呼んでいる。

朝や昼間にはジョギングをする大人や部活動の外練の場として使う学生たち、あるいは放課後に縁が恋しくなつてフЛАリとやつて来る人達で賑わう河川敷も、完全下校時刻を過ぎた今となつては人気も無い。

ごく稀にませたカツプルなどが夜のデートに洒落こもうと訪れることがあるが、今日は普通に平日であるからか、魚が跳ねる水音とビル風しか聞こえなかつた。

そんな静かな河川敷に、今夜に限つて不穏な気配が漂つている。いつも通りのはずのビル風も、何故かごうごうと不気味に鳴り響いている気がしてしまつ。ビル風の音と相まって、川の流れも普段よりも速く感じてしまうことだろ？

河川敷の下、川岸の開けた空間。芝生と砂利石が混在する地面の上に立つ二人の学生。彼らから、その不穏な気配は放たれていた。

「はあああああ！――！」

片方の人影、名門で知られる常盤台中学の制服を着込んだ少女か

ら、突如何条もの電撃が迸つた。

細かく枝分かれした電撃は、一筋一筋がヒグマをも昏倒させる圧倒的な電気力と電圧を持っている。護身用、あるいは疚しい目的でしようとするスタンガンなど比では無い威力のソレが、飛び道具として放たれた。

「おつと、先制攻撃とはやる気満々ってことです」

「どうせ超能力者ならこの程度は簡単にあしらえるでしょう？ 現にホラ、普通に立ってるじゃないの。

最初の一発なんて小手調べよ、小手調べ。手加減してあげただから感謝しなさい」

「よく言つよ。確かに威力は精々が強能力者相当だったけど、速さは本氣だつたつてことです」

放たれた先に立っていたのは、白衣の男性。百八センチぐらいの長身で痩せ型、精悍な顔立ちをしているが、エレクトロマスター電撃使いの少女とは反対に瞳に力はない。

その彼は瞬間にこちらに迫つて来る電撃をしつかりと目視するとい、ゆらりゆらりと不気味にも見える足取りで、しつかりと電撃の全てを躱してみせる。

「冗談じゃないわ、そこら辺の大能力者と私と一緒にしないで欲しいわね。

小手調べつて言つたはずよ？ まだまだ強力になるし、まだまだ

速くなるに決まつてんぢやないの？！」

「おおつ？！」

常盤台中学の制服を着込んだ電撃使い、御坂美琴の全身から、更に強力な電撃が迸る。

鮮烈、なんでものじやない。このレベルの電撃になると近くにいるだけで生命の危機を感じる程のものだ。とてもじやないが怖くてこの場に居られないだろ？。一田散に逃げ出しても誰も責めはしない。

大能力者以上になると、天候すら操作することが出来ると言ひ。水流操作や空力使いならば膨大な質量の水分や風を操ることで嵐を巻き起こし、電撃使いならば大規模な雷を生じさせることすら可能だ。

その能力に誘われたのか、いつの間にか空は曇り、「ロロロロ」と雷の音すら聞こえる。

雷撃ではなく、電撃であったのは白衣の男 カガリには幸いだつたろう。稻妻の疾る速度はとてもじやないが常識内の人間では反応できる速度じゃない。

とはいえそれはあくまで比較して比べたらの話である。携帯電話のスイッチをONにして、起動するまでにどれほどのタイムラグがあることだろうか。

美琴の放つ電撃は拳銃弾にも匹敵する速度で、カガリを着実に追い詰める。

「ちよろちよろと鬱陶しい、避けんな！」

「いやいや普通は避けるだらうってことです。ていうかキミは普段からこんなトンデモない電氣力でケンカしてんのかい？！」

しかしカガリは驚くことに、ふわりふわりとまるで体重などないかのような軽快なステップで、全ての電撃を躊躇してみせている。まるで宙に浮いたティッシュを殴ろうとするかのように、掴み所がなく、当てることが出来ない。まるで魔法のようだった。

一見すると不可思議な光景だが、タネはある。

ある程度以上の出力の電撃を放てば、多少は空気に誘電して拡散してしまうことも多い。故に派手で恐ろしげに見えるが、実際に自分へと向かつて来る電撃はそこまで多くなかつたりするのだ。

よつてカガリは冷静に、自分に向かつて来る電撃のみを判別してストレスの位置で避けっていた。それこそ身体をかするぐらいの距離で。

「超能力者<sup>レベル5</sup>が相手なら加減も“気持ち”で大丈夫でしょ！ 大人しく痺れときな さいツ！」

電撃、炸裂。

相手が上手に避けるならば、絶対に避けられない攻撃をすればいい。正解は避けるだけの隙間すらない、物量による面制圧攻撃だ。

美琴の全身から、自分の目の前いっぱいの範囲を焼き尽くすかのような勢いで放たれた電撃は、避ける場所も逃げる隙もなく、津波のような勢いで一瞬にしてカガリを飲み込んだ。

「 さあて、普通ならコレで一発病院送りいつてところなんだけじ。  
まあ、そこまで甘くはないわよね ？」

十分に必殺と称されるだらう豪快な一撃を放ち、なお美琴は油断しない。

あまりの威力に爆発すらしてしまった地面が巻き起こした砂煙に向こうへ、そこからの攻撃を警戒している。

普通に考えれば、起きて来るはずなどない。下手すれば病院どころか棺桶送りな威力の電撃をお見舞いした。けれど、油断してはいけない。

どうしても不可解な光景が、頭から離れないのだ。炎に包まれても平凡としている力ガリが、空間移動してみせた力ガリが、質量すら持っているのかとでも思つてしまふ炎の奔流を生み出した力ガリが。

「 やれやれ、本当に容赦しないねキミは」

果たして巻上がる粉塵の中から聞こえた声に、美琴の警戒と予想は報われる。

これで終わり、では物足りなかつた、これで終わり、ではなくてよかつたと、美琴は自分でも不思議ながら安堵の溜息をついた。

「 」のぐらいでヤラレちゃうなら。それはそれで期待はずれよね。  
まさか超能力者の質がそんなものだなんて思いたくないんだけど」「

「ふむ、それは保証してあげるってことです。確かに超能力者は化け物であるべきだ。学園都市の頂点に君臨するたつた七人なんだから、ね」

「ふわり、と熱せられた大気が生み出す上昇気流によつて粉塵が吹き飛ばされる。

美琴の予想通り、そこには焼け焦げ一つも負つていかないカガリの姿があつた。

ちょっと派手にやりすぎたか？

粉塵が巻き上がってしまつたおかげで、自分の電撃を防いでくれる瞬間を確認出来なかつたのは痛い。

バイロキネシスト

発火能力者の焰を防いでいた時には何の能力を使つている兆候も読み取れなかつたけど、あれは同系統の能力者が相手だつたからかもしれないのだ。

相手の能力の系統によつて対処方法が違うのか、それとも普遍的に万能に対処出来る方法なのか、どちらにしてもこの第六位は、何かしらの手段によつてこちらの攻撃を無効果出来るらしい。

「しかしどうするんだい、御坂美琴サン？ 老婆心ながら忠告しておくと、少なくともそういうやりかたでは僕に勝つことはあらダメージから」とえられないとことです

「（）注進どうも、痛みいるわ。けどね、私つてば先ずはありとあらゆる方法を試してみないと 気が済まないのよねー！」

「 ッ？！」

再び電撃、今度は威力と手数よりも速度を重視した一条の太い稻妻がボーッと突つ立つたままの力ガリへと疾る。

その攻撃を感じてから、脳へと伝わり、それが更に『避ける』という指令になつて身体へ届く、その瞬きよりも短い時間すら許さぬ速攻。

その太い稻妻がもたらす衝撃は乱暴ながらも圧倒的な磁力と電力の複合により力場を発生させ、地面をも揺らす。

力ガリに能力の演算すらさせないつもりの攻撃が、違うことなく白衣を貫いた。

「なるほど、これでも全然効かない、か」

「いやいや、今のは死ぬよ御坂美琴サン。普通の人間なら確實に死んでるよ、立派な殺人未遂ってことです」

「死んでないんだからイイじゃない。ていうかどんな化け物よアンタ、今の喰らつて小搖るぎもしないなんて」

もはや呆れ混じりの溜息しか出でこない。予想通りではあるのだが、またしても力ガリは無傷だった。

「念動力<sup>サイコキネシス</sup>で絶縁したり、空気の壁とかで遮断してるの？　いや、でも装甲とか防壁の類じやないわね。だとしたら電撃が弾かれるところが見えるはずだもの。

能力を無効化してるの？　いくら超能力者つていつても、そんなこと出来る規格外な人間がアイツ以外にいるはずが。ついでかコイツは発火能力者<sup>バイロキネシスト</sup>だし」

威力の大小はさておいて取り合えず電撃を防ぐことが出来る能力者ならば、美琴にもいくらか心当たりがないこともない。

例えば同じ電撃使いならば、まあ多少は電撃に対する抵抗力もあるだろう。勿論最強の電撃使いである美琴の電撃を完全に防げるとは思えないが、一番確実だ。

他にも高位の念動力者や空力使いなどもまた、念動力や真空状態などを利用して絶縁状態を作り上げることも出来るだろう。ちょっと現実的ではないが、水流操作でも電気を通さない純水を生成出来るのならば、考えられないこともない。

だが目の前の男は、発火能力者なのだ。バイロキネシスト学園都市に数多い能力者の中でも最も応用性が無いと言われる、バイロキネシスト発火能力者なのだ。

熱を通して空気の流れを操り、絶縁した？いや、今の攻撃は確實に身体を貫いていた。絶縁状態を作り上げる能力ならば、電流は周囲に誘電して拡散する様が観測できるはずである。

いや、そのようなことは些事に過ぎない。何せ今、自分の電撃を受けた瞬間の力ガリは、『能力を発動しているように』は見えなかつた』のだから。

「そろそろ僕のターンかな？ 待ちに回つてあげるのも鬱憤が溜まるつてことです」

「余裕見せてくれるじゃない、そつちの攻撃だつて当たりやしないわよ」

「言つてくれるね。確かに発火能力者は応用性に乏しいけれど、そ

れでも火力は全能力者中でトップなんだけどな。痛い目みるよってことです」

「吠えてなさいよ、こちとら最強の電撃使いよ。<sup>エレクトロマスター</sup>ビビツてなんかいられますかつての！」

「威勢だけは一人前つてことです。それじゃ、行かせてもらつよ！」

力ガリの両手に、現れる焰。やらゅうと大気を焦がすそれはガスバーナーなんて真っ青になるぐらいの高温で、すでに赤色を通り越して仄かに青い。

たつたそれだけで、その焰の持つ威力が軽く大能力者クラスであることは明々白々。

純粹に戦闘においての攻撃力のみを比較した場合、実は超能力者<sup>レベル4</sup>と大能力者<sup>レベル5</sup>の間にそこまでの差は無い。だからこそ美琴は驚きはしなかつたし、同じ理由で油断もしていなかつた。

「後味が悪いから、せいぜい焦げないように逃げ回つて欲しつてことです！」

轟、と空氣を焼き尽くす音を伴つて焰が进る。  
まるで龍か大蛇がこちらを狙つて飛びかかつてくるかのような錯覚を受ける、焰の帶。

電流と同じく質量らしい質量を持たない气体のよつなものであるが故に、その焰は恐ろしい速度で美琴へと迫る。

「そう」なくつちゃ ね！」

手を突き出し、能力行使する。

サイコキネシス<sup>1</sup>アロハンド<sup>2</sup> 念動力者<sup>3</sup>や空力<sup>4</sup>使い、あるいは水流操作<sup>5</sup>などであるならば障壁や装甲のようなものを直接作り出すことが出来るだろう。

水流を使って焰を消したり、突風で消し飛ばしたり。けれど電撃<sup>6</sup>ロハンド<sup>7</sup>使いが操り電撃は力ガリ<sup>8</sup>が操る焰と同じく、個体や液体、また直接に物質へ干渉できる代物ではない。

普通の電撃<sup>9</sup>使いならば、逃げ回るしか方法はないだろう。なにせ電撃<sup>10</sup>では焰を防ぐことなど出来ない。

だが超能力者の第三位、最強の電撃<sup>11</sup>使いである自分なら？

ああ認めよう、確かに力ガリの焰は大したものだ。その威力、自分と同じく最強の発火能力者<sup>12</sup>バイロキネシスト<sup>13</sup>の名に相応しい。

だけど自分だって超能力者、それも位階は目の前に立つ白衣の男よりも上なのだ。その能力の本分を出力なんて簡単な尺度で測られちゃ困る。

ただ身体能力が高いだけじゃ、オリンピックに出て金メダルを取れるような一流のアスリートには成れないのだ。

「はあああああ！」

意識を集中、自分だけの現実を展開し、能力行使する。

今度発動するのは今までのような電撃ではない。狙うのは力ガリではなく、自分の周りの砂利石で出来た地面。

更に言つなれば、その砂利石の奥にいくらでも眠つてゐる、本来ならば全く使用途の無い、存在すら意識しない砂鉄。

それに干渉し、自分の力とする！

「そお　りやあつ……」

美琴の能力に操られ、大地から黒い砂のよつなものが大量に湧いて出てくる。

それらはしつかりと空中を動き、途中で大量の小石と一緒に巻き込み、さながら津波のように、あるいは盾のように美琴の前に展開し、カガリが放つた焰の帯を頬もしくも受け止めた。

「　砂鉄を操り、小石で防壁を作るのは、随分と多芸なんだなってことです」

「高位の電撃コレクトロハンド使いつて、磁力マグネティックハンド使いも兼ねるからね。一応は最強の電コレ撃クトロハンド使いつて触れ込みだし、この程度なら手品の領域よ」

「石の類は電気を通さないけど、同時に優秀な耐熱性を持っている。それを砂鉄で間接的に操るとは、よく考えたつてことです。

手加減したとはいえ、今を真つ向から受け止められるとはね

」

電撃ではどうしても焰を防ぐことが出来ない。どちらも確たる物質干涉力を持たない存在だ。片や氣体の一種で、片や分類が難しい電子の世界のマテリアルである。

となると、ここからの攻防はお互いに底の見せ合い。単純に戦い方、といつよりは、能力の多様性の勝負になつてくるだろう。

( イケる、と思うわよね、普通なら。相手は全能力者の中でも一番融通が利かない発火能力者パイロキネシストだし)

だが自分が相手にしているのは普通の発火能力者ではないのだ、と美琴は眉間の皺を深くした。

同系統の能力である焰を寄せ付けないのはおろか、電撃も完全に防いでみせる。なおかつ『絶対無敵』の看板が本当だと仮定するならば、きっとあらゆる能力に対しても同じように無効果の手段を持ち合わせているのだろう。

おそらくは今となつても全く正体の分からぬ、学園都市序列第一位の持つ最強の能力ですら。

自分の能力が本当に通用するのだろうか？

もしかしたら何をやっても意味がないかもしれない。

けど、負ける気もしない。

「 ま、取り合えず全部試してみるしかないわよね」

気づいたことが、一つある。

実際に小石混じりの砂鉄で力ガリの焰を受け止めてみて分かったのだが、あの焰は見た目の派手さの割には威力がそれ程でもない。

もちろん鉄なんて簡単に溶けてしまったくらいの温度はある。実際、防御に使った砂鉄は軒並み溶けて、蒸発してしまっているのだから。小石を混ぜなかつたら簡単に自分もミニアームに焼かれてしまったことだらう。

しかしそれでもなお、その威力は超能力者としては物足りなかつた。おそらく目の前に立つ白衣の男の出力は、大能力者とそう大して変わるものい。

だが、それはそこまで特別なことでもないだらう。

自分は最強の電撃<sup>エレクトロハンド</sup>使いとして圧倒的な出力を持つてはいる。けれど自分の真価は、先程力ガリにも啖呵を切つたように、決して膨大な出力というわけではないのだ。

電磁波<sup>コキネシスト</sup>を用いたレーダー、ハッキング、磁力を用いて間接的に念<sup>サイ</sup>動力者<sup>レベル4</sup>のモノマネすら出来て、建物の壁に鉄骨が入つていれば壁を歩くなんてことだつて可能だ。

それは出力系が暴走しただけの大能力者にはとてもじやないが不可能な、手数の多さ。戦闘能力にも自信はあるが、それはこの手数の多さ、応用性の高さにも由来する。

だから恐らくは、この男の真価も隠し持つてはいる奥の手の数。正体不明の防御力や、空間移動<sup>テレポート</sup>。それは出力ではなく、能力の使い方に違いがあるのだろう。

ならば自分がすることは、一つずつ可能な手を試して行く詰め碁のような戦い方だ。

「今更だけど、アンタと腕試し出来て本当によかつたわ。ここまでワクワクするの、久しづりよ」

「そりゃ良かつたつてことです。こつちは結構、肝が冷えてるんだ

けどね」

「嘘つくるのも大概にしなさいよ。へラへラ笑って、そんな態度で信じられるわけないじゃない」

「ふむ、どうだろうね。まあ絶対無敵は伊達じゃないってことです。試したいなら色々試してごらん? 試すだけなら、君が疲れるだけだからね」

美琴と同じく、カガリも今の状況を楽しんでいるのだ。にやりと笑つてみせ、威圧感がひた増した。

「けどね、いつまでも僕が受け身でいるとは思わないで欲しいってことです。余裕綽々の態度もいいけど、たまにはカッコイイところも見せないとさ、『あの子たち』も残念がるからね」

大気が揺らぎ、カガリの周囲にいくつもの火球が浮かび上がる。その数は十や二十を優に超え、三十にも届きそうだ。

三十、と聞くと大したことのない量に聞こえるかもしれないが、トンデモない! 一つ一つが野球ボールより少し大きいくらいのサイズとはいえ、それが三十、カガリの周囲に浮かんでいるのをしつかりと想像してみて欲しい。

ドッジボールとは話が違う。要するに、三十の大砲がこちらに向けられているのだ。とてもじゃないが普通の人間ならば避ける気する無くしてしまうことだろう。

「さあ、踊れ」

一斉砲火、三十の砲口が遠慮呵責無しに美琴を狙い、その威力を解き放つ。

速度はてんでバラバラ、美琴の退路を無くそうとするかのように次々と地面に着脱し、焦土に変える。飛び散った小石、砂利が熱せられて肌に熱い。

しかし美琴はそのままくを砂利混じりの砂鉄の奔流を操って、叩き落していった。

「レディにダンスを強要するなんて、紳士のやることじゃないわよっ！」

「ナリからそんな言葉が出てくるとは、驚きっこことです」

「やつかましい！」

ギラリ、と受けに回っていた美琴の瞳が光った。

いくら小石の類が優秀な断熱材だとしても、そこら辺の何の変哲もない小石では限界もあるのだ。既に操る砂鉄の一部は溶け、美琴の制御を離れてしまっている。

いや、別に溶けてしまったから操れないというわけではない。しかし磁力は大質量の物体に対しての干渉力に劣る。特に細かい制御を液体に対して行うのは、流石の美琴でも骨が折れた。

「調子に乗るんじゃ

無いわよっ！…」

ちょうど三十の火球が尽きた瞬間。

今まで大蛇もかくやと動き回つて美琴を守つていた黒ずんだ帯が、今度はカガリへ牙を剥いた。

熱せられた小石による質量攻撃。そしてそれを散弾、あるいは爆撃として解放した後の砂鉄はとても周期を計れない程に細かく振動し、触れるモノ皆等しく斬り裂く魔剣と化す。

上から降り注ぐ小石と砂利の散弾、爆撃。そしてその後ろから迫る砂鉄の超振動カッター。

電撃や火薬とは異なる、質量による攻撃。美琴は勝利を確信し

「よく考えたね。エレクトロハンド電撃使いであるキミに、ここまで質量攻撃が出来るとは思わなかつたってことです」

巻き上がった粉塵の中から現れたのは、相も変わらず無傷の力ガリ。

裾の長い白衣は粉塵に塗れたはずなのに、純白のまま。たつた今アイロンをかけたばかりのようにパリツとしている。当然、体の方に怪我を負っているようにも見えず、消耗しているようにも見えない

「化け物」

だが、美琴は見た。

よしんば自分の、今の攻撃が効かなかつたとしても、今度こそ能力を使って防御をするとこりを見ようと、粉塵の中を電磁波まで使つてしまふと“見て”、“見て”いた。

第一弾の、小石と砂利の絨毯爆撃。第二弾の、砂鉄による超振動カッター。

そのどちらもが、まるで『そこ』に何もないかのように、カガリの体をすり抜けた。

「どうこうことよ、一体何をやつたら個体をすり抜けるなんてことが出来るの?」

「それを言つたら僕が負けちゃうつてことです。それなりに危うい能力なんだよ、僕の『無尽火炎』<sup>フレイム・ジン</sup>はさ。

絶対無敵だけど、意外に脆くてね。秘密を知られたら、お終いつてことです」

「じゃあお終いになっちゃえぱいのよ、そんな軟弱な能力

「あつはつはつは! でもその軟弱な能力に、みんな手も足も出ないってことです。それくらいじやなきや超能力者は務まらないけど、ね

熱で空気を操り、蜃氣楼を作り出しているのか? 順当に考えればそれが一番可能性が高く、実現性もある。

つまりは照準を乱させて、自分の遙か前や明後日の方向に攻撃を着弾させるのだ。しかもそれを相手からは自分の攻撃が当たつてい

るのに平然としている、無敵の化け物であるかのように見せる。それはそこまで難しいことではないだろう。

だが、美琴は電磁波を使って周囲を索敵していた。  
確かに力ガリの周囲は高温状態になつていて、しつかりと一拳一投足を把握する、なんてトンデモな真似は出来なかつた。しかしまあ、もともとそこまでの演算はちょっと厳しいものがある。

そして上手く言葉には出来ないけれど、そこに確かに在ることだけは分かる。電磁波が蜃氣楼に跳ね返されることはない。

例えば今こうして見えている背丈や体格が誇張されたもので、それを利用してギリギリを躊躇しているなんてことがあったとしても、とにかくそこに力ガリは居るのだ。

「さて、万策尽きたかな、御坂美琴サン？　だとしたら　」

ぞくり、と悪寒が背筋に疾る。  
決して戦闘者ではない美琴でも感じた嫌な予感。電撃使いとして生体電流などの作用が齎す第六感の研究にも一家言ある美琴は自身の感覚を咄嗟に信じ

「　もつ眠いし、わづくつと終わらせやうやつて」とです

「くつ?...」

しゃにむに前方へと身を投げ出し、一回転して立ち上がる。  
ちょうど綺麗に後方を向いた視界には、一瞬にして空間移動し、テレポート

美琴の背後をとつていたカガリの姿があつた。

「この非常識能力者」

「まあいい加減非常識なのは認めざるをえないってことです。で、どうするんだい？ まだ手があるんだつたら付き合つけど、正直本当に眠いから早く帰つてしまいたいってことです」

「眠い眠いつて、子供かアンタは！」

「あながち間違つてないけど、これは純然たる体质、僕にはどうしようもない衝動つてことです」

ふわあ、と大袈裟な欠伸をしてみせるカガリに、一瞬で顔面が朱に染まる。

別に恥ずかしかつたとか、屈辱だとか、まかり間違つても恋に落ちたなんでもない。

それは純然たる、怒りによるものだった。

「 贅めてくれんじゃない」

「ん？」

スカートのポケットに、いつも数枚入れている“武器”を取り出す。

それは銀色に光る、一枚のコインだった。安っぽい装飾が施され

た、ぼちぼちの程よい重みがあるゲームセンターのコイン。別に集めても景品が貰えたりはしない、純粹に遊びを楽しむための擬似貨幣。

しかしそれは、最強の電撃使いエレクトロマスターである美琴の手に渡れば、彼女の代名詞ともいえる、彼女最強の攻撃の砲弾と化す。

「正直、加減してたわ」

「？」

「アンタの能力があんまりにもワケわかんないから、先ずはそれをどうにか暴いてやろうと思つて色々と試したわけだけど それつてお遊びみたいなものよね？」

マグネティックマスター

磁力使いとしての能力を解放し、真っ直ぐに磁力の路を作る。これは砲身だ。地球上のありとあらゆる兵器でも最高速と呼ばれる兵器の、砲身代わり。

本来ならば強力な電磁石と強力な電力、そしてそれなり以上に巨大かつ洗練された機材が必要なその兵器を、たった個人が再現できるという異常。

おかしいことだらうか？ 否、この学園ならばちっともおかしなことではない。なにせ彼女達は学園都市が誇る超能力者。単独で軍隊をも相手出来る存在なのだから。

「やつぱり全力でぶつからなきゃ、意味ないわよね。  
なんだもの、遠慮することなんて ないわよね」  
レベル5  
超能力者同士

「それはちょっと、遠慮して欲しいかなと思つてことです」

「やかましい」

無表情で砲弾を構える美琴の声色に、怖氣を感じたカガリが思わず一歩後ずさった。

彼とて当然、超能力者<sup>レベル5</sup>の第三位の代名詞とまでなつてゐる必殺技のことぐら<sup>い</sup>知つてゐる。そしてそれがおそらく、自分に対しても全く効果を表さないだらうという確信もある。

だけどそれとこれとは別問題だ。だって人間は その定義が自分に当てはまるかは甚だ疑問だが は生命に危機を覚えるから、ソレに対し恐怖を抱くわけじゃない。

例え自分が強大だったとしても、怖いものは怖いのだ。

「私、間違つてたわ。ごめんなさいね、アンタを侮つてた。侮辱してたわ。

でもそれもさつきまで。 いつからは、本氣出させて貰うわよ

っ！」

「一生手加減してくれても、僕としては構わなかつたんだけど  
うおつ？！」

能力によつて作られたレールが、砲弾発射のための電力を供給されて唸る。

磁界と電界と力。フレミングの法則を用いた電磁界は辺りに余波として力場を撒き散らし、突風という結果を引き起こした。

「真っ向勝負よ、第六位！ 受けてみなさい、これが  
私の全力全開」

「ストオオオオツブ！！」

注ぎ込まれた膨大な電力が砲弾を飛ばす準備を全て整え、今にも発射される状態の能力が、何者かの一聲によつて止められた。

完全に予想していなかつた、第三者の存在。電磁波による索敵もカガリに集中していた美琴では気づけず、完全な不意打ちである。

「誰だい、君は？ 楽しく戦つてる最中に割り込んでくるなんて、随分と風情がないと思つてことです。消し炭にしちやうぞ、少年？」

そこに立つていたのは、見るからに平凡な少年だった。

カガリのような不気味さ、虚無さもない。美琴のように清冽な個性があるわけでもない。そんじょそこらを歩いていそくな、特に際立つたところのない男子高校生。

雰囲気もそうだが、容姿もまたさしたる特徴を上げられなかつた、強いて特徴を上げるとすれば、ツンツンとウーのよう立つた髪の毛ぐらいだろうか。

白いワイシャツと黒いスラックスは、校章すらついていないが学校指定のものなのだろう。ちょっと離れたところには、慌てて飛び込んだ時に放り出したのかシンプルな学生鞄が投げ捨てられていた。

「　　ん？　ビリしたんだい御坂美琴さん？」

田の前に立つ美琴がフルフルと震えているのを見て、カガリが不審そうに疑問の声を発する。

手にしていたコインこそ取り落としていないものの動搖は激しい。カガリもそつだが、彼女も頭の中は疑問符で溢れかえっているのだろう。

「　　どうか、どちらかというと、これは動搖、疑問といつよりも

「　　ツ！　なんでアンタが、こんなところにいんのよ？…」

叫びと同時に、砲口が新たな闖入者の方に向く。  
もしやこの一人は知り合いなのだろうか、とカガリはかくんと首を傾げる。

「　　はあ、そりゃ見回りぐらいしてるに決まつてんだろ？がビリ  
ビリ。こんな時間にこんな場所でドンパチやりやがって、文句言  
たいのはこっちなんですけどね？」

大きくため息をつくと、美琴の追及に闖入者の少年は「じゃ」と  
ポケットを探り、取り出したモノをおもむろに右の袖へと巻く。

緑の生地に、白い帯と盾の意匠。特に脣間は町中のあちらこちら、  
校内あちらこちらを見回る便りになる学園都市の治安維持組織。

「ジャッジメント風紀委員だ。お前ら派手に暴れすぎですよ、そのぐらにしどけ」

「 完全下校時刻を過ぎたんだから勤務時間外つてことです」

「まあ迷惑行為を取り締まるぐらいなら、いいだろ。上条さんの安全のためにも」

頼りになるはずのジャッジメント風紀委員の腕章をつけた少年は、一転頼りなさげに肩を落とす。

いまだ正体の知れない闖入者の介入を受け、カガリと美琴、二人の超能力者レベル5の腕試しは、終わるのではなく更なるカオスな方向へと加速していくのであつたが、それはまた、次のお話である。

番外話『第一位、風紀委員、幻想殺し』（前書き）

大変お待たせいたしました！

今回は番外話として、一通さんと上条さんのお話をお届け致します。いやはや、それにしても秋アニメは魅せてくれるぜ。Fate /Zeroのおかげで執筆意欲が湧くこと湧く」とwww

## 番外話『第一位、風紀委員、幻想殺し』

学園都市は、外の世界と比べて遙かに勝るオーバーテクノロジーを持つ。

数十年単位で進んだ科学は学園都市に住まう全ての住人達に恩恵を授け、しかしそれでも彼らの生活字体はそこまで変わっては居ない。

もちろんそれも、よくよく考えてみれば当然のことだらう。

人間、数十年の間に大きく暮らしどりが変わることはあったとしても、その根本的な在り方が劇的に変わるなんてことはない。あるいは、日本の科学というのも頭打ちになっていたのだという可能性もある。

例えば2010年代を思い返してみても、数十年前との違いはネット環境や急速に発展した携帯電話の普及によつて大きく変化を認識することが出来るが、その実システムとしてはすでにある程度完成されてしまったものであり、あまりにも便利に過ぎたそれは学園都市でも殆ど変わらずに運用されていた。

そして学生達の生活も、また同じ。

基本的に彼らの生活は、朝起きて学校に行き、帰つて予習と復習をするというサイクルに固定されてしかるべきだ。

当然ながらそんな生活を想定されている以上、彼らの娯楽というものも今までの学生達と大して変わりはしない。ゲームやネット環境が整備されているからインドア派の学生も多いが、外にあるゲームセンターーやカラオケなどにも出入りする。

とはいっても完全下校時間までの営業だから、ささやかなものだ。

それに勉強も能力開発もあるのだから、そろそろ遊んでばかりもいられない。

学園都市の学生達は、意外に勤勉で努力家なのだ。

ちょうど放課後の時間帯、夕暮れにすらまだ早い。

学校によつてはまだ授業があるところもあるだろうが、一部の学校はカリキュラムの関係で午前授業だつたりするから、繁華街にもぼちぼち学生の姿が見えた。

「

学園都市でも最大級の敷地面積を誇る第七学区は、各種学校とそこに通う生徒達が住む寮。そして娯楽施設や商店街などを完備している。

その中でもカラオケほど滞在時間が長くならず、かつ使う気が起きなければ全く金を使わなくとも良い娯楽施設としてゲームセンターは特に人気であった。

まがりなりにも科学の進んだ都市、外の世界に比べてゲームの種類は非常に多い。特に一般的に知られているゲーム会社のゲームもそうであるが、一部に据えられている学園都市の学生たちが作ったゲームもかなりの人気を誇る。

なにせホログラム映像なども高水準のものが普通に出回っている

流石に完全な商品化までは達していないが、学園都市だ。  
それこそ外の世界ではとても体験できないようなゲームも数多く揃えられていた。

しかし、いくら最先端の科学技術を駆使しているからといつても、ゲームの良さは決して技術力のみに左右されない。そのゲームが“面白いか”というのは、当然のことだが他にも様々な要素に左右される。

特に学園都市ほど最先端の技術を用いていないといつのに、大手のゲームメーカーはそういうノウハウを大量に所持している。もちろん学園都市内部のゲームも面白いかと言われば面白いが、やつぱり一歩劣ってしまいます。

そして何より、ゲーム愛好家の中にはレトロゲームマニアと呼ばれる連中もいて、それこそ下手すれば自分が生まれる前に現役であつたようなゲームを好んでプレイするのは、決して稀なタイプではない。

勿論その傾向を学園都市のゲームセンターとて把握しており、当たり前のようにハイテクな街のハイテクなゲームセンには、十数年前に流行した、いわゆる格闘ゲームの原型を未だに踏襲する古いタイプのゲーム機も備え付けられていた。

「おーい

」「

「おーい、聞いてますかー？」

「

」

「聞いてんのかって言つてるんですけどー？ 聞かないふりか？ それとも集中してんのか？」

そんな懐かしい系のゲーム、略して懐ゲーのコーナーに、1人の少年が座っていた。

染めた訳でも、年を経たわけでもない見事な白髪。そして今さつき人を殺して来ましたよとでも言いたげな凶悪な赤い瞳。全般的に不機嫌そうな気配を辺りに振りまき、年頃はおそらく中学生ぐらい。あまりにも不穏な気配から、それなりに人が多いゲームセンタの中でも彼の両隣の筐体には人影が見られなかつた。誰もが彼に怖じ気づき、避けているのだ。

そんな彼の背後に、彼を恐れぬ一人の勇者が現れた。

特徴的なツンツン頭はウニかハリネズミか、白い無地のワイシャツと黒いスラックスは、女子の制服にばかり氣を遣う学園都市の高校にはありがちな夏服で、どこでも見ることが出来るスタンダートなものだ。

顔つきも平凡で、どちらかといえば冴えない印象を受ける。別に道で肩が触れあつたとしても軽く会釈をして何も気にせず通り過ぎてしまうような、そんな只の男子高校生である。

強いて特別な点を挙げるとすれば、袖に緑色の、盾の意匠が施された腕章を付けていることだろうか。

学園都市の治安維持組織の一つである風紀委員ジャッジメント。ある意味では周

りに迷惑をかけていないこともない白髪の少年に注意をするとか、事情を聞くぐらいならば仕事の一環だろうが、勇者であることは違いない。

「　　おいアンタ。ゲームが楽しいのは分かるけどさ、いい加減に返事ぐらいしろよな」

「　　ツ？！」

遂に痺れを切らしたのか、シンシン頭の風紀委員は白髪の少年の肩を軽く叩き、呆れた声で注意を促す。

それは別にイラついているとか、相手をどうにかしてやろうとか、そういうた悪意を持った叩き方ではなかつた。

例えるならば、電車が終点に着いたといふに眠りこけている乗客を駅員が起こすよりも、さらに気を遣つた叩き方。流石に叩かれても痛いなんてことはないが、背後の人物に気づくには十分な圧力。

不良ならば、そのぐらいの叩き方でも喧嘩を売つたかもしない。ヤのつく自由業の方々でもちょっと奮められていると想うけどかもしれない。

しかし白髪の少年が振り返つた顔に浮かべた感情は、怒りでも苛立ちでもなく、驚愕。

「この世でありえるはずがない、それこそ何の兆候もなく周りのありとあらゆるもののが爆発したり、地球が真つ一つになつたりするようなレベルの出来事。

触れられた肩を確かめ、自らの手をしげしげと眺め、次いで目の前でポカンと目をぱちくりさせているシンシン頭の風紀委員を睨み

つける。

正しく仰天動地。彼以外の者がこれほどの驚きに遭遇したならば、おそらくもんざり打つて座っている椅子から転げ落ちてしまうだろう。

「 テメエ、何しやがった？」

「は？」

「だから、テメエ何しやがったって聞いてンだよ、三下ア」

こつもの若干甲高い声からとは異なる、押し殺した低い声。そこには抑制された驚愕と、警戒が含まれている。

体は十分過ぎるぐら<sup>レッドアラート</sup>に警戒を表し、すぐさま飛び退か<sup>レッドアラート</sup>る、あるいは迎撃が出来るよ<sup>ジメント</sup>に臨戦態勢。頭脳は相手の一拳一投足を見逃すことのないよ<sup>ジメント</sup>うに、次の策を練ることが出来るよ<sup>ジメント</sup>うに、未だ且つて無かつたぐらいに明晰に。

まるで戦時下にいるかのような最大警戒態勢。<sup>ジメント</sup>シンシン<sup>ジャック</sup>頭の風紀委員は、その猛獸を思わせる<sup>スケルト</sup>配に思わず一歩後ずさつた。

「何したって 別に、何もしてないぞ？ そりゃ肩は叩いたけど、もしかしてアレ痛かったのか？」

「そオ<sup>スカルト</sup>いうワケじやね<sup>スケルト</sup>。なンで俺に触れたのかって聞いてンだよ

「 あのなあ、お前ずっとこの筐体で遊んでるだろ？ 連コインはマナー違反だぞ。他に遊びたそつにしてる子<sup>カタ</sup>もとかいるだろ？」

もういい年なんだから、ある程度遊んだら周りに譲るのが気遣いつてもんだと上条さんは思うんですがね」

「あン?」

白髪の少年の詰問に、シンシン頭の風紀委員ジャッジメント 上条当麻は困惑しながらも返答した。

確かに風紀委員は多少悪ぶつた学生からは厄介者として嫌われてはいるが、警戒されるというのは微妙に普段の反応とは違う。しかも白髪の少年は、紛うことなき臨戦態勢なのである。ここまでも露骨な警戒を示されたことは、当麻としても覚えがない。

「ふざけてンのか、テメエ? 僕アなンでテメエが俺に触れたのかつて聞いてンだぞ?」

「だから、お前が連コインで周りに迷惑をかけてっからだろーが!」

「やうじゅねHitttてんだろオガ三下ア! 僕に、  
どうやつて、触ったのかつて、聞いてンだつてんだろオガア  
シ?...」

「つねおつ?...」

白髪の少年は能力を解放、その右手を力任せに当麻へと振るつ。彼の能力によって、貧弱に見える女子よりも細い右腕は破城槌もかくやという威力を發揮する。人間など木つ端微塵だ。

「　おイおイビオい「！」となソだよ「！」りやア よホ」

だがしかし、振り下ろした手はいつも容易く当麻の手によつて受け止められる。

信じられるだろうか、ベクトルを操作する学園都市第一位の大きく振りかぶつた一撃を、軽く差し出した右掌だけで受け止めた上条当麻という風紀委員<sup>ジャッジメント</sup>の存在を。

それこそ天地神明が全く信用ならない事態。それこそ自分の頭の中で行われた計算、 $1 + 1 = 2$ ではなく、他のトンデモない数に変化してしまったかのような、常識を土台からひっくり返す出来事。

絶対に通用するはずのことが、通用しない。周りにとつてみれば普通に不可解なだけの出来事が、彼にとつてみればどれほど、正気を疑うまでに異常なことだったか。少なくとも目の前でポカんとしているツンツン頭の風紀委員<sup>ジャッジメント</sup>には分かるまい。

「この一方通行様の能力が効かねエなンて　。テメエ一体なンの能力者だ？」

白髪の少年、学園都市に七人しかいない超能力者<sup>レベル5</sup>第一位である一方通行は驚愕を通り越して呆れた笑いを浮かべると、挑戦的にそう言った。

自分の能力が効かないなど、正しく彼にとつてみれば、どんな冗談かという出来事である。

確かに今の拳は、単純にベクトルを操ることで“威力を飛躍的に上昇させただけ”の拳だ。

人間だろうが片手で造作もなく吹っ飛ばし、コンクリートの壁だらうが呆氣なく粉碎するだけの威力を持つてはいるが、あれだけならば例えば念動力者の張るバリアーや、皮膚などを硬質化させる能力者などがいれば防げないことはない、かもしない。

もちろんベクトルを操ることによって生まれる威力は生半可な能力者では対抗することが出来ないものである。それは間違いないのだが、理論の段階で話をすれば不可能ではないことだ。

「ああ、もしかして今、能力使つてたのか？」

「煩エな、喧嘩売つてンのかテメエ」

「わ、悪い。別に警めてるわけでも怒らせたいわけでもないんだぜ？　ただちょっとほら、俺の能力じゃ打ち消したかどうかなんて分かりやすいエフェクトがないと判断できないからさ」

ため息をついて頭を搔く当麻の様子からは、別段おかしなところは見えない。とてもじゃないが一方通行アカセラレータという能力者に挑む態度ではなかつた。

一方通行は、ただ純粋な驚異であるべきなのだ。驚異の前にいる人間が取るべき態度は、すなわち恐怖のみ。

ならば目の前の風紀委員は一体どうして、どうして自然体で立てられるのだろうか。

恐怖を感じない程の実力者か。本人も言つていたが、そもそも風紀委員ヤツジメントだといふなら何かしらの能力者であることは間違いない。当然のように危険な仕事であるから、風紀委員ヤツジメントに無能力者はいないのだ。

「テメエの能力？ オイオイ冗談は程々にしどけよ三下ア。俺の能力を打ち消せるなソトondeモな能力、見たことも聞いたこともねエぞ？」

「まあ確かに、学園都市の方でも解析出来てないらしいからな、俺の幻想殺しは」

「イマジンブレイカ 幻想殺しだア？」

「ああ。俺の右手で触れば、どんな能力でも例外なく消し飛んじまうんだ。それこそ神様の奇跡だつて、殺せるかもしねいな」

「右手？」

スッと視線を当麻が掲げた右手へと移す。成る程、そう言われてみれば自分の肩に触れたのも、毒手を受け止めたのも、あの何の変哲もない右手だった。

別段、変わったところなどない。光り輝いているわけでもなければ、変色しているわけでも変形しているわけでもない。どこの男子高校生でも持つていそうな、右手だ。

「どンな能力も、ねエ？」

「まあ流石に全部試したわけじゃないけどな。学生の数だけ能力はあるし、上条さんが見たことない能力だつてたくさんあるでしょうからねー」

「実戦経験豊富つてことですか。ハイハイ格好いいですねエ」

「 そういう言われ方すると、非常に他意を感じるわけですが」

ありとあらゆる能力を打ち消す能力。

イマジンプレイヤー

幻想殺し。

その看板には全く嘘偽りない。事実、当麻が風紀委員として活動

ジャッジメント

する中でどれほど世話になつたか分からぬのだから。

バイロキネシスト

ハンド

発火能力者の炎も、空力使いが起こすカマイタチも、水流操作が

ハンド

操る水弾も、電撃使いが発する電撃も。

全て例外なく、当麻の右手の前には無力だった。どんな能力者も自分の能力には自信を持っているもので、その能力が通用しなかつた瞬間に必ず囚われる一瞬の驚愕を利用し、当麻はいつも暴れる学生たちを押さえ込んできた。

だが一方通行は、確かに打ち消されたと思しき自分の能力を感じても、当麻に對して懷疑的だった。軽口を叩き嘲笑うような笑みを

浮かべながらも、その警戒は些かたりとも緩んではいない。

能力者は自分だけの現実に即した能力を振るうものだ。そこには確かに超常現象を能力として操る理不尽が存在しているが、やはり物理の壁は重々しく立ち塞がっている。

どんなに理不尽で、幻想に見える能力でも、そこには確固たる法則が存在するものだ。決して理不尽に、万能に、意味も分からず行使される力ではない。

圧倒的な地力の差、実力の差によって理不尽が生じることはあつても、それを“理解できない”ことはないのだ。ましてや学園都市最高の頭脳を持つ、一方通行その人にとってみれば。

「はあ、とりあえず他のゲームに移れよ。お前なんか気配が怖いし、

周りの小学生とか怯えてるんだよ。なんつーか、存在が迷惑？いや、まあそこまでじゃないけどさ」

「おいテメエ殺されてHのか？」

ミシリ、と一方通行アクセラレータのコメカミが軋む。特に嫌味などが入つているようには思えないのだが、それにしても失礼過ぎる。ましてや自分は学園都市第一位、一方通行アクセラレータなのだ。

こんなに失礼な奴は今すぐに愉快なオブジェに変えてしまいたいものだが、確かに辺りを見回せば、本気で殺しにかかるには不似合いな場所であった。

自分の筐体の周りにプレイヤーの姿は無く、かなり離れて遠巻きに他の学生がチラチラとこちらを横目で確認しながらゲームをしていた。何人かは、既に荷物をまとめてそそくさとこの場を離れようとすらしている。

自分は確かに純粋な脅威でありたかった。純粋な恐怖そのものでありたかった。けれど、別に年端もいかない小学生を怯えさせて満足するような人間であるつもりもない。

というか、どっちかっていうと情けない部類に入るだろう。人は人、自分は自分と分けて考えるにも限界はある。一方通行アクセラレータはその辺り、意外に気を使える大人であった。

「チツ、表に出る二下」

「お、おう」

ゲーセンの中、全ての人間の視線を浴びながら一人は出口へと向

かつた。別に逃げ去るよつにでもなく、威圧しながらでもなく、努力して自然体を裝つて。

途中で筐体の裏にいる幾人かが小さく拍手をしていて、一方通行アカセラレータはそいつらの顔をしつかりと記憶した。いつかそれらしい因縁つけて懲らしめてやろうと思つて。

「ふう、全く巡回始めてすぐこれだよ。ホント不幸だ、事件に出くわす確率おかしそぎんだろ。つかどうじて上條さんはいつのまにやら風紀委員ジャッジメントなんてやることになつてゐるのやひ」

ゲーセンから出た瞬間、当麻は人目も憚らず盛大な溜息をつき、掌で顔を覆つと空を仰ぐ。

なんとか、糺余曲折あつて風紀委員ジャッジメントとして過ハスすことになつてはいるが、それにしても自分が事件に遭う確率は高すぎるだろ。なにしろ外を巡回していれば、必ず事件に遭うのだ。といふか、巡回してなくて、非番の時だつて必ず何かしらの面倒事には直面することになる。正直、いつもの口癖の信憑性すら揺らぐ。自分が不幸なのではなく、不幸が自分なのではないかと。

「おに」「下、何勝手にビッカ消えよつとしてやがンですかア？」

「ぐえ」

そのまま溜息混じりにその場からそそくかと立ち去つとした当麻の襟を、一方通行アカセラレータがしつかと掴む。

男子高校生とは思えない華奢な体と低い身長の一方通行ではまさに考えて当麻を止めるることは出来ないはず。なにせ当麻は風紀委員としてそれなり以上の戦闘訓練と鍛錬を受けており、そもそもまともな男子高校生のガタイを持つている。

「へエ、右手以外だと能力を無効化出来ねエのか。ホント訳分かんねエ奴だな、テメエは」

「上条さんはこれから風紀委員のお仕事が有るんですけど? ! ていうか公務執行妨害的な法律に抵触してんじやねえかな、これ!」

「いいぜ、なンでもテメエの思つ通りに行くな! なら、まずはその幻想をブチ殺す」

「なんかデジャブ? ! ていうか痛いんですけど? ! 襟に引っ張られて首しまつて! 首首首首ビビビビ!」

当麻が襟を引き戻そうとする力のベクトルすら操作して、一方通行はズルズルと当麻を引きずつていぐ。当然のことだが、自分の全く知らない、正体不明の能力者を前にして学園都市第一位が黙っているはずがない。

その向かう先は、人気のない路地裏。基本的に学園都市の学生達は目的地に一直線で、必然的に、特に昼間は殆ど人気がない空間である。(そもそも寄り道なんてものは時間に余裕が出来て“しまう”大人になつてからするものなのだバーカバーカ)

「おらよ、ありがたくも離してやつたぞ三下。泣いて感謝しやがれ」

「痛え？！ もひりょつと優しい離し方だと嬉しいんですけどねえ  
？！」

一方通行に投げ出され、見事に尻餅をついた当麻は恨みがましげな目で白髪の少年を見つめた。

それなりに鍛えてるとはいっても、流石に尻までは鍛えていない。そもそもいくら寛容な当麻でも、ここまで体格差のある少年に良い様に弄ばれるのは、それなり以上にプライドに障る。

もちろん相手が学園都市序列第一位という化け物であることを知れば、そんな些細なプライドなんて大抵の人間は吹き飛んでしまうことだろうが、当然、当麻はそんなことを知りはしない。

あと地面、埃っぽい。ていうか汚い。標準的な男子高校生なら制服は毎日洗つたりしないから替えなんてないのに、あんまりだ。

「てゆーかさ、マジで仕事あるから勘弁してくれねーかな？ そりゃイライラすんのは分かるけど、連コインしてたお前が悪いんだぞ？」

「ヤンなつまんねエ」と怒るかよ。嘗めてやがンのか二下」

「いや、明らかに機嫌悪くしてんだろ。顔怖いんだよ、顔が

「ホントに愉快なオブジェにされてエらしいなア。これア素だよ、素。顔怖いとか余計なお世話なんですよー！」

「ンプレックスの一つを刺激されて、一方通行の眉間に刻まれた

皺がまた一つ増える。

あ、いや、確かに脅威でありたいとは思つたが、別にそこら辺の子どもに泣かれるのは望んでいたことじやないのだ。

拳句の果てには騒ぎを聞きつけて既に顔なじみになつてしまつたガミガミ喧しいメガネで巨乳の風紀委員まで現れるは、現れたが最後、学生なんだから学校に行くべきだと見当違いも甚だしいお説教をされるわ。

どこかに隠れても必ず見つけ出されるのは、あのアマ、透視能力者か何かなのだろうか？

「チツ、おイテメエ、三下」

「だから三下じゃねえって なんだよ白髪灼眼」

「メタっぽい渾名はヤメロ。 名前、聞いてやるよ。言へな」

この場に彼の親友であるカガリがいたならば、目を丸くして驚き、続いて空を見上げて天気を確かめたことであろう。あるいは人工衛星の一つでも降つてくることを恐れ、周りの人間に避難を促したかもしれない。

基本的に他者に無関心、といつより関わりを断ちたがる一方通行が、自分から誰かの名前を聞きに行くなど、正しく青天の霹靂と呼んでも何の不足もない事態なのだ。彼が普段会話をするのはカガリと一部の研究者達、あるいは妹達に対する一方的な演説じみたお喋り程度なのだから。

「 風紀委員 171 支部所属、上条当麻だ。能力はさつきも話し

ジャッジメント

た『幻想殺し』。強度は強能力者「

『強能力者イ？！　おイおイどオいう冗談ですかア？　この俺の能  
力を打ち消しといて、ただの強能力者とか笑いすぎて腹筋崩壊しち  
まうぜゴリラ！』

強能力者<sup>レベル3</sup>

学園都市序列第一位であり、押しも押されぬ超能力者である一方  
通行では全くその辺りの実感が湧かないことであろうが、強能力者  
といえば十分に胸を張つて自身の能力を自慢出来る程のものである。  
なにせ強能力者もあれば、念動力者なら人間ぐらいの大きさのも  
のを持ち上げ、発火能力者ならば学校のゴミ捨て場にある焼却炉顔  
負けの炎を発する。

能力者としては十分にエリート。ここから研鑽を積めば、大能力  
者だつて夢ではない。

「　　しうがねーだろ、右手だけでしか能力を無効果できないん  
だから。上条さんとしては強能力者になれたことだつて驚きですよ。  
つい最近まで普通の身体検査じやずつと無能力者の判定だつたんだ  
からな」

「無能力者　？　俺の能力を打ち消せる奴が無能力者？　そりや  
腹筋崩壊通り越して悪夢だぜオイ」

「まあ路地裏で喧嘩に巻き込まれてた時に風紀委員の女の子に会つ  
てさ。進められるまま精密な身体検査受けて、それでも結果が出な  
かつたから実際に能力者用意して実験して　。なんつか、あり  
やモルモットの気分だつたな」

「 そいつア 御愁傷サマ」

現在進行形で被験者モルモットをやつて いる一方通行アクセラレータは、無感動に言葉を紡いだ。

だが確かに、目の前のツンツン頭の能力が『異能を打ち消す』といふものならば、身体検査システムスキャンに不具合シスコが出てもおかしくはない。何せ普通の身体検査システムスキャンでは結果を見て強度や能力の種類を決定するコイツのように極めて特殊な能力が相手では、いくらプロフェッショナルとはいえ普通の高校の教師では荷が重いことだらう。もつとも、それが『超能力である』以上は、専門の研究機関レベラが行う精密なスキャンで結果が出ないなど、どう考えてもおかしいことであるのだが。

「まあおかげで奨学金も増えて上条さんとしては万々歳なんんですけど、無理やり風紀委員ジャッジメントまでやらされることになるとはなあ。実験に協力するのはまあ、お金もらえるからいいんだけど」

「 小せエなア 」

「バイトもしてない普通の学生にとつては、お金は死活問題なんだよ！ お前みたいな奴には分からつて、そういうふうしてこんなところまで連れて來たんだ？ ていうか上条さんはお前の名前、聞いてないんですけど？」

おや、と当麻が気づき当然の疑問を口にする。  
確かに自分は強引に釣れられ もとい連れられて来てしまった

が、いくら注意されたとはいえ風紀委員相手に瘤に障つたというだけで喧嘩を売られるとは思えない。

もちろん今まで風紀委員としてそれなり以上の方を積んで来てはいるが、なんというか、こういう手合いを相手にするのは初めての気がする。

「あア、そオだつたな。ついうつかり本題の方を忘れちまつてたぜ。悪イ悪イ、待たせたなア」

瞬間、突風。

ビルの隙間にある路地裏は元々ビル風が激しいが、その風は一方通行が、タン、と小気味いい音を立て軽く振り下ろした足から発生していた。

「俺アよオ、今まで何でも自分の思うとおりにしてきたつもりだつたンだ。まあ思つとおりつつても、何も考えなくてボーッと突っ立つても別に不自由ねエだけの“力”があつたわけだよ」

何でも“反射”してしまえばいい。

攻撃も敵意も、好意も。人と人との関わりも、思念すら自分は反射出来る。操作出来る。

今までそのやりかたで通用しなかつたのは一人だけ。だが、それはソイツ自身の中で完結する力だつたから、そこまで自分は気にしなかつた。

例えば全力で殴つてソレが壊れなかつたとしたら、自分の込めた力よりソレが硬かつた、頑丈だつたというだけの話。そこに自分が

主体になる問題は存在しない。

「なンツウか、つまんねエよナア。そりややる」とは結構あるけどよオ、やりてHことだつてあるけどよオ、結局それも作業ゲーみてエなモンだから、そこまで熱くなれねエわけよ

「 何言つてんだ、お前?」

「いいから聞けよ三下。今、すっげエ氣分がいレンだ、久しぶりにワクワクしてきやがる」

妹達との戦闘も、襲いかかってくる馬鹿共との戦闘も、どれも適当に遊ぶことはあっても熱くなることはなかった。

だからゲームは楽しい。自分の指先を、タイミングを、効率よく使ってクリアしていくのはベクトル操作とは別の問題で、そこでは敢えて反則的に優秀な自分の演算能力を使使しないで楽しめる。パズルゲームの類は別だが、格闘ゲーやレースゲーム、シミュレーションは負けても楽しい。

だが戦闘は別だ。つまらない、とんでもなくつまらない。自分の能力を適当に現状維持しているだけで終わってしまう。自分に干渉出来る奴なんて存在しない。それこそ、絶対無敵の第六位であろうと。一方通行はいずれ自分が、彼を殺せるようになつてしまつどう確信があった。

「だつてのによオ、クク、だつてのによオ、なンだよ『幻想殺し』<sup>イマジンブレイカー</sup>つてのは? クク、ククククク、ヒヤッヒヤッヒヤッヒヤー!」

笑いが、止まらない。嗤いではなく、久々の笑いだ。

知りたい、試したい、未知の存在への興味が尽きない。

ああなんてこつた、こんなに面白いことが転がってるなんて、やっぱり面倒くさがらずに外に出てみるものだ。

カガリに会う以前の自分なら、こうして人目の多いところまでわざわざ用事もなく出てフラつくようなことはしなかつただろう。今日は一緒にいない友人が頭をよぎり、理解していながらも頭を振つて脳の片隅へとやつてしまつ。なんといつか、認めてしまうのは癪だつた。

「おいおい勘弁してくれよ、またいつこうパターンですか？」

「あアそオだよ二下。分かつてんなら話は早いぜ、諦めて俺の実験に付き合いな」

ベクトルを操作、砂塵を巻き上げて路地裏の出口を覆う。別に壁にこそならないだろうが、人目を避けることは出来る。今はこの楽しみを邪魔してもらいたくなかった。

「さア、構えな三下。安心しろよ、殺すつもりはねエ。ただ全力で、俺の実験に協力してくれりやあいい。あアでも、あんまり期待外れだと勢い余つて殺しちちまうかもなア？」

「

一度巻き上げた風のベクトルを操作して、自分の周りをぐるぐると回らせる。

特に意味はないが、一方通行はこういった意味のない示威行為が嫌いではなかつた。台詞回しや大袈裟な動きなど戦闘に雰囲気を求めるところがあり、それは十分に弱点と言えるだろう。

もつとも学園都市序列第一位である彼にとってみれば、それは自分の実力に裏付けされた十分すぎるほど十分な余裕なのだろうが。

「 しうがねーな」

「あン?」

笑い続ける一方通行を前に、呆れたような顔をしていた当麻が少しの間だけ俯き、顔を上げる。

その顔を見た一方通行は、少しだけ面食らつた。今まで、自分と対峙した者には見ることの出来なかつた表情だつた。

「 風紀委員としてよくないかもしけねーが、喧嘩つてんなら相手になる。ていうか自信満々すぎて上条さん恥ずかしくなつてしまますよ、ホント。何が殺しちまつかもしけねー、だ。殺すだの殺さないだのバカバカしいぜ」

当麻は、笑つていた。それも嘲笑うわけでもなく、自らの上位を確信した笑いでもなく、ただ純粹に、不敵に笑つてみせていた。誰でも一方通行と戦う者は、自らの勝利を確信してニヤニヤしたり、或いはこちらを馬鹿にした笑みを浮かべているものだったが、

その誰とも違う、不思議な表情だった。

「 テメエ、ホントわかんねエ奴だな

「あ?」

「普通はよオ、俺みてエな奴に喧嘩売られたら逃げたり命乞いしたりするもンだろオが。右手だけナンだろ? 能力を無効果出来ンのは。だつたら俺に、身体の何所か触られただけでアウトだろオが。ヒーロー気取つてんですかア?」

讐められている、のだろうか。

学園都市序列第一位と名乗つてこそいないが、ある程度場数を踏んだ者なら対峙している相手がヤバイかヤバくないかぐらいは判別出来て然るべきだらう。

「まあお前が殺し合いしたいっていうなら話は別だけじさ、たかが喧嘩だろ? そのぐらいだつたら毎日みたいに大立ち回りやつてるから、今更身構えろつて言われましてもね。

もちろん上条さんとしては喧嘩しないで済むならそれに越したことはないわけですが、どうよ?」

「ふざけんな

「ですよねー」

じり、と当麻が戦闘体制を取る。狭い路地裏、正直この逃げ場のない戦場で一方通行に勝つことは不可能だ。

だが一方通行の能力を知らない当麻は愚直に右手を握りしめる。すべての幻想をぶち殺す、彼が持つ唯一の異能を。

「ていうかお前さ、自信満々すぎるだろ。自分が負けねーとでも思つてるんですか？」

「当たり前だろオガ。俺ア学園都市最強だぜ？」

「へつ、ご大層なこと言つてくれるじゃねーか。

いいぜ、お前が何でも思い通りに出来るつてなら

「

一方通行が接地している足に触れたベクトルを操作、巻き上げていた風が一点に収束する。

その仕草、わずかな仕草が喧嘩開始の合図だつた。当麻も、一方通行も、どちらも理解して、すぐさま戦闘へと移る。

「 その幻想をぶち殺す！－」

結果、一方通行が人除けのために撒いておいた砂塵は殆ど意味をなさなかつた。

調子に乗つた一方通行による戦闘が巻き起こす轟音はたちまち他の風紀委員や警備員を引き寄せ、二人の喧嘩はめでたく中断。

研究所や第一位という称号の関係で厳重注意で済んだ一方通行とは違つて一介の風紀委員である当麻は相當に絞られ、また、いつも

の口癖を叫ぶことになつたのだが。

そのあと二人がごくごくたまに街で出会つた際には立ち話をする  
ような関係になつたのも、それはまた、別の話である。

「不幸だああああああ――ツ――!――!――!――!――!――!――!

## 設定集『登場人物紹介』（前書き）

拙作に置いて極めて魔改造されてしまった方々、オリキャラについて説明していきます。  
項目が増えるごとに、最新話として掲載しなおしますので、ご注意下さい。

## 設定集『登場人物紹介』

カガリ

『正体不明、目的不明、“絶対無敵の”学園都市序列第六位』

保有能力：発火能力者／パイロキネシストLV5

所属：長点上機学園

好きなもの：物珍しいもの、面白いこと、弟妹

嫌いなもの：子どもを虐める人間、子どもに害があること

特技：無敵

天敵：不明

学園都市序列第一位である最強の超能力者、アクセラレータ一方通行の友人で、  
自らも超能力者の第六位である。

珍しいもの、楽しいものに対して興味津々であり、少しでも面白  
そうなことがあるとホイホイついていつてしまふ子供じみた性格を  
している一方、友人である一方通行アクセラレータや知り合った美琴などに対して  
は兄のような態度を取ることも多い。

夏場でも常に裾が脛まであるような長い白衣を羽織り、その下に  
籍だけ置いている長点上機学園の制服を着込んだ格好で昼間でも夜  
でもフランフラン学園都市のあちらこちらを彷徨いでいる。

目つきは鋭く優しげだが生気が宿っておらず、熱もあるかのよ  
うにフランフラン、あるいはユラユラとしていることが多い。引っ張つ  
たりするとまるで体重がないかのように軽いことが分かるだろう。  
基本的に食物を人前では取らず、飲み物、それも炭酸飲料ばかり  
を好んで飲む。また普通の男子高校生なら当然知っているべき一般

常識に欠け、下ネタなどにもアレルギー反応を示す。

## 【無尽火炎】

最強の発火能力であるが、基本的に発火能力者は応用性に乏しい  
能力者である。  
バイロキネシス

普通ならそのはずなのが、カガリの能力は異常な程に応用力がある。

彼の能力は物質的な質量を持ち、焰を壁代わりにして物体を受け止めた  
り、ハンマーのように相手を打ち据えたり出来る。またその焰に触れた相手に火傷を負わせることがないという、物理常識を超えたものだ。

また『絶対無敵の第六位』の看板が示す通りに、ありとあらゆる攻撃が通用しない。全ての攻撃は彼の体をすり抜け、一方通行による攻撃も一切効果が無い。

これらについての考察は只一人のとある研究者のみが把握してお  
り、彼が超能力者である所以となっている。  
レベル5 アクセラレータ

## 一方通行

『並ぶ者なき絶対を目指す、ゲテモノ好きかつ苦労性のゲーマー超能力者』

保有能力：ベクトル操作／LV5

所属：長点上機学園

好きなもの：ゲーム各種（但し除く頭脳ゲー等）、ゲテモノ料理  
嫌いなもの：雑魚

特技：演算、計算、頭脳ゲー

天敵：押しが強い女

学園都市数百万人の能力者の頂点に立つ、七人いる超能力者の第  
一位。“最強の上を行く無敵であること”を目指して『絶対能力進  
化計画』<sup>5</sup>に協力している。

かつて路地裏をフラフラしていたカガリと些細な切っ掛けで戦闘。  
一方通行にとつては最強であるはずの自分の能力が全く効かなかつ  
たこと、カガリにとつては“見過ごせない独りぼっちの弟”と彼を  
認識したことによつて、以降親友として行動の大部を共にするこ  
とになった。

筋金入りのゲームで、特に学園都市外レベルのゲームやレトロ  
ゲームをこよなく愛するが、腕はどうかと言われれば　お察し下  
さい。

本来、彼の尋常ならざる演算能力を用いればどのようなゲームだ  
ろうとクソゲーに成り下がるのだが、彼は敢えてゲームを楽しむた  
めに、その演算能力はゲームに使用せず、感覚と経験のみで楽しん  
でいる。そのため、どうしても頭を使わずにいられない頭脳ゲー  
は嫌っている。

また同様に筋金入りのゲテモノ料理好きである。

そのポリシーはとても常人には理解することなど出来ないが、普  
段は普通のものを食べているので味覚は正常。だからこそ、その趣  
味が全くもつて理解出来ないのであるが。

ゲテモノ料理好きのコミュニティなどでそれなりに顔も広く、そ  
の人脈の全てをゲテモノ料理探索のために用いている。

『解せぬ』

初春飾利

『激甘ボイスの天災ハッカー 可愛いバラはトゲだらけ ドス黒風<sup>ジ</sup>  
ヤツジメント 紀委員』

保有能力：定温保存

サーマルハンド

LV1

所属：柵川中学 / 風紀委員第177支部

好きなもの：甘味、PC、毒を吐くこと

嫌いなもの：自分の思いとおりにいかないこと

特技：PC操作全般

天敵：佐天涙子

頭に乗せた花飾りが特徴的な、コンピューターの操作に長ける凄腕ハッカー。

本来ならばそれなりの戦闘能力がなければ採用されないはずの風紀委員において、その類い希なコンピューター操作能力と低能力者とは思えないほどの演算能力、現場判断能力を買われて第177支部でもエースの座を担っている。

実際、黒子も現場をモニターしている初春の指示には問答無用で従い（従わされ）、彼女を制御出来るのは支部長である固法ただ一人だけ。

普段は温厚かつ押しの弱い普通のかわいらしい乙女であるが、ひとたびスイッチが入ると人格が豹変。笑顔のままトンデモない暴言や毒を吐き、時には人格すら軽く否定して命令を下す、初春 黒春と化す。

この状態の彼女に逆らうことは精神的に地獄に送られることを意味する。

佐天涙子

『深刻なネラーが発生しました 日本正統少林寺拳法初段JC』

保有能力：金剛禪少林寺拳法 / 初段

所属： 榆川中学

好きなもの：@ちやんねる、@ちやんねるまとめサイトのまとめ、  
修行

嫌いなもの：リア充、曲がったこと

特技：体を動かすこと、実力行使、ブラインドタッチ

天敵：飛び道具、能力者

榆川中学に通う、初春の親友。

日々ネットサーフィンを行う@ちやんねるーであり、情報の信憑性はさておいて、かなりの情報通。時にソース不明ながらも初春の情報網すら上回る情報を手にしていることもある。

またネトゲの類にも手を出しており、プレイ時間と全く釣り合わない神プレイの数々に、その界隈ではそれなりに名前を知られていたりして。

但し性格自体は原作と殆ど相違なく、たまに飛び出る@ちやんねるー用語以外は、正義感がさらに強くなつた頼もしい友人。

物心ついた頃から近所の道院（少林寺拳法で言つ、道場）に通つており、今では立派な黒帯を締める少林寺拳士である。

その技術は演舞においてすら一切の形骸化を排除し、実践に基づいた技術は同年代の中でも修行量も相まって完全に一線を画す。

下手に彼女の手首やら胸ぐらやらを掴んだが最後、一呼吸の間に急所を極められ、投げ飛ばされてしまつことだらう。そのせいいかにかく昔から手が早く、現在でも正義や人道に悖る行為の一切を許せない正義漢 もとい漢女である。

なお、押しが強いために一方通行はどうぞ巨乳で眼鏡の風紀委員アッセラーネータンと同じく、彼女のことを苦手としている。

ジャッジメ

## 上条当麻

『あらゆる異能を右手で碎く、このどこか立ち位置が不安定な熱血  
ジャッジメント  
風紀委員』

保有能力：幻想殺し／LV3  
イマジンブレイカ-

所属：風紀委員第171支部  
ジャッジメント

好きなもの：特売

嫌いなもの：田の前で行われる、理不尽

特技：そげぶ

天敵：巨乳で眼鏡の風紀委員  
ジャッジメント

超能力を打ち消す右手、幻想殺しを持つツンツン頭の風紀委員。  
イマジンブレイカー

身体検査では一切の反応が出ず、無能力者という扱いであったが、  
システムスキヤン レベル3  
街で偶然出会った眼鏡で巨乳の風紀委員の少女の紹介によって専門  
の研究機関でスキヤンを受け、結果として何の反応も出ず、異常性  
から様々な実験を受ける。

その後に実験結果から強能力者の判定を受け、通っている高校の  
レベル3  
中では一番のエリートに。流れで風紀委員まで務めることになり忙  
しい毎日を送っているが、奨学金は尋常じゃなく増えたので生活は  
安定。また能力が判明している関係上、無茶苦茶な補習を受けるよ  
うなこともない。（頭は相変わらずよろしくないが）

ちなみに不幸体質は当然のことながら変化なし。風紀委員として  
巡回に出ればたちまちイザゴザに巻き込まれ、相当に苦労している  
が、全ての事件を解決しているため実戦経験は豊富で頼りにされて  
いる。

その一環で知り合つた一方通行とは集に2・3回は繁華街で出く  
わし、立ち話をしたり非番の時はたまに遊んだりする仲。

眼鏡で巨乳の風紀委員 ジャッジメント

保有能力：不明／不明

所属：不明

好きなもの：フラフラしている学生、説教、カウンセリング、ムサシノ牛乳

嫌いなもの：フラフラしている学生

特技：スカウト

天敵：不明

一方通行アクセラレータに度々ちょっかいを出し、上条当麻ジャッジメントを風紀委員に勧誘した少女。

かなり団太い性格をしており、あからさまにヤバイ雰囲気を漂わせている一方通行アクセラレータに臆面もなく説教をしたり、あからさまに引け腰な当麻を無理矢理研究所に引きずつていつたりと、団太いというよりはイイ性格をしているとも言える。

ちなみに彼女も佐天と同じく、一方通行アクセラレータの天敵。

“あの子達”

詳細不明。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0088v/>

とある科学の無尽火焔《フレイム・ジン》

2011年10月7日18時16分発行